ISSN 0289−7830

研究紀要

14

目　次

富岡市下高瀬上之原遺跡出土刻書土器をめぐって
……高島英之　(1)

つぶさに墳陵の状態を徴し、測度し
——「上毛上野古墓記」の世界と吉田芝渓の古墳観——
……岸田治男　(27)

宮城村三夜沢赤城神社採集の中世遺物について
……追川佳子　(65)

三原田遺跡出土の凹石・磨石計量表
……能登　健　(69)

群馬県の水田・畠調査遺跡集成
……能登　健・小島敦子　(83)

1997・3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要

―― 14 ――

1997・3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

富岡市下高瀬上之原遺跡出土
刻書土器をめぐって

高　島　英　之

1　は　じ　め　に

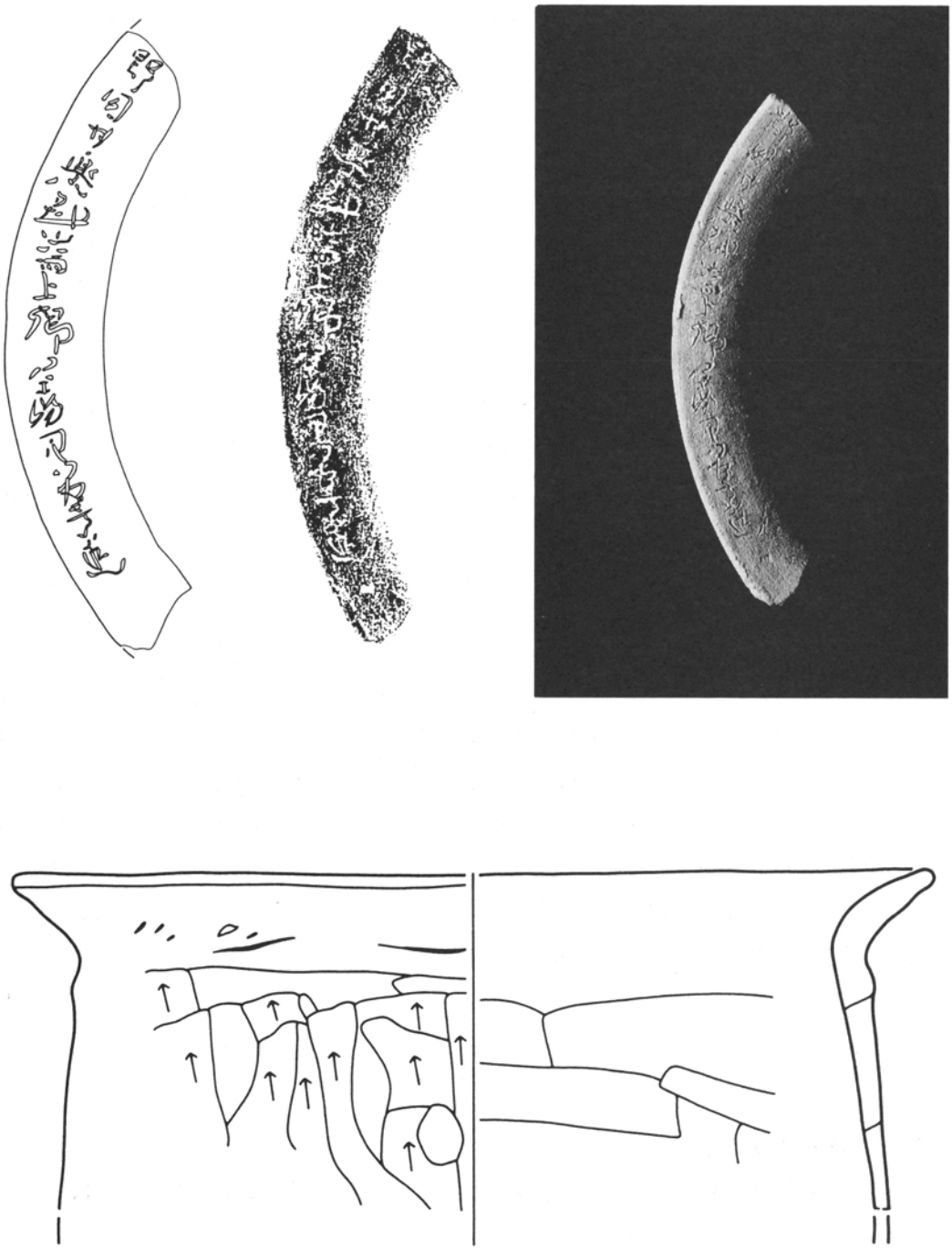
近年の全国各地における大規模開発事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の爆発的急増の結果、8・9世紀を中心とする集落遺跡から多種多様な文字資料が出土し、古代の村落社会の究明に重要な視角を提供していることは、つとに知られている通りである(1)。ただ、それらの一つ一つは、余りにも断片的であり、個々の資料に記された文字の意味や用途等を確定することが難しく、出土文字資料を使った古代村落研究は、出土量の膨大さとは裏腹に、資料操作の困難さ故、未だ多くの問題を抱えているというのが現状である。とは、言うものの、各々の出土文字資料の性格や特質を、それぞれ出土した遺跡・遺構との関連の中で、一つ一つ確定していくことによって、これまでは究明出来なかったような古代の村落社会の実情や深層を徐々に解明されていくものと思われる(2)。

今回は、こうした基礎的作業の一つとして、群馬県富岡市所在の下高瀬上之原遺跡から出土した「〔上〕□野国甘楽郡湍上郷戸主物マ□〔名万呂進ヵ〕□□」と記された刻書土器（**第1図**）を取り上げることにしたい。この資料は、1989年から1991年にかけて群馬県富岡市下高瀬で行われた下高瀬上之原遺跡の発掘調査によって出土し、1994年3月に調査機関である（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団より刊行された発掘調査報告書『下高瀬上之原遺跡―（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第177集・関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集』（以下、報告書と略す）に掲載されている。群馬県内でこれまでに出土している出土文字資料の例の中でも文字数が際だって多く、また内容的にもかなり具体的であるので、発見当初から注目されてきた資料であり、報告書中でも東野治之氏によって検討が加えられているが(3)、当該資料について私は、報告書とは別の解釈を持っているので、ここに誌面をお借りして自説を開陳し、以て諸賢のご叱正を仰ぐこととしたい。

2　当該刻書土器の出土状況

当該刻書土器自体の検討に入る前に、その出土状態について、発掘調査報告書の記述に依りながら概略を紹介しておくことにしたい。

下高瀬上之原遺跡は、群馬県の南西部に位置する富岡市のほぼ中央にある（**第2図**）。群馬・長野県境付近を水源とし東流する鏑川が富岡市のほぼ中央を流れているが、遺跡はこの鏑川の上位段丘の幅約600m・長さ約3,300mの細長い丘陵のほぼ中央に立地し、標高は220～260mで、下位



第１図　下高瀬上之原遺跡出土刻書土器

平坦地との標高差は40～60mほどである(**第3図**)。丘陵内は南北方向の樹枝状の小支谷に分断されている。本遺跡の発掘調査は、上信越自動車道富岡インターチェンジの建設工事に先立って行われたが、インターチェンジ周辺の調査対象面積だけで約11万m²に及んでおり、また、地形的にも小支谷で何箇所にも分断されているため、7つの遺跡として扱われた(**第4図**)。周辺には、当該資料と同時期である奈良・平安時代の遺跡は少なく、あったとしても竪穴建物跡10棟以下の小規模なものが多い。このことは、奈良時代以降、下位段丘面や平地の開発が進行し、それまで丘陵上や上位段丘面にあった集落が平坦地に下りていったことを物語っていよう。

本遺跡からは、縄文時代前期から近世にわたる多くの遺構・遺物が検出されている。主な検出遺構は、縄文時代前期後半竪穴建物跡1、弥生時代中期土坑跡10、古墳時代前期竪穴建物跡4、中期古墳7、後期埴輪窯2、飛鳥・奈良・平安時代竪穴建物跡43、土坑跡14、谷津状遺構1、近世土坑墓12、などである。

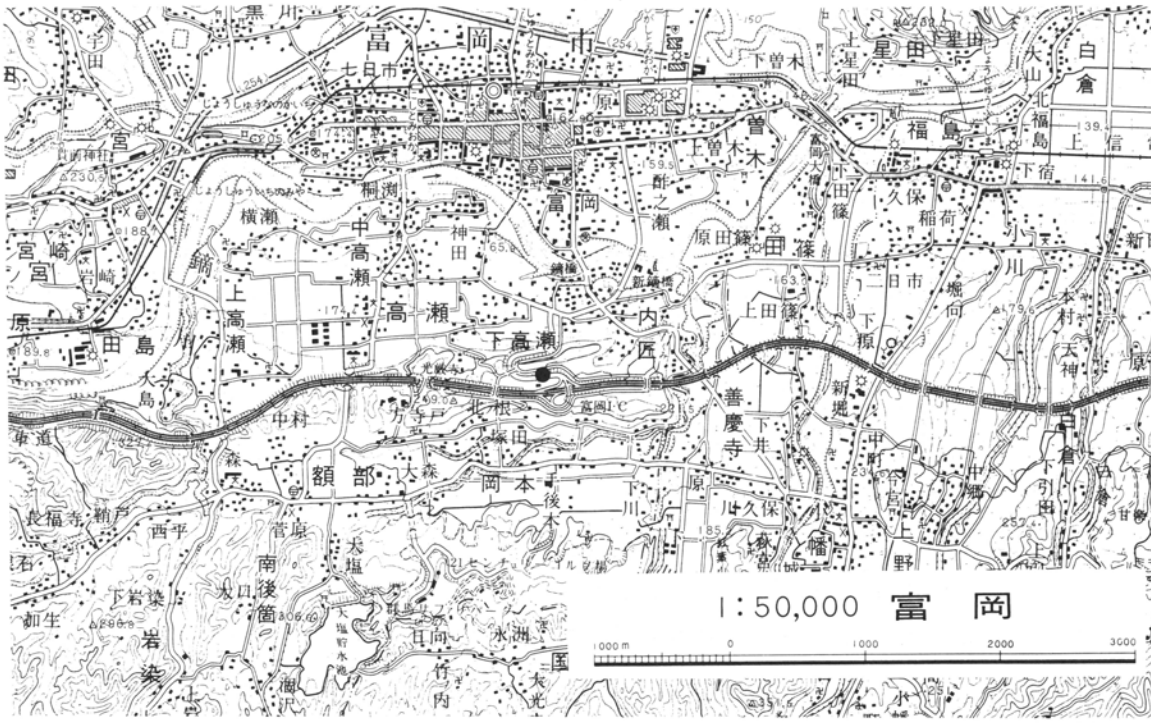
当該刻書土器は、調査区北側の台地上、谷津に向かって緩やかに下がりはじめる傾斜変換点に位置している121号土坑跡の底面直上から出土した(**第5図**)。121号土坑跡は、41・46号竪穴建物跡の埋土中に掘り込まれているため、明確な形では検出されなかったということであるが、南北に長い長円形状を呈し、長さ3.4・幅1.2・深さ0.6mである。この土坑が破壊している41・46号竪穴建物跡が7世紀末～8世紀前半と考えられることと、出土土器の年代観から8世紀中葉～後半ころのものと考えられている(**第6図**)。出土遺物は土師器片が59点のみで、埋土中と床面直上もしくは床下からの出土が半々程であるが、双方の土器の年代的な差はほとんどない(**表1**)。

なお、本遺跡から出土した他の文字資料としては、13号竪穴建物跡から2点、29号竪穴建物跡から8点、65号土坑跡から6点、2号谷津状遺構から4点の合計20点の刻書土器が出土している。文字は「王」が18点、「玉」が1点(29号竪穴建物跡)、「×」が1点(65号土坑跡)で、いずれも焼成後に釘のような鋭利なもので刻みつけて文字を記している。「王」の意味するところについて報告書中で関口功一氏は、史料上みえる甘楽郡の郡領氏族である壬生公氏の「壬生」を「生王」と標記する例があるので、「壬生＝生王」の氏族名を表すとする見方を示しておられるが[4]、1字のみの記載で如何様にも解釈できるところであり、もとより可能性の一つと言うにとどまろう。いずれにしても本集落内におけるある種の集団の標識的文字の一つであり、集落内の何らかの祭祀・儀礼等の行為に伴って記されたものと考えられよう[5]。

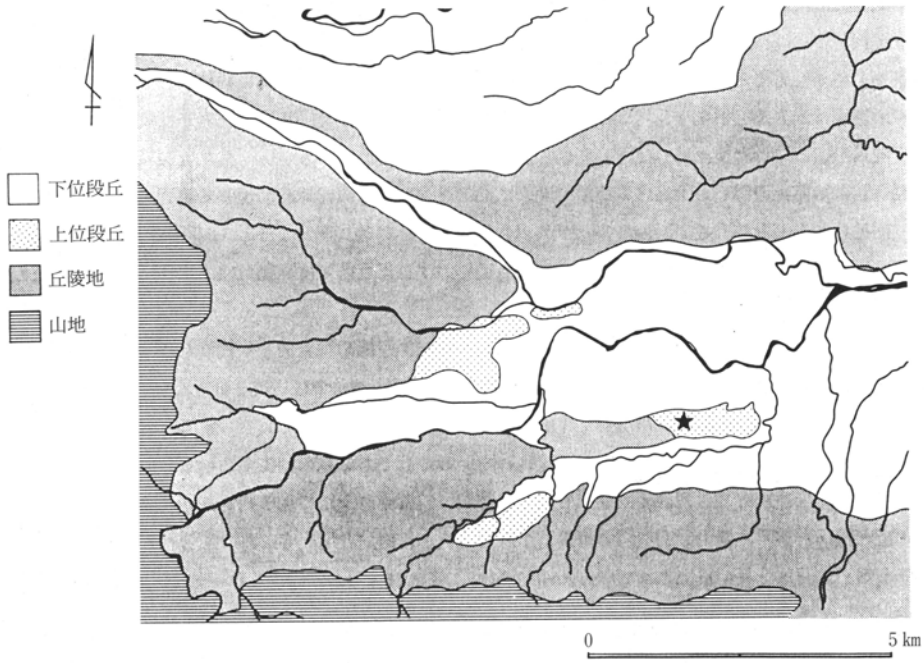
3　当該刻書土器の形態・内容

刻書土器は、口縁部の約1/3、口縁から体部にかけて8cm分ほどが残るだけの土師器瓶の破片で、口径は復元推定で約27cm、現存長約18cm、口縁部幅は約3cm。調整は、口縁部横撫で、体部外面篦削り、内面篦撫で、である。にぶい黄橙色を呈し、胎土には細砂・れきを含んでいる。年代は、8世紀の中頃から後半と考えられている。

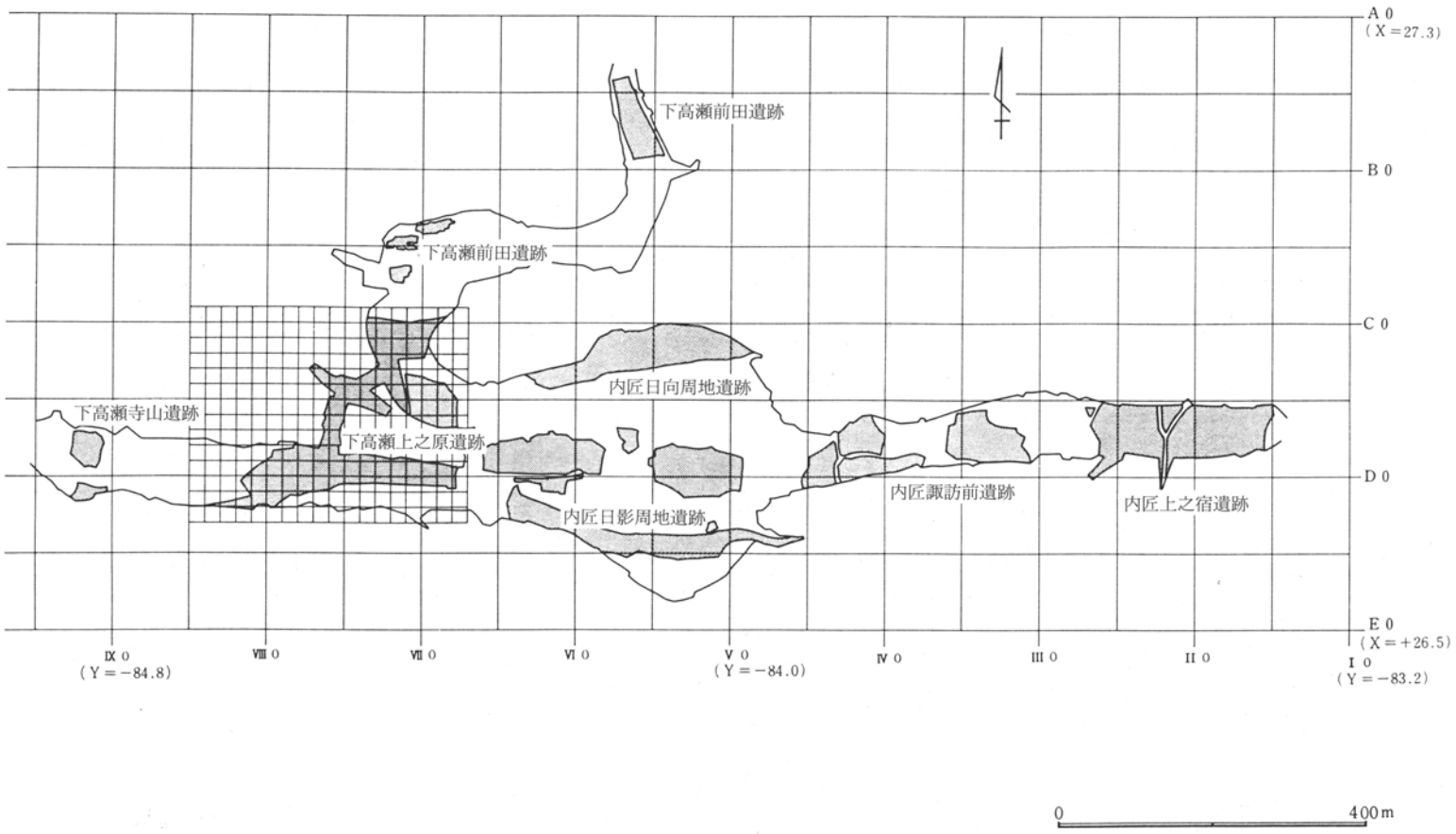
文字は16字分確認できる。土器の焼成前に、口縁部内面に、口縁のカーブに沿って篦書きされ



第2図　下高瀬上之原遺跡位置図

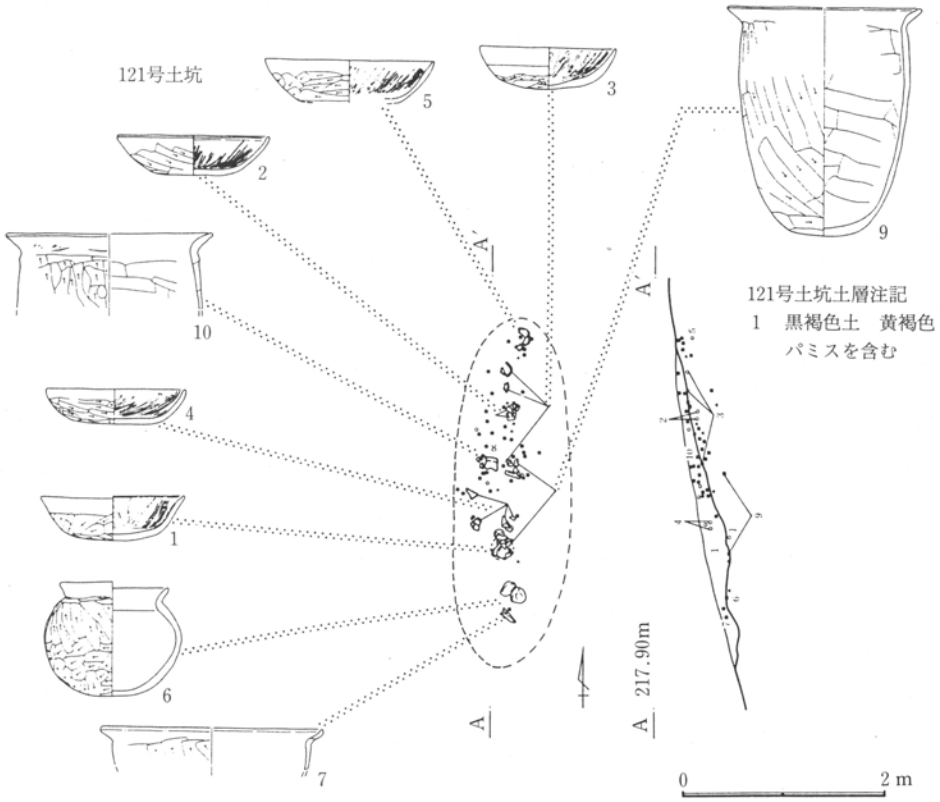


第3図　下高瀬上之原遺跡立地図



第４図　内匠遺跡群位置関係図

第５図　内匠遺跡群地形図



第６図　121号土坑跡と出土土器

121 1	土師器 坏	①14.0cm　②8.4cm ③4.3cm　④完形	①②にぶい褐 ③良好 ④細　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　体～底部外面篦削り 内面ナデ後螺旋状・放射状暗文	I E	外面一部黒変
121 2	土師器 坏	①14.8cm　②8.5cm ③3.9cm　④一部欠損	①にぶい橙 ②橙 ③良好 ④細　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　体～底部外面篦削り 内面ナデ後螺旋状・放射状暗文	I F	底部黒変
121 3	土師器 坏	①13.3cm　②— ③4.0cm　④一部欠損	①にぶい黄橙 ②にぶい橙 ③良好 ④細　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　体～底部外面篦削り 内面ナデ後螺旋状・放射状暗文	I E	底部黒変
121 4	土師器 坏	①13.4cm　②8.4cm ③3.3cm　④ほぼ完形	①②にぶい橙 ③良好 ④細　細砂・粗砂・パミスを含む	口縁部横ナデ　体～底部外面篦削り 内面ナデ後螺旋状・放射状暗文	I F	
121 5	土師器 坏	①(16.2cm)②(10.0cm) ③—　④口～径½	①②褐　橙 ③不良 ④普通　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　体～底部外面篦削り 内面ナデ後放射状暗文	I F	
121 6	土師器 小型甕	①(10.5cm)②— ③11.0cm　④口～底¾	①にぶい赤褐 ②黒褐 ③良好 ④普通　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　胴～底部外面篦削り 内面篦ナデ	VIII	
121 7	土師器 鉢	①(28.4cm)②— ③—　④口縁部片	①にぶい黄橙 ②にぶい黄橙 ③良好 ④普通　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　胴部外面篦削り内面 ナデ	X B	
121 8	土師器 甕	①(25.0cm)②8.7cm ③29.5cm　④口～底½	①にぶい黄褐 ②にぶい橙③良好 ④普通　細砂・粗砂・礫を含む	口縁部横ナデ　胴～底部外面篦削り 内面篦ナデ	VII	外面一部黒変
121 9	土師器 甕	器厚４～７mm ①口縁部片	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通　細砂・粗砂を含む	口縁部横ナデ　胴部外面篦削り内面 篦ナデ口縁部内面に焼成前線刻（連続する短沈線）あり	VIII	
121 10	土師器 甕	①(21.8cm)②— ③—　④口縁⅓	①②にぶい黄橙 ③良好 ④普通　細砂・礫を含む	口縁部横ナデ　胴部外面篦削り内面 篦ナデ外面に粘土付着　口縁部内面 に焼成前刻書（本文参照）	VII A	

表１、121 号土坑跡出土遺物観察表

ており、文字が記されている部分のみが辛うじて残存している。深くしっかりと刻まれているものの、筆画と調整の傷とが判別しにくい箇所がある上、字形がやや崩れていて判読は困難であるが、東野治之氏は、次のように釈読された[6]。

〔上〕　　〔名万呂進ヵ〕
「□野国甘楽郡湍上郷戸主物マ□□　□□」

私も、この東野氏の釈読に異義はない。字形が崩れているとはいうものの、達筆であり、文意も通っていることから、かなり文字を書き慣れた人物の手によるものと推測できよう。

「上野国」の「上」の部分は欠失しているが、後文の内容から、書き出しが上野国であることには間違いない。「甘楽郡湍上郷」は『和名抄』にもみえる上野国の郡郷名で、現在までの所、当該地名を記した木簡等がないため、その最古の標記例と言え、『和名抄』高山寺本や新出の名古屋市博本の記述の正しさを裏付けるものである。また、これまで甘楽郡湍上・湍下郷の故地としは、「瀬」と「湍」の音が共通することから、漠然と富岡市高瀬地区周辺に比定されてきたが、「湍上郷」と記された本資料がこの高瀬の地から出土したことによって、その比定がほぼ確実となった。なお、申すまでもなく「国＋郡＋郷＋貢進者名」という表記であることから「国郡郷里」制から「国郡郷」制に変わった天平12年（740）ころ以降のものということになるが、共伴土器の年代観とも一致する。

人名「物マ名万呂」の物部氏は、この地域周辺に多く見られる氏族名で、本遺跡からも程近い上野国一宮貫前神社を奉斎したとする伝承があるほか、当該資料と同じ甘楽郡内では、『続日本紀』天平神護元年（765）11月1日条に物部公蜷淵、同書天平神護2年（766）5月20日条に物部公牛麻呂がみえる。また、隣接する多胡郡では、上野国分寺跡出土文字瓦銘に多数、吉井町矢田遺跡出土の刻書紡錘車に「物部郷長」「物部一八」、同じく隣接する緑野郡には、平城宮跡出土木簡に「物部鳥麻呂」が見えるなど、鏑川流域の甘楽・多胡両郡を中心とする上野国西南部を支配する主要な勢力であったことが判明しており[7]、本資料はそれを補強するものとなった。

文末の「進」は「たてまつる」と読める。「進」の字の後が欠失しているが、後にスペースがあいているので、文はそこで終わっているものと思われる。全体の文意が「上野国甘楽郡湍上郷の戸主物部名万呂が（何物かを）進上する」となるので、何らかのものの供献・貢納に関わるものと考えてよいだろう。文字は焼成前に書き入れられているので、土器の製作時点から供献・貢納用として認識されていたものと考えられる。土師器であるため、「甘楽郡湍上郷戸主物マ名万呂」が遠方の窯・工房に発注して製作させたと言うよりも、集落内や近接した場所で製作された可能性の方が高いのではないかと思われる。

4　当該刻書土器の類例の検討

墨書・刻書を問わず土器に文字が記されたものの例は、今日においては、全国的にもかなりの数に上っているが、本資料のように国郡郷戸主姓名が記されたものは現在までのところ非常に少

ない。もちろん群馬県内でも初めての出土例である。

国郡郷戸主姓名が記されているという点では、貢進物付札木簡や文字瓦銘の書式とも良く類似している。本資料を釈読された東野治之氏も、税目の記載はないものの戸単位に賦課された何らかの貢納物に関わるものであり、土器そのもの、あるいは土器に入れられた内容物が公的な貢納物であるとの見解を示しておられる[8]。そう推定するならば、集落内あるいは近隣で焼成され、国府・郡家等への輸送途中に破損して廃棄されたか、あるいは貢納を目的としながらもなんらかの不測の事態により中止したかということになろう。しかしながら集落遺跡から出土していることからみれば、貢納途上の廃棄や貢納の中止などの事態を想定したとしても、やはり不自然さは拭いきれない。本資料を公的負担に関わるものと位置づけて良いのかどうか、資料的意義を考える上で、まず同様の記載内容の墨書・刻書土器の例を検討しておくことにしたい。

先にも述べたように、このような国郡郷等の地名と人名が記された墨書・刻書土器の出土例は全国的にも余り多くないが、本資料以外にも管見の限り20例ほどある（**表２・第７図**）。なお、先述したように地名＋人名を記載した資料としては文字瓦銘があるが、文字瓦銘については公的或いは知識物としての貢納に限られており、貢進物付札と同様、用途・機能は明白であるので、ここでは比較検討の対象とはしない。

１は、福島県いわき市荒田目条里遺跡で埋没した河川跡から斎串・人形・馬形・刀形・弓形・矢形・舟形・絵馬・陽物などの木製祭祀具や木簡などと共に出土したもので、土師器杯の体部外面に正位で人面および「磐城□磐城郷丈部手子麿　召代」という文言が記されている。人面が描かれていることや「召代」という文言が記されていることから祭祀で使用されたに間違いなく、陸奥国「磐城」郡「磐城郷」の住人である「丈部手子麿」が、この土器を依代として神を招いた際に使用されたものと考えられる。出土遺跡に隣接して延喜式内社大国魂神社が位置しており、「丈部手子麿」が招いた神は、国魂神であった可能性が高い。

２～５は、千葉県佐原市吉原山王遺跡から出土したもので、４点とも土師器杯の体部外面を横向きに一周するような形で記されている。いずれも基本的には「国＋郡＋某の女に替えて進上する＋年月日」という書式であったものと考えられる。３の文末「替」の後の「承・・・」は、４の文末の「・・替」の後が「□□年四月十日」となっている点からみて、「承和某年」(834～848)という年号が記されていたものと考えられる。なお因みに、同じ千葉県の八千代市北海道遺跡からは、「承和五年二月十□・□　□□」と「承和」の年号が記された墨書土器が出土している。具体的には「下総国香取郡大杯郷中臣某女替進上　承和某年某月某日」という書式であったと考えられる。この資料について、調査担当者の栗田則久氏・釈読を担当された平川南氏は、国郡郷＋人名という貢進物付札の書式と類似し、記載内容が正倉院文書の天平宝字５年（761）12月23日付甲斐国司解（『大日本古文書』四－523～524）の仕丁の貢進交替文書に、

甲斐国司解　申貢上逃走仕丁替事

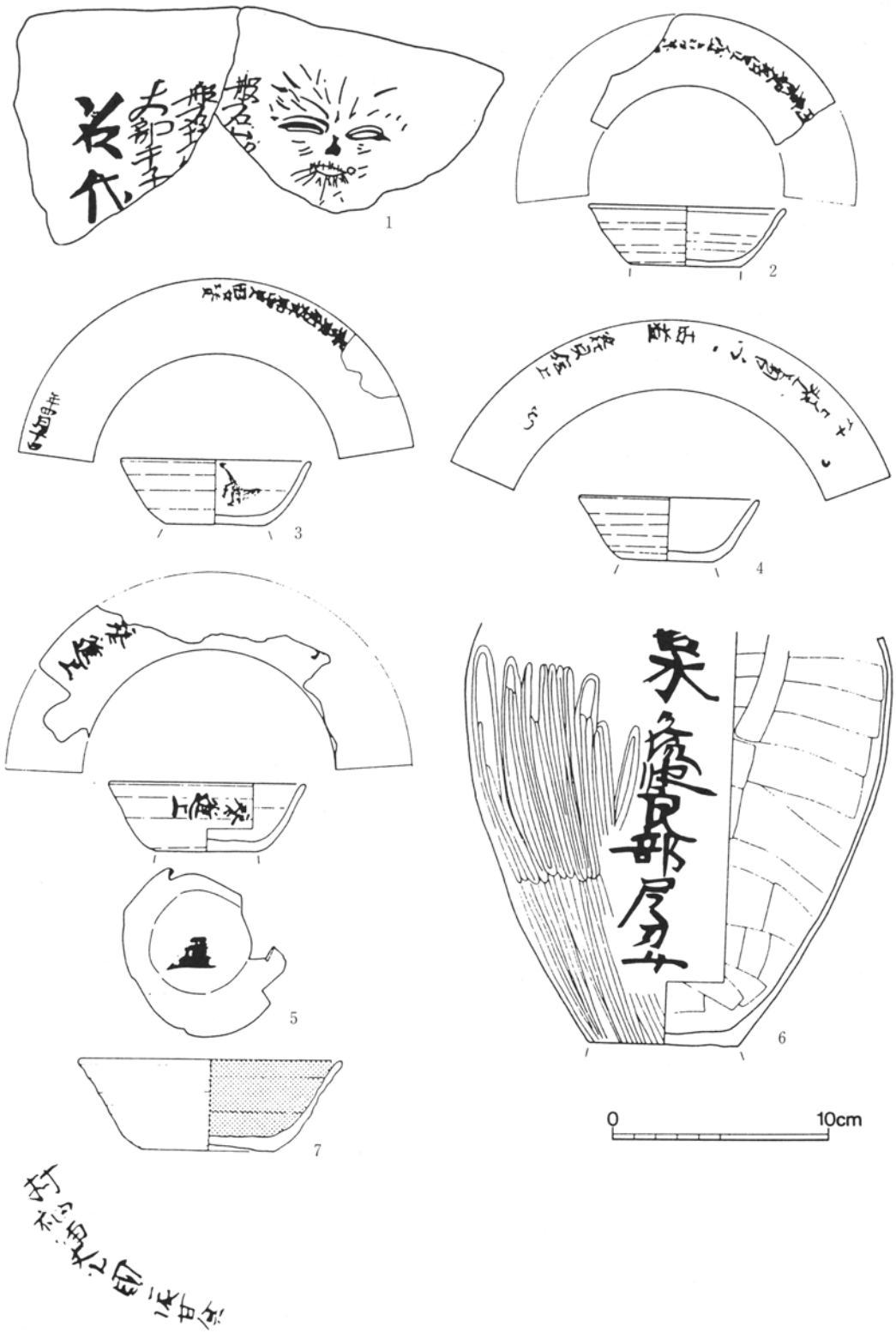
坤宮官斯丁巨麻郡栗原郷漢人部千代　年三十二左手於庇

表２　「地名＋人名」記載墨書・刻書土器一覧

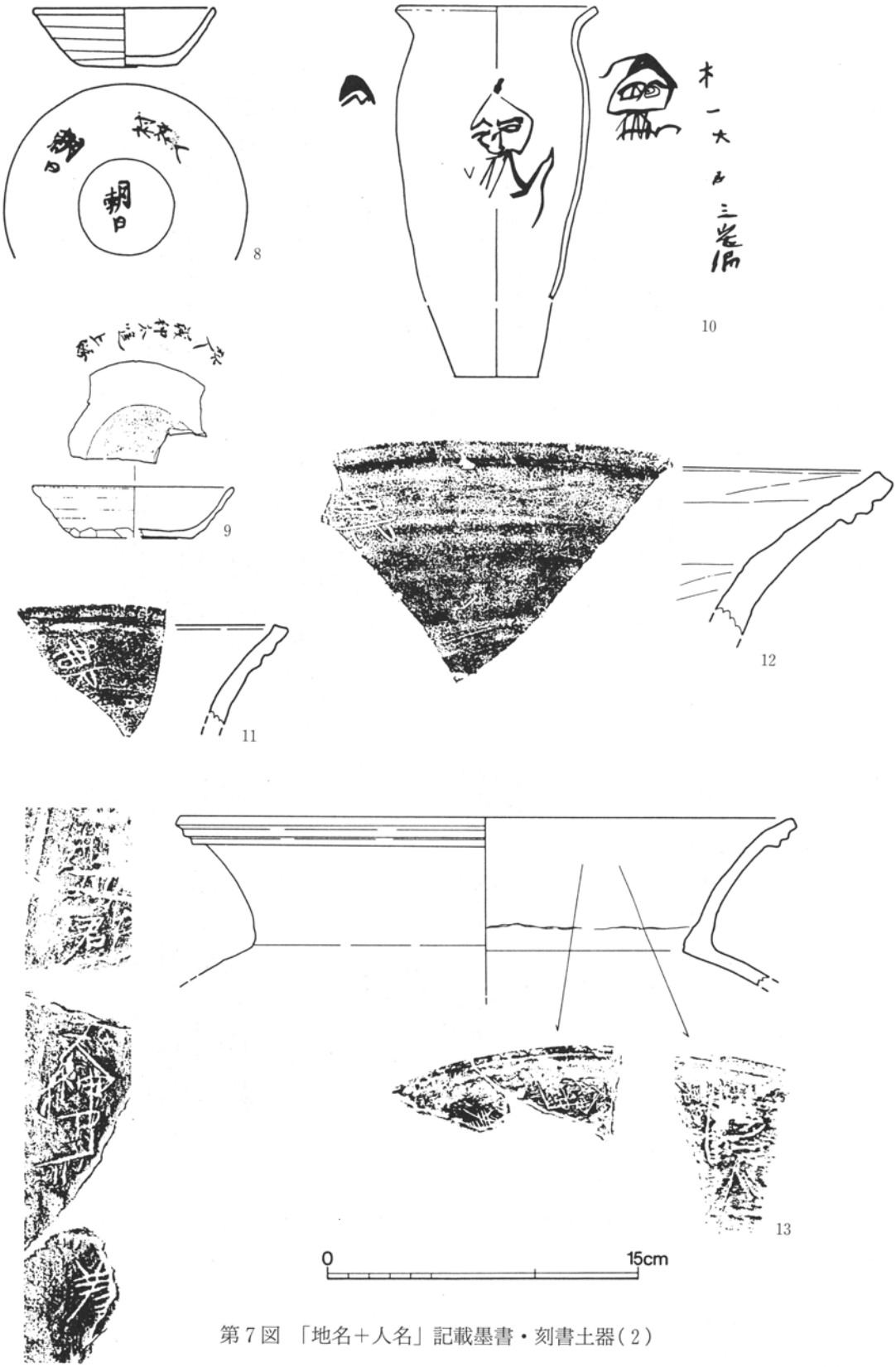
	遺跡名・所在地	墨書部位・方向	釈　　文	
1	福島県いわき市 荒田目条理遺跡	土師器杯・ 体部外面正位	「（人面） 磐城□ 磐城郷 丈部手子麿 召代」×	1
2	千葉県佐原市 吉原山王遺跡	土師器杯・ 体部外面横位	×「□香取郡大杯郷中臣人成女之替承□」×	2
3	〃	〃	×「□香取郡大杯郷中臣人成女之替□□年 四月十日」×	
4	〃	〃	×「□□□□道女替進上」×	
5	〃	〃、底部外面	×「□替進上」×・「主」	
6	千葉県我孫子市 新木東台遺跡	土師器瓶・ 体部外面正位	〔泉ヵ〕〔女ヵ〕 ×「□久須波良部尼刀□」	3
7	千葉県八千代市 権現後遺跡	土師器杯・体部 外面横位	「（人面）村神郷丈部国依甘魚」	4
8	千葉県八千代市 北海道遺跡	〃、底部外面	「朝日・村神・朝日」	5
9	千葉県芝山町 庄作遺跡	土師器杯・ 体部外面横位	「上総□・・・・・・・秋人歳神奉進」	6
10	神奈川県藤沢市 南鍛冶山遺跡	土師器瓶・ 体部外面正位	「相模国大住郡三宅郷」×	7
11	福岡県大野城市 牛頸井手窯跡	須恵器瓶・ 口縁部内面横位	〔哥ヵ〕 「那□」×	8
12	〃	〃	「那」×〔養〕	
13	〃	〃	「那哥郡□□□□大神部□□□」×	
14	福岡県大野城市 牛頸ハセムシ窯 跡	須恵器瓶・ 口縁部外面正位	×「仲郡□」×	9
15	〃	〃	「筑紫前国奈珂 郡手東里 □□□□□呂 □□□□□□ □□乎万呂 併三人奉 □□瓶一隻 □□□□□年」	
16	〃	〃	×「□国奈珂郡□里」×	
17	〃	〃	×「□呂□□」×	
18	〃	〃	×「大神君□□ 大神□麻呂 内倉人麻呂 併三人奉 □瓶一隻和銅六年」	
19	〃	〃	×「□年調大瓶」×	
20	〃	〃	「筑紫前国奈珂郡 手東里大神□身 □□ □□□ 併三人 調大瓶一隻和銅六□」	

文　献

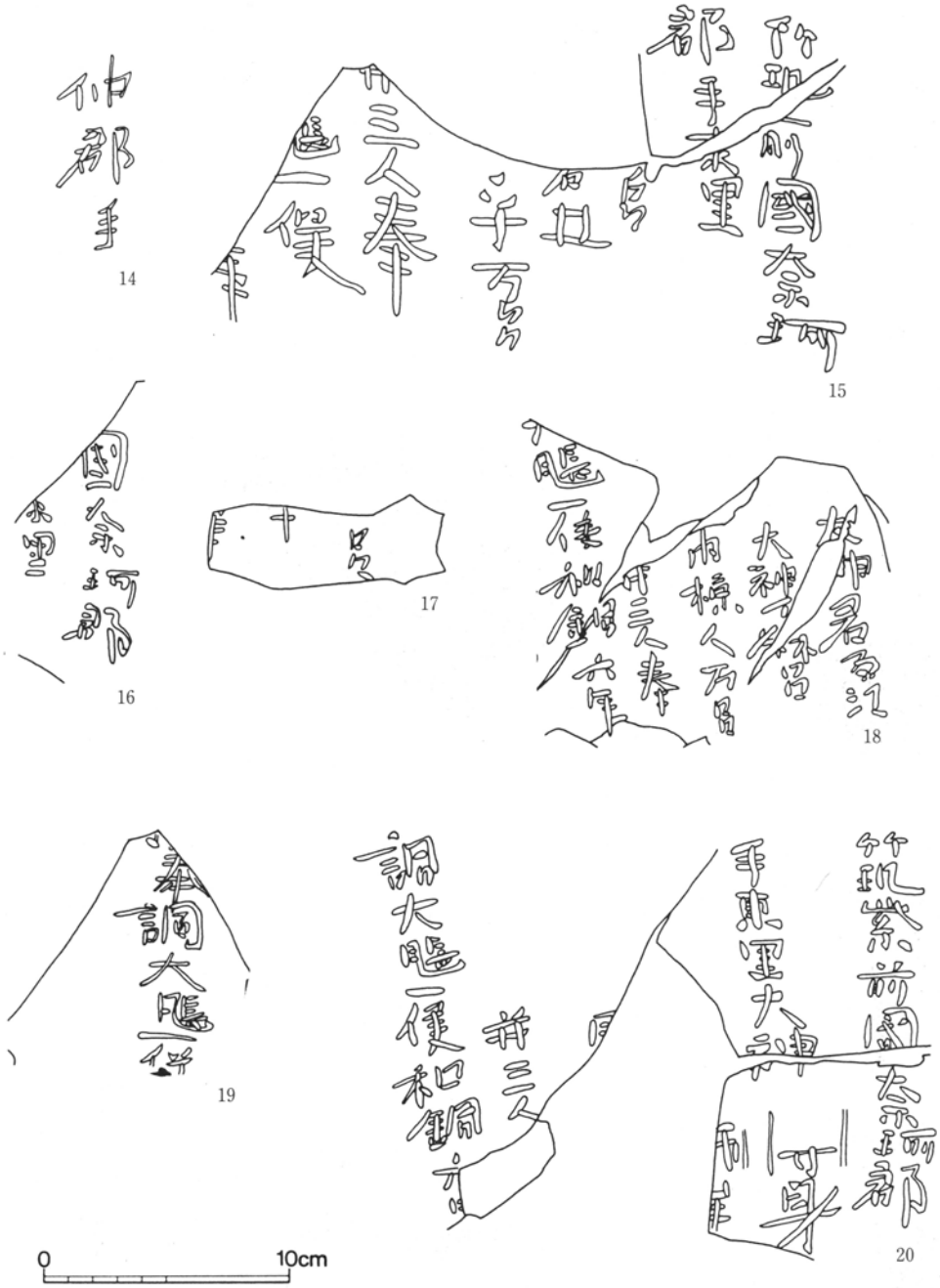
1　吉田生哉「1994年出土の木簡福島・荒田目条里遺跡」(『木簡研究』17 1995)
2　㈶千葉県文化財センター『佐原市吉原山王遺跡』1990
3　房総歴史考古学研究会『房総歴史考古学論集1房総における歴史時代土器の研究』1987
4　㈶千葉県文化財センター『八千代市権現後遺跡』1984
5　㈶千葉県文化財センター『八千代市北海道遺跡』1985
6　小原子遺跡群調査会『小原子遺跡群』1990
7　藤沢市文書館運営委員会『藤沢市史研究』24 1991
8　福岡県教育委員会『牛頸窯跡群』II 1989
9　大野城市教育委員会・大谷女子大学資料館『牛頸』II 1989



第７図　「地名＋人名」記載墨書・刻書土器（１）



第７図 「地名＋人名」記載墨書・刻書土器（２）



第７図 「地名＋人名」記載墨書・刻書土器（３）

右、同郷漢人部町代之替

（中略）附都留郡散仕矢作部宮麻呂申上　謹解。

天平宝字五年十二月廿三日 従七位上行目小治田朝臣 朝集使（後略）

と見える点や、天平６年（734）出雲国計会帳（『大日本古文書』一－599～600）に、

（前略）

天平六年

四月

一、八日進上衛士逃亡併死去出雲積首石弓等人替事

右附意宇軍団二百長出雲臣広足進上

一、廿日進上衛士勝部臣弟麻呂逃亡替事

右附神門軍団五十長刑部水刺進上

七月

一、廿三日進上衛士私部大嶋死去替事

右附熊谷軍団百長大私部首足國進上

（後略）

とみえる衛士の交替に関する記述と似ていること、さらに、土器に記された「香取郡大杯郷」が、天平勝宝２年（750）12月28日付治部省牒（『大日本古文書』三－477）に「婢稲主女年廿 右頬黒子 下総国香取郡神戸大槻郷戸主中臣部真敷之婢」と、さらに香取文書の大禰宜実房譲状に「下総国香取神領大槻郷内」云々とあるように、香取神宮の神戸とみえること、女性の氏が「中臣」であること等の点から、神郡の神戸から香取神宮への女性の貢進交替に関わるものと考えておられる[9]。また、宮瀧交二氏は、この栗田・平川両氏の考えをさらに進めて、香取神宮に奉仕する童女＝「物忌」の交替の儀式に際して使用されたものとの見方を示しておられる[10]。

これらの土器に記載された郡郷名が香取神宮の神戸であることや、人名が「中臣」氏であるところからみても、私は上記の諸氏の説を積極的に肯定すべきと思うが、その一方でこれらに記された文字を素朴に解釈し、下総国香取郡大杯郷の中臣人成もしくは「□□道」の女を神の依代として貢進する代替としてこの土器を進上したとの想定も可能ではないかと考えている。そうすれば敢えて香取神宮との関連を想定しなくとも、村落内の祭祀に関わるものとの解釈も成り立ち得よう。なお、器自体に神が依ますことは[11]、『日本書紀』崇神10年条に、

倭迹迹姫命、心の裏に密に異ぶ。明けるを待ちて櫛箱を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。

其の長さ大さ衣紐の如し。即ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢて、忽に人の形に化りたまふ。

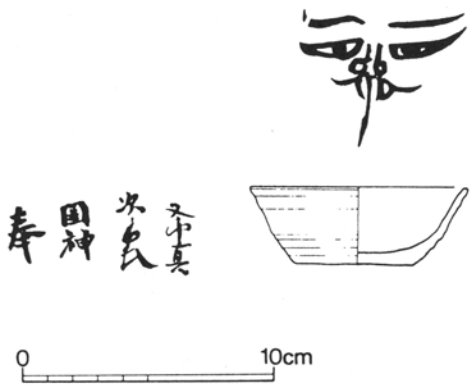
と見られるように、三輪山のオオモノヌシノカミが小蛇に姿を変えて妻のヤマトトトヒメノミコトの箸箱の中に姿を隠していたという伝承や、『常陸国風土記』那賀郡茨城里条に、

茨城の里。此より北に高き丘あり。名を哺時臥の山といふ。古老のいへらく、兄と妹二人ありき。兄の名は努賀毗古、妹の名は努賀毗咩といふ。時に、妹、室にありしに、人あり、

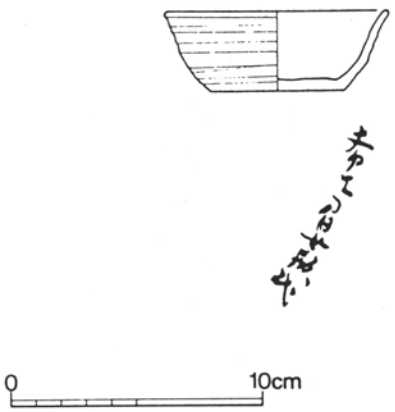
姓名を知らず、常に就て求婚ひ、夜来たりて昼去りぬ。遂に夫婦と成りて、一夕に懐妊めり。産むべき月に至りて、終に小さき蛇を生めり。明くれば言とはぬが若く、闇れば母と語る。是に、母と伯と、驚き奇しみ、心に神の子ならむとおもひ、即ち、浄き杯に盛りて、壇を設けて安置けり。一夜の間に、已に杯の中に満ちぬ。更、ひらかに易へて置けば、亦、瓮の内に満ちぬ。此かること三四して、器を用ゐあへず。母、子に告げていへらく、「汝が器宇を量るに、自ら神の子なることを知りぬ。我が属の勢は、養長すべからず。父の在すところに従きね。此にあるべからず。」といへり。時に、子哀しみ泣き、面を拭ひて答へけらく。「謹しみて母の命を承りぬ。敢へて辞ぶるところなし。然れども、一身の独去きて、人の共に去くものなし。望請はくは、あはれみて一の小子を副へたまへ」といへり。母のいへらく、「我が家にあるところは、母と伯父とのみなり。是も亦、汝が明らかに知るところなり。人の相従ふべきもの無けむ。」ここに、子恨みを含みて、事吐はず。決別るる時に臨みて、怒怨に勝へず、伯父を震殺して天に昇らむとする時に、母驚動きて、瓮を取りて投げ触てければ、子え昇らず。因りて、此の峰に留まりき。盛りし瓮と瓶とは、今も片岡の村にあり。其の子孫、社を立てて祭りを致し、相続きて絶えず。

と見えるように、神の子の「小蛇」を土器に入れて安置するという伝承や、1の「磐城□磐城郷丈部手子麿 召代」、「丈部真次□代国神奉」(千葉県芝山町庄作遺跡出土 **第8図**)、「丈部乙刀自女形代」(千葉県八千代市北海道遺跡出土 **第9図**) 等の例のように土器そのものに神の「召代」(依代と同意)・「形代」であることを端的に示す墨書がなされている例からもうかがえる。いずれにしてもこれらの資料は、村落内の祭祀・儀礼等の行為に関わるものであることには相違ないだろう。

6は、千葉県我孫子市新木東台遺跡出土のもので、体部外面に正位で「□(泉ヵ)久須波良部尼刀□(女ヵ)」という人名が記された土師器瓶である。上部が欠損しているので「久須波良部」の前の文字が不明確であるが、報告書に掲載された写真や実測図で見る限り、少なくとも報告書のように「泉ヵ」



第8図　千葉県芝山町
庄作遺跡出土墨書土器



第9図　千葉県八千代市
北海道遺跡出土墨書土器

とは釈読できない。おそらく姓名の前に記されていた地名の一部と思われ、当該刻書土器と同じく地名＋人名という書式で、人名はこの土器の供献者名であろう。

7も、前5例と同じく千葉県の八千代市権現後遺跡から出土した資料で、1～4と同じく土師器の杯の体部外面横位に「村神郷丈部国依甘魚」と記された人面墨書土器である。文意は「(下総国印旛郡）村神郷の丈部国依が供献した御馳走」と言う意味で、この土器に供物を盛って神に捧げたものと考えられる[12]。人面墨書土器でもあり、これも祭祀に関わるものであることは間違いない。

8も、同様に千葉県の八千代市北海道遺跡から出土した土師器杯で、体部外面横位に「村神丈・朝日」、底部外面に「朝日」と記されている。「朝日」は現時点では意味不明である。また器面の磨滅が激しい為、明確には判読できないが、「村神丈」は6と同じく「下総国印旛郡村神郷の丈部某」を意味しており、6と同様下総国印旛郡村神郷の丈部某が神に対して何物かをこの土器に入れて供献したことを意味すると見てよかろう。

9は、小さな断片に「秋人歳神奉進 上総」と記されている。「・・奉進」の後の部分が約1文字分スペースが開いていることから「・・奉進」が書止で、書き出しは「上総・・」であろう。現存する約1/3ほどの破片から文字の数と大きさを基準に割り付け、推定復元すると全体の文字数は空きスペースを入れて約19字分となる計算である。すなわち全体の構成は「上総国□□郡□□郷□□□秋人歳神奉進」と想定でき、上総国某郡某郷の某氏秋人が正月に福をもたらす歳神に供献物を入れて奉ったという意味にとれ[13]、当該資料をはじめとする前例と同種の用途・機能を有していた資料の一つと言うことになろう。文中にに「歳神」と、「奉進」する対象が明示されているだけ、当該資料より具体的ではあるが、全体の構成といい、書止の「奉進」の語といい、当該資料と非常に良く類似したものといえるだろう。

そのような意味では10も同様である。これは神奈川県藤沢市南鍛冶山遺跡から出土した資料で、土師器瓶の体部外面正位で4面に人面が描かれ、人面の脇一箇所に「相模国大住郡三宅郷」と記されている。おそらく郡郷名の後にはこの人面墨書土器を供献した人物の名前が記されていたものと思われる。これも人面墨書土器であるから祭祀に使用されたことには相違ないが、これまで見てきた例と同じように国郡郷（供献者）名が記されている。

11～20は、須恵器の窯跡から出土したものである。文字の記入は土器の焼成前で、且つ窯跡からの出土であるため、出土地と文字内容が直接関係するものではない。

11～13は、福岡県大野城市牛頸窯跡群井手4号窯跡灰原から出土したもので、須恵器大瓶の口縁部内面に、口縁に沿って記されている。文字の記入の仕方、位置・配列は当該資料に近い。いずれも破片で、11・12は「那」1文字分しか残っていないが、13は「那哥郡□□□大神部□□ 養」と釈読されている。これらの資料を釈読された倉住靖彦氏は、末尾の「養」の字について、文字の配列や前字との間にスペースが無いことから人名の一部と見るべきで、年号の「養老」（717～724）の可能性はないとしておられるが[14]、貢進物付札の書式では一般的に年号の記載は

文末であり、また墨書・刻書土器でも２・３・15・18・20等のように文末に年号がくる例もある上、２・18・20のように前字と年号との間にスペースがないものもあるので、私はこの「養」は、「養老」の年号が記されたものと考えておきたい。そうなると11～13は、「那哥郡某郷大神部某 養老某年某月某日」という貢進物付札と共通する書式と想定でき、何らかの目的でこの須恵器瓶もしくは内容物を貢進・供献したと推測できる。但し、焼き損じの為なのか結果的には生産段階で廃棄されており、いずれにしても当初の目的においては使用されなかったわけである。また、貢進・供献に関わるとはいえ、それが公的な貢納物なのか、祭祀なのかは、資料そのものからは判別しない。

14～20は、11～13が出土したと同じく福岡県大野城市の牛頸窯跡群の一部をなす牛頸ハセムシ窯跡群12地区最下段灰原から出土した資料である。いずれも須恵器瓶の口縁部外面に、焼成前に篦状の工具に刻まれている。14のみが横方向、他はすべて縦方向である。比較的残りの良い15・18・20等の文章から復元すると、基本的には「筑紫前国（筑前国）奈珂郡手東里某・某・某併三人奉調大瓶一隻 和銅六年某月某日」という記述がなされていたものと思われる。因みに、和銅６年は713年で、13に記されていたと推定できる「養老」よりは若干早い。筑前国を「筑紫前国」という古い表記法で記している点からも古相がうかがえる。11～13は「那珂郡」と郡名からの書き出しであるのに、15・16・20では「筑紫前国」「筑前国」と国名から書き出しているなど[15]、表記上の差異もあるにはあるが、ともに筑前国那珂郡在住の人物からの貢進であること、人名が、13では「大神部」氏、18・20では「大神君」「大神部」氏であること[16]、記年銘だけでなく土器そのものの年代観からみても近いこと、など、近い場所から出土しているだけに11～13と共通する部分が多い。18・19・20に「奉調大瓶」という文言があるので、これらが租税の調として貢納されたものであることは間違いないと考えられている。先にも述べたように「国＋郡＋郷（里）＋貢進者名＋年月日」という貢進物付札と共通する書式である。よく知られているように賦役令、調皆随近合成条に

凡調皆随㆑近合成。絹施布両頭及糸綿嚢、具注㆓国郡里戸主姓名年月㆒日、各以㆓国印㆒々之。

とあるように、調の貢納に際しては、国郡里（のちに郷）戸主姓名年月日等を記入する事になっていた。令文に定められているのは、繊維製品の貢納に際しては実物に書き入れよということであるが、貢進物付札がつけられたのも、この令文を根拠としてのことと考えられている。13～19よりも200年も後の史料であるが『延喜主計式』によれば筑前国は調の貢進国となっており、また大瓶は３人に１口が課せられているが、その記述とも合致する。これらの点から見ても「奉調大瓶」の文言といい、書式といい、調としてこの瓶を貢納したことは間違いないように見受けられる[17]。そう考えるならば、これらと出土地・記載内容ともに近い10～12も、同様に調の貢納に関わるものとの見方が出来るかもしれない。また東野治之氏が、当該資料について戸単位に賦課された貢納物に関わるものと想定されたのも、こうした類例の存在を根拠の一つとしてのことであろう。

以上、当該資料の類例20点について検討してきたが、祭祀に関わる資料と、調の貢納に関わるとみられる資料がおよそ半々であった。これまでの検討をふまえて、次節では当該資料の性格、文字が記されたことの意味、背景等について検討していくことにしたい。

5　当該資料の意義・性格・背景

さて、最後に、当該資料に文字が記されたことの意味、資料的性格・用途やその背景について考えてみたい。

前節で「地名＋人名（＋年月日）」という書式をもつ、当該資料の類例20例についてみてきたが、祭祀に使用したと見られるものと公的な貢納物の貢進に関わるものの２類型があることがわかった。公的な貢納物に関わるものが「国＋郡＋里（郷）＋貢納者名＋貢進年月日」という記述をとるのは先述したように賦役令調皆随近合成条の規定に基ずくことによるが、11～20をそうした公的貢納物の貢進に関わるものと位置づけて本当に良いのか、まずこの点について検討してみることにしたい。

確かに18・19・20には「奉調大瓶」と明記されているし、また、後の『延喜主計式』の規定とも合致しているので、14～20が調として貢納されたのは間違いないように見受けられる。しかしながら、藤原宮・京跡、平城宮・京跡、長岡京跡などの宮都遺跡の発掘調査によって、租税の貢納に際して用いられた貢進物付札が大量に出土していることは周知の通りであるが、18・19・20のように通常、貢進物付札に記すべき内容を実物に記したものの出土例は皆無と言ってよい[18]。木簡が残存する状況と土器類のそれとを勘案すれば、仮にそうした墨書・刻書土器がかなりあったとすれば、もっと類例があってしかるべきであろう。宮都や地方官衙の遺跡から膨大な量の貢進物付札が出土しているのに比して、実物記載の物が全くと言っていいほど出土していないことからみれば、仮に貢進物付札を付ける代わりに実物に記すような場合があったとしても、極めて例外的なごく少数の事例であると思われる。しかもこれまで見てきた資料は、仮に公的な貢納物に関わるものだとしても、いずれも生産段階で廃棄されてしまっており、所期の機能を果していないことになる。これらのみがごく少数の例外的な事例との想定も成り立ち得ないではないが、そう考えるにはかなりの不自然さは否めない。

そこで、14～20の一括出土資料についても、「奉調」を「みつきを奉る」と読み、貢納先を現世の官衙や豪族等と考えるのではなく、神仏あるいは疫神・邪神・悪霊の類とみて、１～９と同様祭祀に関わるものと考えればよいのではないだろうか。窯跡から出土している点については、先に焼き損じによる破損・廃棄との想定をしておいたが、具体的な内容までは伺い知るべくもないが、灰原における祭祀の際に使用し、その場所で廃棄されたと考えることも可能であろう。11～13についても同様であり、また、当該資料についても祭祀に伴うものとの想定が可能になってこよう。

ところで、これまで見てきたような「地名＋人名」が記載された出土文字資料の類例としては

第10図に示したような刻書紡錘車もある。これは、埼玉県本庄市南大通り線内遺跡から出土したもので、紡錘車の上面に「武蔵国児玉郡草田郷戸主太田マ身万呂」と刻書されている[19]。9世紀前半頃と見られる竪穴建物跡から出土しており、蛇紋岩製で上辺直径4㎝・下辺直径2.4㎝・厚さ1.6㎝、重さ37.5ｇ。文字は、上辺の面を一周する状態で17字記されており、「武蔵国児」まではほぼ縦に書き始め、「玉郡草田郷」は次第に縁辺部を弧状にまわる。記載文字は冒頭の大きな文字から順次小さく記し、最後の「呂」は冒頭の「武」の1画目と完全に重なっている[20]。

第10図　埼玉県本庄市南大通り線内遺跡出土刻書紡錘車(原寸)

刻書紡錘車は、現在までのところ群馬県南部から埼玉県北西部にかけての地域を中心に、栃木県・東京都・千葉県・神奈川県などで、およそ100例が知られており、概して地名や人名が記された物が多いようである。紡錘車に刻書することの意味・目的については、従来より、調庸布の貢納に関わるものとして、調庸布の大きさ・品質等の管理を厳密に行うために、その品質に関わる紡錘車についても管理や規制が行われた結果、律令地方行政機構の村落内生産体系への諸統制に伴って刻書されたものと理解されてきた[21]。しかしながら近年の研究では、単に所有・所属関係を示すのみならず、生産向上を願う共同体、あるいは成員個人の名を示したものとみて、「機織」祭祀をはじめとする村落内の祭祀に伴って刻書されたものと理解されるようになってきている[22]。また、宗像・沖の島の例では、紡錘車そのものが他の機織具と並んで「幣帛」「祭具」として扱われているわけであるし、さらに『肥前国風土記』基井郡条に引かれた伝承には、「臥機」「絡柁」が女神に関わる祭具的存在として見える点や、神話等の記述に女神のシンボルとして紡織具が多く見られる点からみても[23]、紡錘車それ自体が祭祀と密接に結びつくものであったわけである。さらに、群馬県尾島町尾島第2工業団地遺跡から出土した紡錘車には、下面に「矢田衆人即世矢田公子家守」と記されているが、「矢田衆人の死を矢田公子家守が弔った」との意味であり、「機織」祭祀でこそないが、祖霊・親族祭祀に関わるものと言える[24]。これらの他にも、埼玉県児玉町枇杷橋遺跡出土の紡錘車には文字の他に人面が描かれており[25]、千葉県千葉市ムコアラク遺跡出土の紡錘車には「為、南無、界、秋□、如、申、神、◎」と記されていて、意味は通らないものの何らかの願文とみられるし[26]、最近、埼玉県岡部町熊野遺跡から出土した紡錘車の下面には「道乙朋道共伏状」(「道乙と朋道が共に伏して申し上げます」という意味）と祈願文そのものが記されているなど[27]、近年の出土例の中には刻書紡錘車が祭祀に関わるものであったことを端的に物語るものが少なくない。これらの例からみて、刻書紡錘車は祭祀に関わるものであり、文字は何らかの祭祀に伴って記されたものであることは間違いないと言えるだろう。そうなると、20に記された「武

蔵国児玉郡草田郷戸主太田マ身万呂」の文字も祭祀に関わって記されたものと理解すべきであろう。

それでは何故、祭祀に関わる物に「地名＋人名」という記載が必要なのだろうか、また「地名＋人名」の記載は、祭祀の場において如何なる意味を有していたのだろうか。この点については平川南氏は非常に興味深い考えを示しておられる[28]。平川氏によると、『日本霊異記』巻中 第25話に、

閻羅王の使いの鬼の、召さるる人の饗を受けて、恩を報いし縁

讃岐国山田郡に、布敷臣衣女といふひと有りき。聖武天皇のみ代に、衣女忽に病を得たりき。時に、偉しく百味を備けて、門の左右に祭り、疫神に賂ひて饗しぬ。閻羅王の使いの鬼、来たりて衣女を召す。其の鬼、走り疲れにて、祭りの食を見て、おもねりて就きて受く。鬼、衣女に語りて言はく。「我、汝の饗を受くるが故に、汝の恩を報いむ。若しは同じ姓同じ名の人有りや」といふ。衣女、答へて言はく、「同じ国の鵜垂郡に、同じ姓の衣女有り」といふ。鬼、衣女を率て、鵜垂郡の衣女の家に往きて対面し、即ち緋の嚢より一尺の鑿を出して、額に打ち立て、即ち召し将て去りぬ。彼の山田郡の衣女は、かくれて家に帰りぬ。時に閻羅王、待ち校へて言はく、「此は召せる衣女に非ず。誤ちて召せるなり。然れば暫く此に留れ。すみやかに往きて山田郡の衣女を召せ」といふ。(後略)

とある説話にみえるように、古代の人々は、何らかの賄行為をすれば、神仏はおろか、疫神・邪神・悪霊や地獄の使いの鬼に至るまで、必ず何らかの代償をしてくれるものと考えていたようである。この説話は、讃岐国山田郡の布敷臣衣女という女性が急病になったので疫神に供物を供えたところ、地獄から衣女を召喚に来た鬼がそれを御馳走になり、恩義に感じた鬼は、別の所に住む同姓同名の布敷臣衣女を山田郡の布敷臣衣女の代わりに地獄へ連れていったという内容であるが、鬼が賄を受けた代償として同姓同名の人物を身代わりにしたという点からみれば、祭祀に関わる土器、或いは紡錘車に文字を書き入れるのは、神・仏、または疫神・邪神・悪霊や地獄の使いの鬼等に対して供物或いは依代を供献したのがどこどこに住む誰それであることを明示する必要があったからということになろう。

以上、これまで見てきたように、「地名＋人名」を記した出土文字資料の類例としては、全国的にみて余り多い量ではないが、墨書・刻書土器や刻書紡錘車があり、それらのほとんどが祭祀に関わるものであること、また、「地名＋人名」が記載された理由は、祭祀の対象に、祭祀の実行者がどこの誰であるかを明示する必要に因るということが判明した。要するに当該資料についても祭祀に使用されたもので、「上野国甘楽郡端上郷戸主物マ名万呂」という人物名は、その場所で祭祀を執り行った人物と考えられるだろう。

当該資料を祭祀関連と想定する上で、有力な傍証となる資料が隣接する内匠日向周地遺跡から出土している[29]。内匠日向周地遺跡は、内匠・下高瀬遺跡群のほぼ中央部に位置し、当該資料が出土した下高瀬上野原遺跡の東側に接し、西から東に向かって開析された谷津状地形の底部に位置している。この谷底の低湿地内から7世紀後半以降8世紀後半以前とみられる呪符木簡が3点

出土している（第11図）。

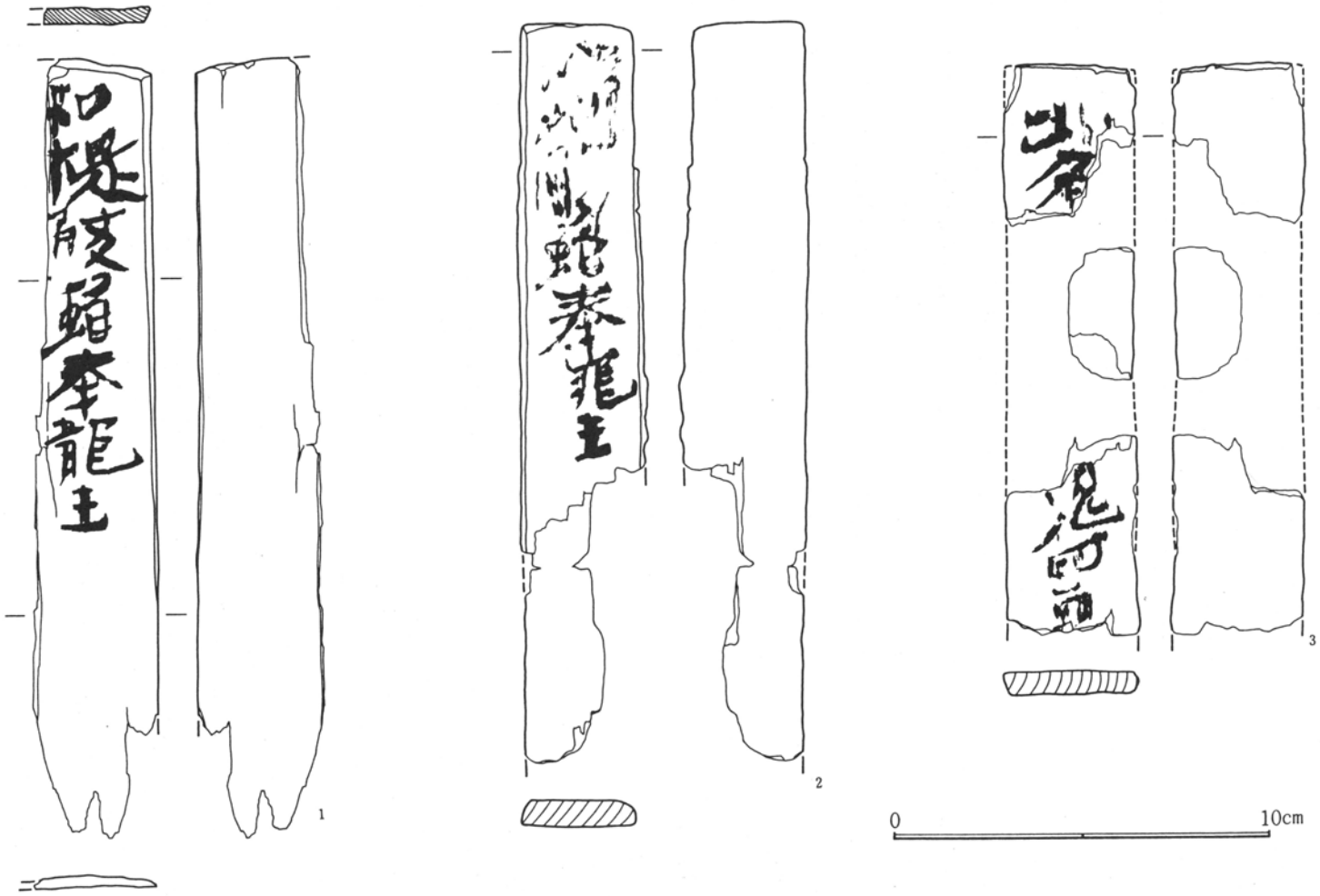
1号木簡	〔咄ヵ〕〔蛇ヵ〕「□罡蛟□奉龍王」	(42＋53) ×35×7	051
2号木簡	「□罡□蛇奉龍王」	(145)×33×7	019
3号木簡	〔咄ヵ〕「□□□×鬼□□」	(250)×33×4	019

材自体がかなりいたんでいて判読できない部分も少なくないが、1・2号木簡はほぼ同文と考えられる。冒頭の「□罡」は、北斗星を神格化した道教の神、「天罡」を意味していよう。「蛟蛇」はみずちのことで「龍王」の使者。水中に住み、蛇に似て角や四足をそなえ、毒気を吐いて人を害するとされた想像上の動物である。「龍王」は良く知られているように龍の姿をして水中に住む水の神である。

古代東国社会において、蛇と言えば直ちに『常陸国風土記』行方郡条にみえる箭括麻多智の谷戸開発伝承が想起されるところであろう。

> 古老のいへらく、石村の玉穂の宮に大八洲しろしめし天皇のみ世、人あり。箭括の氏の麻多智、郡より西の谷の葦原をいりはらひ、墾闢きて新に田に治りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率いて、悉尽に到来たり、左右に防障へて、耕佃らしむることなし。俗いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず、凡て、此の郡の側の郊原に甚多に住めり。是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて、自身矛を執り、打殺して駈逐らひき。乃ち、山口に至り、標のつえを堺の堀に置て、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。ねがはくは、な祟りそ、な恨みそ」といひて、社を設けて、初めて祭りき、といへり。即ち、還、耕田一十町余を発して、麻多智の子孫、相承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。

この伝説に依れば、樹枝状の小支谷＝谷戸（夜刀）の神が蛇であり、谷口に水田を開発した首長が祝（司祭者、神官）となってその神を祀たことになっている。内匠日向周地遺跡出土の木簡も、龍王の使者としての「蛟蛇（みずち）」が見える点でも、出土地点がこの『常陸国風土記』行方郡条の描く谷戸の様相と酷似するような谷津状地形の場所であること（第5図参照）等の点からも、『常陸国風土記』行方郡条が示すような谷戸神祭祀に関わるものである可能性が高い[30]。そうなると、これらの木簡は、「天罡、蛟蛇（みずち）、龍王に奉る」と読め、「龍王」（龍神）の使いの谷戸の神である「交蛇（みずち）」が、日照り、もしくは大雨を恐れ、水神である「龍王」に乞雨もしくは止雨を祈願したという内容ということが一つ考えられる[31]。勿論、実際の祈願の主体は、谷戸の神を祀る祝であるところの在地首長であり、谷戸の開発者である在地首長が、谷戸の神である「交蛇（みずち）」の司祭者として「龍王」に乞雨もしくは止雨を祈願する神事に関わる呪符木簡と理解できる。あるいは他に、谷戸の水田開発に際して、谷戸の神「交龍（みずち）」の親玉



第11図　内匠日向周地遺跡出土呪符木簡

である「龍王」を祀ったものとの解釈も成り立つ。

先述したように、これらの木簡が出土したのは『常陸国風土記』行方郡条の箭括麻多智による谷戸開発伝承に見られるのと全く同様の谷津の中からであるが、この谷津自体、西に接する下高瀬上野原遺跡に源を発する湧水によって開析されたものである。即ち、当該資料が出土した地点の東に接する谷において谷戸神祭祀が為されていたわけであり、出土地点がやや離れているとは言え(第5図参照)、神仏等への供献に関わるとみられる当該資料についても、谷戸神祭祀との関連が想定可能であろう。

6 おわりに

群馬県富岡市下高瀬上野原遺跡出土の「(上)野国甘楽郡端上郷戸主物マ(名万呂進ヵ)」と記された刻書土器について、類例、資料的特質、文字が記されたことの背景や用途等について検討してきたが、墨書・刻書土器や刻書紡錘車等の「地名+人名」を記載した出土文字資料のほとんどが祭祀に関わるものと考えられることや、当該資料の出土地と隣接する部分から谷戸神祭祀に関わるとみられる呪符木簡が出土している点から見て、報告書で位置づけられてきたような公的な賦課に関わるものではなく、祭祀に関わるものとみてほぼ間違いないということが判明した。また、記された「物マ名万呂」は神仏等に供献を行った人物の名であり、祭祀の場で供献する器物に国郡郷戸主姓名等を記入するのは、祭祀の対象に祭祀の実行者がどこの誰であるのかを明示する必要があったからで、どこに住む誰が祭祀を執り行ったかが明らかにされていないと祭祀の代償としての「ご利益」を確実に受けられないからであると考えられる。国郡郷戸主姓名を記した墨書・刻書土器や刻書紡錘車は、貢進物付札や文字瓦銘と書式がよく似ているため、公的な物品の貢納に関わるとみられがちであるが、貢納物が集積する宮都や地方官衙遺跡からこうした資料の類例が全く出土していない点からみても、公的な物品の貢納に関わるものとは考えにくい。

当該資料が、如何なる祭祀のどのような場面で使われたのかについては、資料そのものからは判明し得ない部分が多いが、西に隣接する内匠日向周地遺跡から谷戸神祭祀に関わるとみられる呪符木簡が出土していることから、当該資料についても谷戸神祭祀に関わるものとの想定も可能と思われる。

本資料を含め、墨書・刻書土器、刻書紡錘車、印章、焼印などの集落遺跡出土文字資料は、近年における埋蔵文化財発掘調査の急増によって、各地で膨大な量が蓄積されつつあるが、資料個々はあまりにも断片的であり、それぞれの文字資料に記された文字の意味や用途などを確定することが困難なケースが非常に多い。しかしながら、集落遺跡出土の文字資料は、他の集落遺跡から出土した資料とも密接な関連を有しており[32]、相互を有機的に関連付けた上で検討を加えることによって、当該期の村落研究に際しての新たな分析視角が設定できるとともに、個々の文字資料についても、資料的特質が解明されることになろう。

甚だ、雑駁な行論に終始し、推測に推測を重ねた部分も少なくないが、ともあれ小稿を一つの

試論として提示し、諸賢のご叱正を請い願う次第である。

註

(1) 平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989)、平川南「墨書土器とその字形」(『国立歴史民俗博物館研究報告』35 1991) 他。

(2) 平川南氏註(1)前掲論文、 同編『月刊文化財 362 特集・墨書土器の世界』第一法規出版 1993、同「地下から発見された文字」(『新版 古代の日本10 古代資料研究の方法』角川書店 1993)、宮瀧交二「古代村落と墨書土器」(『史苑』44―2 1985)、松村恵司「特集 墨書土器の世界から」(『月刊文化財』363 1993)、同「古代東国集落の様相―村と都の暮らしぶり」(栃木県立しもつけ風土記の丘資料館『第9回企画展 古代の集落』1995)、拙稿「古代東国の村落と文字」(関和彦編『古代東国の民衆と社会』 名著出版 1994)、仲山英樹「墨書土器と集落遺跡」(『歴史評論』538 1995) 等。

(3) 東野治之「121号土坑出土の刻書土器について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『下高瀬上野原遺跡』1994)

(4) 関口功一「121号土坑出土の刻字土器の地域史的意義について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『下高瀬上野原遺跡』1994)

(5) 平川南氏註(1)前掲論文他。

(6) 東野治之氏註(3)前掲論文。

(7) 関口功一氏註(4)前掲論文、同「物部と石上」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』II 1990)、小林昌二「物部の分布とその意味について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』III 1991)。

(8) 東野治之氏註(3)前掲論文。

(9) 栗田則久・石田広美・平川南「千葉県吉原山王遺跡出土の墨書土器」(『考古学雑誌』71―3 1986)、栗田則久「出土文字資料について」(千葉県文化財センター『佐原市吉原山王遺跡―東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書V』 1990)。

(10) 宮瀧交二「香取神宮神戸集落と童女の貢進交替―千葉県佐原市吉原山王遺跡出土の墨書土器の検討から―」(『古代史研究』 9 1990)

(11) 関和彦「佐太大神の実像」(同氏著『出雲国風土記とその世界』NHK出版 1996)。

(12) 平川南氏註(1)前掲論文。

(13) 平川南氏註(1)前掲論文。

(14) 倉住靖彦「福岡県ハセムシ窯跡出土の刻書文字」(『日本歴史』500 1990)、同「A―3地区4号窯跡出土土器」(福岡県教育委員会『牛頸治水ダム関係埋蔵文化財調査報告 牛頸窯跡群II 福岡県文化財調査報告書第89集』 1989)。

(15) 『続日本紀』和銅6年(713) 5月甲子条に「制、畿内七道諸国郡郷名、著好字」とみえ、これによって諸国郡里名は好い字を使うよう定められた。なお、これよりは遙か後世の『延喜民部省式』上に「凡諸国部内郡郷里名、並用二字、必取嘉名。」とあるが、木簡・金石文等の表記を見ると、この和銅6年頃を境に地名表記が二字に統一されてくるので、この和銅6年甲子制は、好字のみならず二字による表記まで定めたものらしいといわれている (野村忠夫「律令的行政地名の成立過程」『古代史論叢』中 吉川弘文館 1978)。故に和銅6年に国郡里名が好字二字に改められた際に「筑前国」の表記も正式に成立したものと考えられており、「筑紫前国」という表記はそれよりも古い大宝令制以前の表記法である。但し、そのような古い表記法が往々にして後代まで使用される場合もあったということも、木簡の表記からも判明しており、単に表記法が古様だといってその書かれた物の年代が直ちに大宝令制以前に遡るとは言い難い。なお「竺志前国」と表記の木簡が大宰府跡政庁正殿後方築地東北隅から出土している(九州歴史資料館『大宰府史跡出土木簡概報』1 1976所収7号木簡)。

(16) 大神氏、大神部氏は、須恵器生産と何らかの関係があるという。(中村浩「12地区出土の在銘片について」 『牛頸II 大谷女子大学資館報告書23』 大谷女子大学資料館 1989)

(17) 東野治之氏註(3)、倉住靖彦氏註(14)、中村浩氏註(15)前掲論文。

(18) 賦役令調皆随近合成条に定められた通り、調庸布の実物に国郡郷戸主姓名年月日が記されたものが正倉院に現存していることは周知の通りであるが、宮都遺跡からの出土資料では現在までのところ例がない。

(19) 本庄市教育委員会『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』1987。

(20) 平川南氏註(2)前掲論文。

(21) 井上唯雄「線刻を持つ紡錘車について―群馬県における事例を中心にして―」(『古代学研究』115 1987)。

(22) 関和彦「物部郷長の世界」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』II 1991)、同 「矢田遺跡と養蚕」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』III 1992)、拙稿「矢田遺跡出土の平安期における文字資料について」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』III 1992)、同「群馬県吉井町黒熊中西遺跡出土元慶四年銘砥石をめぐって」(『栃木史学』10 1996)。

(23) 関和彦「『風土記』社会の諸様相―その3―」(『風土記研究』 8 1989)。

(24) 井上唯雄氏註(21)前掲論文。

(25) 埼玉県遺跡調査会『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』 1973

(26) 千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン 8 ムコアラク遺跡』 1979。

(27) 埼玉県立博物館『企画展 最新出土品展』1995。

(28) 平川南「墨書人面土器と文字」(『藤沢市史研究』24 1991)。

(29) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡』1995。

(30) 平川南「群馬県富岡市日向周地遺跡出土の木簡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡』1995)。この内匠日向周地遺跡出土呪符木簡によく類似した資料が、静岡県浜松市伊場遺跡出土39号木簡の「百怪呪符」(静岡県『静岡県史』資料編 4 1989)、藤原京右京九条四坊西四坊坊間小路東側溝出土の呪符木簡である(露口真広・橋本義則「1993年出土の木簡 奈良・藤原京跡右京九条四坊」『木簡研究』16 1994)。

(伊場遺跡出土百怪呪符)

「百怪呪符百々怪宣受不解和西怪□亡令疾三神 〔宣カ〕□□□
宣天罡直符佐□當不佐亡急々如律令
・ 弓 龍 神
人 山 龍 急々如律令
戌 虵子□□□
・ 戌 急々如律令
戌 弓ヨヨヨ□ 」 322×67×4 032

(藤原京右京九条四坊 西四坊坊間小路東側溝出土呪符木簡)

・「四方三十□大神龍王 七里□□内外送々打々急々如律令
「東方木神王 婢麻佐女生年二十九黒色 〔色カ〕
南方火神王 (人物像) 婢□□女生年□□□□
・ 中央土神王 (人物像)
□□□□□ (北方水神王)
□□□□□ (西方金神王) 」
467×83×7 032

伊場遺跡出土の「百怪呪符」は、止雨祈願符とする芝田文雄氏の意見(「百怪呪符」竹内理三編『伊場木簡の研究』 東京堂出版 1981) と、疾病除去とする和田髞氏の意見(「呪符木簡の系譜」『木簡研究』 4 1982) があるが、「天罡」「蛟龍」「龍神」など内匠日向周地遺跡出土呪符木簡と共通する文言があり、これと同様の性格であることには相違ないだろう。また、藤原京右京九条四坊西四坊坊間小路東側溝出土呪符木簡には同じく「大神龍王」、五方神王、「送々打々」、「急々如律令」などの文言がみえるので、排水を祈願する呪符木簡と考えられている。

(31) 平川南氏註 (29) 前掲論文。

(32) 註(2)・(22)拙稿、拙稿「古代の焼印についての覚書」(『古代史研究』11 1992)。

(付記) 成稿にあたり、下高瀬上之原遺跡及び内匠日向周地遺跡の発掘調査担当者である津金澤吉茂・新井仁両氏に種々御教示を賜った。記して謝意を表する。

なお、校正中、平川南「〝古代人の死〟と墨書土器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集 1996) に接した。本稿と関わる部分も多いが、その成果と本稿にとり入れることはできなかった。併せて参照いただければ幸いである。

つぶさに墳陵の状態を徴し、測度し

～「上毛上野古墓記」の世界と吉田芝渓の古墳観～

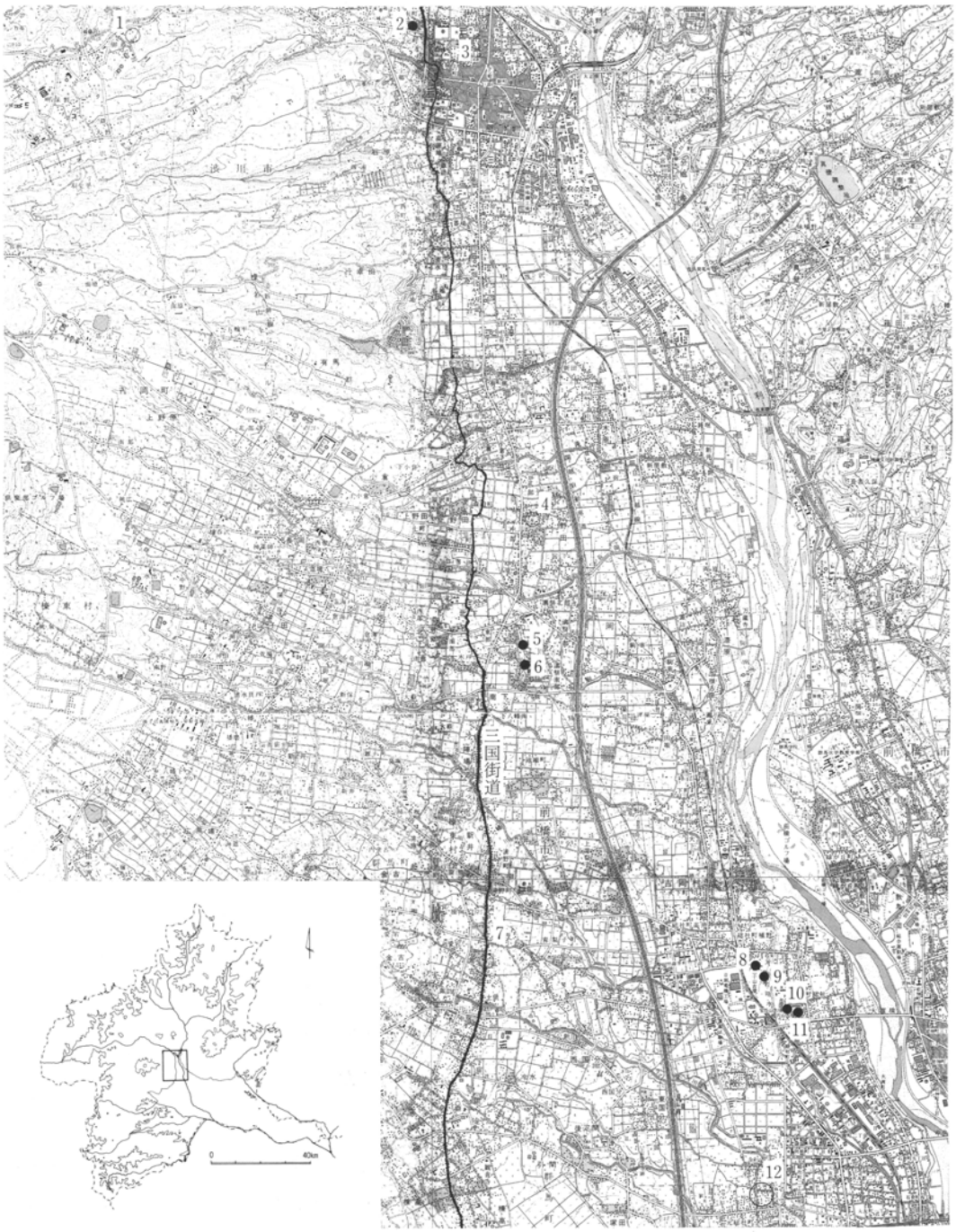
岸　田　治　男

1　まえがき
2　『上毛上野古墓記』を巡る世界
(1)　江戸の知的小宇宙・知的遺産とそのネットワーク
(2)　知的情報の十字路・上野国渋川村元宿
3　吉田芝渓の古墳観の形成
(1)　地方文人吉田芝渓の学問領域・実学としての渋川郷学
(2)　開墾と芝渓の古墳観の醸成
(3)　水戸学との邂逅
4　文化７年秋８月渋川芝渓田友直識・『上毛上野古墓記』の分析と検討
(1)　『上毛上野古墓記』の成立
(2)　つぶさに墳陵の状態を見、計測し
(3)　古記を引いて
5　むすび

たとえばネガティブパラダイムの作用によって、いくつかの未回収の思想が人類の知的資産目録の中に眠っている可能性がある。そのような鉱脈を誰かが掘り当てたとき、我々は再度、科学の正統性の問題に鋭く対峙することになるにちがいない。（米本昌平「ネガティブパラダイム」）

1　ま　え　が　き

筆者は以前「昭和初年群馬県における郷土史研究者の一動向」と題する論攷[(1)]で、上野国箕輪町上芝古墳の発掘調査とその報告書[(2)]が、当時の埴輪研究に与えた衝撃の大きさ[(3)]について言及した。そして「上芝古墳の発掘調査は、ただ単に埴輪研究に資する成果を挙げた古墳の発掘ではない。その背後には、それらの現象を必然たらしめる人間たちの思想的営為や地域に蓄積された知的遺産が存在している。」ことを明らかにした。それは具体的には、豊国覚堂[(4)]率いる上毛郷土史研究会[(5)]の思想と行動に収斂される。上毛郷土史研究会は、大正末年には「会員数は設立以後1000名以上にのぼるまでに拡大し、その範囲も全県下に及んでいった。」という力量を備え、群馬県内をほぼ網羅した郷土史研究者のネットワークを完成したといわれる。当時これだけの規模と内容をもつ郷土研究組織は全国的に見ても極めて希であり、このような知的ネットワークの存在が高レベルな発掘調査と調査報告書の揺籃となったのである。



吉田芝渓関係地図

1、芝中　2、虚空蔵塚古墳　3、渋川村元宿　4．下野田華蔵寺　5、南下E号古墳　6、南下A号古墳
7、金古宿　8、総社二子山古墳　9、愛后山古墳　10、宝塔山古墳　11、蛇穴山古墳　12、上野国府

本論攷の主題は、吉田芝渓の晩年の著作である『上毛上野古墓記』を題材に、「『上毛上野古墓記』を巡る世界」と「吉田芝渓の古墳観の形成」とを縦糸と横糸として、芝渓がいかなる思想と想いを『上毛上野古墓記』というタペストリに編み込もうとしたのかの検証である。

18世紀中葉から19世紀初頭にかけての地方文人吉田芝渓の生きた時代は、これほど「近世」という呼称が似つかわしい時代は他になく、知的刺激の横溢した江戸の曼陀羅世界が現出していたのだった。この江戸時代中期世界にあっても、大正期の上毛郷土史研究会の活動のように「ある知的営為の背後には、それらの現象を必然たらしめる人間達の思想的営為や地域に蓄積された知的遺産が厳然と存在している。」という抜きがたい事実がある。それは知的ネットワークという知の再生産構造を礎に、知的小宇宙・知的時代相・時代精神といった世界を形成する「近世」パラダイム[(6)]の出現に他ならならない。

そこで筆者は、地方文人吉田芝渓の思想と行動の軌跡を「近世」パラダイム世界の中に対照化させて、18世紀から19世紀初頭の「考古知」に関わる知的世界を俯瞰し、吉田芝渓の「考古知」の実相に迫ろうとする。

「考古知」という耳慣れない術語は、川村肇の「儒学知」という術語に対応する概念を考慮している。川村によれば「この儒学知という術語は、例えば儒学的学問知識などと言い換え可能な側面もある。しかし敢えてこのような耳慣れない術語を用いるのは、その知識が総体として、その在村知識人の社会的存在から規定されているという側面を強調したかったからに他ならない。即ちそれらの知識は単なる断片として、表面的にはお互いに矛盾しながら存在していたように見えるのだが、実はそのこと自体が彼らの社会的存在から規定された一つの知的あり方であったと見られるのである。更に、それらの知識は彼らの中では、お互いにつながりあった総体として、当該する社会で役割を担っていたと評価しうるからである。そして、そうした知が学問に裏打ちされているという点で、生活知（経験知）などとは区別されることになる。」[(7)]としている。さらに川村は「儒学知の性格の特徴は、儒学理解の体系性の欠如である。（中略）従って、それは思想的な高みや、今日的な到達からすれば十分なものではない。思想がある体系性を持つものとすれば、彼らの知的営為を思想とは表現し得ないことは前述した通りである。」と述べている。

「考古知」という術語の概念は、本論攷の吉田芝渓の考古的活動に当てはめられる。学問的体系性を持たざるが故に考古学とは認めがたいが、江戸時代中期世界の学問的到達水準を咀嚼し凌駕した『上毛上野古墓記』に見られる芝渓の知のあり方を「考古知」と呼びたい。そして知のネットワークに支えられて、吉田芝渓の「考古知」の在り方がどのような変容を遂げていくのかの検証も本論攷の課題である。

2　『上毛上野古墓記』を巡る世界

(1)　江戸の知的小宇宙・知的遺産とそのネットワーク

・本草と博物学の世紀～東と西の遭遇

地方文人吉田芝渓の生きた時代は、18世紀中葉から19世紀初頭にかけての、後に歴史家によって「近世」と称呼されたパクス・トクガワーナの真っ直中に存していた。江戸学者田中優子は「近世的なものとは、人工するエネルギー、極端な文化的爛熟であるとともに、過去への熱い視線であった。『外部』＝『異質なるもの』との出会いであると同時に、総てのものが『相対的』であることの発見であった。」[(8)]と語る。

博物学者山田慶児は、学問の近縁種である本草と博物学の遭遇の情景を思い浮かべながら「18世紀は本草と博物学（自然史）の時代である。動因こそいささか異なれ、世界の東と西に平行現象が発生していた。たとえば貝原益軒の『大和本草』が1709年、リンネの『自然の体系』が1734年、ビュフォンの『自然史』が1749―84年、平賀源内の『物類品隲』が1763年。小野蘭山の『本草綱目啓蒙』は出版は1803年だが、1780年代の半ばにはすでにあらかた出来上がっていた。ヨーロッパの博物学の背景には、いうまでもなく大航海による世界の拡大と東洋貿易・植民政策がある。それにたいして日本の本草の土壌となったのは、幕府や諸藩の殖産政策と外国貿易である。とりわけ徳川吉宗の全国産物調査をふくむ一連の政策は、その大きな推力となった。そして東の本草と西の博物学は、18世紀から19世紀にかけて、日本で遭遇するのである。」[(9)]と概観している。

たしかに地球上の東と西で、本草と博物学の、分類し、記述し、描写する方法論による新たな世界像の構築が開始され、「物に注ぐ新しい眼は物の限りない多様性を発見し、環境としての地球をも発見した」[(10)]のであった。いわば、西欧は博物学により他者としての地球規模での外部世界を発見し、日本は本草学によって完結した小世界である自分自身を、新たな眼差しで確認し始めたのだった。

田中の言う「近世的なもの」のkeywordとは、過去への熱い視線、『外部』＝『異質なるもの』、『相対的』の３点に要約できる。まさしく18世紀は、その文化相の中に時代精神の中に「近世的なもの」を色濃く胚胎していた。また山田における「物に注がれる新しい眼の誕生と物の限りない多様性の発見」の世紀に、明らかに吉田芝渓は、そのような知的時代相の中で呼吸し、本草と博物学のせめぎ合いの狭間で、知的営為を日常している。

・此国に産れて此津に生い立ち～地誌学の発達

岡田径志は元禄11年（1698）その著「摂陽群談」自序の中で、「此国に産まれて此津に生い立ち」たるものが、聞き伝えるものを記し、反古（古文献）を参考にして「此国の名所旧跡、神社仏閣の起こり」などを書いたと記している。[(11)]この17世紀最終末の岡田径志の著作は、来るべき18世紀における「完結した小世界である日本自身を新たな眼差しで確認し始める」諸学問の萌芽の始まりを予感させる。

しかしながら、地誌類の最初は領国治世のための民政参考資料としての新風土記研究という形

をとり、17世紀中葉には江戸時代の代表的藩撰地誌である会津若松城主保科正之撰「会津風土記」（寛文6年・1666）が成立している。「会津風土記」は、「大明一統志」をはじめ中国の郡県志にならい、会津四郡の地誌を編んだものである。[12] さらに叙述形式を「大明一統志」にならった私撰地誌である「五畿内志」は、享保19年（1734）に並河誠所により完成した。その内容は一国全体の建置の沿革・府治・彊域・形勝・風俗・祥異・租税などを述べ、次に国を郡別に分け、町村ごとに経済・政治・景観・民俗などについてふれている。並河誠所は伊藤仁斎に学び、日本に良好な地誌がないのを憂い、五畿内を歴遊して「五畿内志」を書き上げ、幕府に献上したという。古地誌の名編と評価されるこの書を得て、地誌の時代はひとつの完成を見る。

この「五畿内志」の叙述スタイルは、多少の潤色を加えられながらも江戸時代中・後期の地誌類に多大な影響を与え、上野国では、私撰地誌である毛呂権蔵「上野国志」[13]（1774）・釈泰亮「上毛伝説雑記」[14]（1780）・富岡正忠「上野名跡考」[15]（1809）・富田永世「上野名跡志」[16]（1853）等を生み出している。

上野国の地誌類の嚆矢と目されるのは、宝暦5年（1755）西田美英により著された「高崎須奈子」[17]である。本書は「高崎砂子」とも書かれ、後出の成立年時（天明・寛政頃か）の明らかではない「多胡砂子」に影響を与え、高崎藩の史臣川野辺寛撰述「高崎志」の貴重な参考資料となったとされる。[18]

また上野国の藩撰地誌には、「前橋風土記」（貞享元年・1683）・「高崎志」[19]（寛政元年・1789）・「伊勢崎風土記」（寛政10年・1798）・「安中志」[20]（天保2年・1831～）・「館林記」[21]（寛政頃・1789～1801）がある。

「前橋風土記」は儒臣古市剛が撰進した地誌で、古風土記の体裁にならった「会津風土記」を手本にし、凡例には「大明一統志」にしたがいと記述している。該書は貞享元年（1683）に撰述され、上野国の他の藩撰地誌よりも約1世紀早い成立で、「会津風土記」を手本にしたにしてはあまりにも即製の感があるといわれる。

また「伊勢崎風土記」は、伊勢崎藩酒井家の藩老関重嶷の著作で、寛政10年5月提出された漢文の地誌である。関重嶷はこの著述にあたって、常見浩斎「伊勢崎古老伝記」・星野本太夫依親編「伊勢崎町新古日記」や元文3年（1738）に伊勢崎領内各村々から提出させた「古来之儀申伝候趣書上帳」等を参考にした。「古来之儀申伝趣書上帳」は、「上植木元文書上帳」として元文のおりの下書きが現存しており、古来から村々に伝承する村の由緒・口碑・伝説・社寺等の記録が調査されている。

この伊勢崎藩の実例は、藩撰地誌の作成が多かれ少なかれ伊勢崎風土記編纂計画と同様な軌跡のもとに実施されことを窺わせる。

江戸時代における地誌の発達を概観すると、17世紀中葉に藩撰私撰を問わず多く藩領内の民政参考資料として出発し、18・19世紀に漸次名所案内、商工案内的要素を加味していったといわれる。[22] 本草と博物学の時代と称される18世紀に先立ち、「此国に産まれて此津に生い立ち」たるもの

が、聞き伝えたるものを記し、反古（古文献）を参考にして、「此国の名所旧跡、神社仏閣のおこり」を書き記すという、日本世界認識の空間的拡大現象がすでに地誌の領野で、17世紀段階に産声をあげていたというのは興味深い事実である。

これらの地誌類の場合、「伊勢崎風土記」を例にとると、考古学的記述はほぼ古墳墓・古跡の記載に限られるが、埴輪や土器・石器・石鏃の類も古墳の記述とともに散見される。18世紀中葉から、各地の地誌類の知見とともに本草や博物学の進展が好古の風潮を生み出し、考古史の萌芽を兆したと仮定してもあながち間違いでもあるまい。

・玉石を弄ぶの徒、天下にみてり

弄石家と呼ばれる一群がある。「当時玉石を弄ぶの徒、天下にみてり。」と鈴木甘井に語らしめたディレッタントの集団である。[23]「是の盟主たる者、是湖東石亭翁なり。もとより本草物産の徒にもあらず。」湖東石亭翁とは言わずと知れた大著『雲根志』の作者木内石亭（1724～1808）のことである。

安永元年（1772）に前後編が上梓された『雲根志』は、結局30年後の享和元年（1801）に三編が刊行されて完成することになる。その内容は「石に関する諸国の奇談のみならず、二千余種の彼の蔵石及び諸国弄石社中の蔵品を怪異、化石、鉱物等に分けてその和漢蘭名を正し、出所を詳記し利用法を説き、口碑伝説等をも併記しているので、独り興味的であるのみならず今日に於いても、鉱物学、化石学、考古学上参考しうるものが多々あるのである。」[24]というもので、この書を中心に弄石家の結社が作られ、18世紀後半「玉石を弄ぶの徒、天下にみてり」という状況が現出した。

弄石社中という木内石亭の起こした結社の活動を、中谷治宇二郎は「徳川後期に興った我が国の弄石社中の活動は、今日の鉱物学、古生物学、薬物学、先史学等の先駆をなすものであって、文化史上他の好事蒐集等と同一視する事はできない。」[25]と評価している。この中谷の評価は、木内石亭の「二千余種の彼の蔵石及び諸国弄石社中の蔵品を怪異、化石、鉱物等に分けてその和漢蘭名を正し、出所を詳記し利用法を説き、口碑伝説を併記している」という、分類を基礎とした学問的方法論に則った『雲根志』の記述スタイルが、後世の学的視線に十分耐えられる内容を有していることを証明している。ここに「考古知」のある典型をみることができる。

『雲根志』の弄石社中名簿を見ると、上野国人の名前は見あたらない。門人の分布は、石亭の住した近江を中心に、東は江戸から西は筑後までの、いわば同心円状の広がりを示している。上野国周辺では、信濃国上田の成沢七郎右衛門の名が見える。[26]しかしながら、石亭が「弄石の社中を結んで全国数百人」と称し、『伊勢崎風土記』にも石器の出土記事が散見されるように、おそらくは上野国にも弄石を趣味とする好事家達の一群が存在したはずである。この究明については今後の課題であるが、未だ江戸時代の残り香を色濃く残した明治14年に、簗瀬二子塚古墳[27]の出土品を写した『尚古帳』[28]は、『雲根志』の描法を模した筆致で描かれ、傍注には「雲根志ニ曰ク云々」とあり、上野国における弄石家の存在を推測させる好個の資料である。

・江戸の知的ネットワーク～知的小宇宙の拡がり

江戸時代の読書人は「ともにテキストを読み合うことで、かれらは力を貯え、自身の読書や研究の中から疑問点を出し合い、問答することでみずからの糧にしていったのであるが、これら会読などの研究会のほか、書物を貸借し、疑問の照会のため訪問したり来訪されたり、また手紙での応答もしげくおこなっていた。それらは、蔵書という書物の集積を基礎とした、江戸時代文人のネットワークといってもよいものであった。」[29]という、知的小宇宙の中に存在していた。

18世紀という時代は「外部」=「異質なもの」との出会いの世紀であると言われるが、確かに知的ネットワークも知の広がりを求めて全国的拡大現象を見せている。塙保己一門下である石原正明[30]や屋代弘賢[31]は「諸国風俗問状」[32]という、今日で言えば全国アンケートを各地の知友に送付したという。

それは「問い状の形式にもあるように、江戸の風俗を『通例』として全国のものを採集して大成化しようとしたこと、これは『群書類従』編纂や『寛政重修諸家譜』などとも共通の発想で、地方に存在する書物や人物・風俗を、中央―地方含めて総体として集大成しようとしたことである。中央―地方、全体―細部、という二元的な構成から事物を大成化し体系化しようと発想したのである。」というまさに18世紀という時代のなさしめる発想であった。

上野国の地方文人である吉田芝渓や下野田華蔵寺の住職浄聖[33]等は、こうした江戸の知的ネットワーク拡大現象の大きな渦の中に存在していた。そして杉仁が「吉田芝渓年譜考」で指摘するように[34]、江戸の知的小宇宙と呼応するかのように、この上野国の渋川近在にも地域小文化圏の知的小宇宙が成立し、後述するように地方の知的小宇宙はかく機能していたのである。

(2) 知的情報の十字路・群馬郡渋川村元宿

・地方文人鈴木牧之の旅を事例に

記録によれば『北越雪譜』[35]の作者鈴木牧之（1770～1842）は、少なくとも前後5回におよび渋川を通過している。

天明8年、牧之19歳の夏、5月、彼ははじめて商用をかねて出府し、東都の名所旧跡を訊ねたときの俳句・詩文まじりの紀行である『東遊記行』をものしている。この際鈴木牧之は、湯沢、三国三宿（三俣、二居、浅貝）高崎を通り、倉賀野河岸より船に乗って利根川を下った。

寛政8年、牧之27歳の正月には、同行者数名とともに三国峠を上野に出て、中山道を碓氷峠・諏訪・塩尻と通り、木曽路を経て、尾張名古屋から伊勢に入った。そしてこの旅は伊勢神宮参拝にとどまらず、関西方面に足を延ばし、各地の俳友と交歓した。この旅の成果は『西遊記行』としてまとめられている。

第一次の東遊記行の後31年を経て、文政2年、牧之50歳の閏4月、聾の治療のため出府した。この時の道筋は、三俣・三国峠・須川（本陣泊）・中山峠・金古（松屋泊）・高崎・深谷に出て、船によらず中山道を江戸に着いている。牧之は江戸でのおよそ2ヶ月ほどの滞在中、十返舎一九、滝沢馬琴、亀田鵬斎、太田蜀山人等の有名文人と交わっている。

これらの旅のほかに、寛政三年22歳と文化十三年47歳の２回、草津温泉に入湯している。[36]

越後塩沢で質屋と縮の仲買商を営んだ鈴木牧之は、その閑暇に経書を学び、俳諧にあそび、画筆に親しんだといわれる。ところが18世紀中葉から19世紀初頭を生きた鈴木牧之にとって、それらの芸は決して特別のことではなく、地方文人としてさらに商売人としての必要な教養であった。

牧之の交友録の中に顔を見せる上野国人を列挙すると、次のようである。俳諧では、上毛小暮方萩原矢之丞・上毛白井宮下米蔵・上毛白井植木彦四郎（杜文）・上毛前橋上毛舎雪道があり、和歌は上州沼田奈良＊原善蔵・上毛高崎＊屋彦太郎（正輔）とあり、漢詩では上毛高崎梶山与三右衛門（山彭）がいる。これらの上野国における友人達の居住地は、必然的に三国街道に沿った宿場町であり、牧之の前後５回の三国越えの旅のおりには、当然立ち寄って俳句や和歌・漢詩の交歓をしたものと思われる。付言すると上毛白井とは、渋川宿と吾妻川ひとつ隔てた、中世以来の宿として栄えた白井宿[37]のことである。

しかしながらこれらの交歓が、詩歌の交歓のみに終始したとは考えられず、この時代世の中に横溢している「上古のもの異国のもの」にたいする興味関心の情報交換の場として、鄙の「耽奇会」[38]のごとき相をも呈したに違いない。そしてこの交歓は、往還の途次頻繁に行われたはずであり、往きには鄙の珍しい民俗や伝承が語られ、帰途には都の最新情報や旅した先々の奇談・民俗等がもたらされた。

鈴木牧之という一地方文人に投影される時代精神と、それを巡る知的時代相というものは、そのような景観であったといえる。これは等しく、同時代の地方文人の甘受すべき知的時代景観であると同時に、知的営為のありようでもあり、渋川宿在の吉田芝渓とてもその埒外ではなかった。

・大名や奉行の往来道三国街道

江戸時代の街道整備は、本来幕府の諸奉行や大名の参勤交代の便に供するためのもので、そのための宿駅制度である。三国街道の整備は慶長14年（1609）には終わり、高崎経由の街道が本街道となり、道中奉行の支配下に入ったといわれる。元来、江戸時代に佐渡奉行街道と呼ばれた玉村から総社・八木原を抜ける古道が三国旧街道である。

渋川宿は平野と山地の結節点にあり、宿泊にしろ休憩にしろ、旅人は脚を留めざるをえなかった。江戸時代の佐渡奉行・新潟奉行と北国11大名[39]の往来は、大量の人間の移動という物理的なものばかりでなく、江戸時代のインテリゲンチャーである武士層の知的情報の移動でもあった。その中には藩お抱えの儒学者[40]あり、江戸藩邸詰を経験した文化官僚[41]あり、蘭癖や学問好きな執政層等の多士済々な知識人の集団が存在した。

前述の鈴木牧之等の俳句層とは異なる上層文化としての、杉仁の言ういわゆる村周辺の漢詩文層と、武士インテリゲンチャーとの身分や地域を越えた知的情報の交歓の場としても渋川宿は存在した。そしてその前提には、17世紀後半から18世紀初頭において全盛を極める漢学塾の存在[43]と、身分や地域を越えた多様な階層の交歓を保障する知的時代相があった。

・渋川近在の知的小宇宙

渋川の戦前の教育者田部井鹿蔵[44]は、江戸時代中期吉田芝渓に始まる学統を「渋川郷学」と呼んだ。この渋川郷学は「開明的であって小さく閉じこもらず、進んで新しい学問知識に取り組み、空理空論を排して現実の生活や社会に役立つことを重んじた」[45]優れて実学的な町人の学問であった。この学統の成立原因については諸説あるものの、まず一番に挙げられるのが知的情報の十字路としての、宿場町・市場町渋川の地理的条件にあるというのは、前述の鈴木牧之や大名の参勤交代の知的情報移動の例からも明らかである。

そのような知的情報の横溢する渋川宿であるゆえに、商業と農業を営む町人甚兵衛の子である吉田芝渓であっても、儒学の初歩を学ぶことはそれほど希ではなかった。芝渓と山崎石燕[46]門下での同門には、弟の吉田翠屏・湯上村の小野里巴水・上野田村の森田長渓[47]がいる。そのほか、師石燕の友人である山田村の儒者にして書家である町田延陵[48]や津久田村の角田無幻[49]とも交誼を結んでいる。さらに、寛政5年以降本格的に育成した門弟には、木暮足翁[50]・僧周休[51]・下田公権・中島宗丹・岸子徳[52]等がおり、その輪は前橋周辺にまで及んでいる。

渋川近在のこの知的小宇宙には、湯宿の亭主・僧侶・馬問屋の主人・儒学者・医師等が集い、会合や手紙の交換や書物の貸借・照会等の知的情報が頻繁に飛び交ったに違いない。そこでは、当然、現代で言う考古情報も盛んにやりとりされたはずである。この基礎の延長線上に、吉田芝渓の「上毛上野古墓記」があったとしても、何ら不思議ではない。

3　吉田芝渓の古墳観の形成

(1)　地方文人吉田芝渓の学問領域・実学としての渋川郷学

・吉田芝渓点描

地方文人吉田芝渓（1752～1811）の生きた時代は、「近世的なものとは、人工するエネルギー、極端な文化的爛熟であるとともに、過去への熱い視線であった。『外部』＝『異質なるもの』との出会いであると同時に、総てのものが『相対的』であることの発見であった。」[53]という、18世紀中葉から19世紀初頭かけての、「近世」という用語が一番似つかわしい時代であった。

芝渓もその時代の子であるかぎり、田中のいう「近世的なもの」を思想と行動の基本原理として生きていかざるをえなかった。時はあたかも18世紀の中葉の盛りが、天明の浅間山大焼けを潮に陰りを見せ始め、新たなパラダイムが予感される時代であった。

吉田芝渓は、宝暦2年渋川村元宿の農業と商業を兼ねる家に生を受けた。渋川は江戸と越後を結ぶ三国往還の宿場町という交通の要衝の故に、文人墨客の往来も多く、渋川近在には好学の気風が薫っている。渋川郷学の祖として知られる芝渓は、14歳で儒学者山崎石燕の門をたたいた。以来一農民ながらも学問への志やみがたく江戸に出て、当時の儒学アカデミズムである昌平黌で聴講した。さらに彼は、渋川を訪れた儒学者平沢旭山[54]に師事して、儒学はおろか国学や農学までをも修めた。

芝渓の生きた時代は、近世の文化的爛熟の盛りと秩序崩壊の予兆の時代であった。商品経済の高まりの中にあって、生産性の低い土地を持つ農民は田畑を放棄せざるを得ない状況に追い込まれ、渋川近郷でも荒れ果てた田畑が随所に見られた。時代の子である地方文人吉田芝渓は、この窮状を救う道を「子弟の教育と農村の復興」にあると思い定め、後に渋川郷学と呼ばれる教育の礎を築き、自らの学問思想実践の場として、渋川村芝中の荒れ果てた田畑の開荒作業を開始したのだった。

・吉田芝渓の学問領域

吉田芝渓の生き方とその「知的体温」を知れる著作には、『養蚕須知』[55]『救荒須知』[56]『開荒須知』[57]等の農学者芝渓を彷彿させる部分と、『弁学遼東豕』[58]等の儒学者芝渓の面目躍如とした諸論攷がある。本論攷の目的である『上毛上野古墓記』は、いわば国学者吉田芝渓が前橋市総社町に所在する古墳について「つぶさに墳陵の状態を見、計測し、もって古記を引いて断案したもの」[59]で、合理的計数性を必要とされる農学と、考証の学としての儒学・国学の成果が、当時の好古の学の水準を遙かに超えた形でここに結実しているものと思われる。

『上毛上野古墓記』は、愛宕山・宝塔山・蛇穴山の三古墳についての見聞記である。この『上毛上野古墓記』の記録された時代は、18世紀の好古の学が「古物蒐集と分類の世紀」を経て、人々の眼差しが漸く遺跡や遺構に注がれ始まった19世紀の初頭である。『上毛上野古墓記』の記述の他書に優れた点を勘案すると、農学者吉田芝渓の合理性が正確な数値を持って古墳の規模と石室の規格を表し、国学者吉田芝渓の考証癖が『日本書紀』や『山陵志』を繙き、文献を基にした三古墳の順序づけにまで及んでいるという点にある。

それではなぜ一地方文人吉田芝渓が、かくのごとき高レベルの記述をものすることが可能であったのだろうか。その一つの回答が、江戸時代中期にはすでに成立していた日本全国を網羅するような知的ネットワークの存在にあると思われる。儒学知[60]を基礎教養（西欧世界におけるラテン語のような）とした無数の好事家達が、蘭学に、国学に、農学に知的小宇宙を張り巡らし知の成果を交歓しあった場の存在。

吉田芝渓は、一地方ながらも中央の知的情報の事欠かない渋川という地に生き、渋川郷学という自由闊達な学問的文化的光彩を放つ知的遺産の種をまき、自身は地方渋川の知的ネットワークの場を保障し続ける巨大な知的山脈であった。しかしながら、このような文化現象は一渋川にとどまるものではなく、18世紀後半から19世紀にかけて、日本という知的磁場には、さまざまな地方に吉田芝渓が澎湃と立ち現れ、営々と知的遺産を積み上げたのであった。

(2) 芝渓の古墳観の醸成

・虚空蔵塚古墳の記憶

渋川の古墳分布は、榛名山東麓を流下する小河川に沿った微高地上に、円墳を主とした群集墳が数多く存在する。吉田芝渓の住した渋川村元宿の地にも、榛名山麓を流下する黒沢川の形成した微高地上に、かつてはいくつかの古墳が存在したものと考えられるが、現在では群馬県指定史

跡である虚空蔵塚古墳（図１）のみが遺されている。江戸時代には、虚空蔵塚古墳の立地する小丘陵の下を、越後へ向かう三国街道が走り、それに沿って元宿と呼ばれる中世以来の古い宿場町が展開していた。

虚空蔵塚古墳は墳丘の高さ３m、直径13mの円墳（方墳の可能性もある）で、墳丘の周囲に濠は認められない。埋葬施設は横穴式石室で、羨道部分が省略され玄室から直接前庭に至るという特異な構造を有している。石室の開口方向はほぼ南向きで、截石切組積石室である。玄室の大きさは主軸奥行きで３.1m、幅１.45m、高さ１.9mを測り、『上毛上野古墓記』記載の蛇穴山古墳と奥行きにおいてほぼ同規模の石室であることが知られている。[61] 虚空蔵塚古墳の名の由来は、石室内に無銘の石仏が安置されて虚空蔵菩薩信仰の対象とされてきたためと思われる。

吉田芝渓は、三国街道沿いの古い宿場町である元宿に生を受け、その地を40歳までの生業の場とした。芝渓と虚空蔵塚古墳との接点を求めるとすれば、幼児期よりの遊戯の格好の場であり、少年期には北牧の山崎石燕のもとへ弟の太右衛門と通った道すがら高台に見上げた塚であり、横穴式石室に虚空蔵菩薩を祀った祠として信仰した青年時代であった。後年『上毛上野古墓記』を上梓するに至る一つの要因に、截石切組積石室[62]という希な構造を有する虚空蔵塚古墳の記憶が、同様な構造の宝塔山古墳と蛇穴山古墳の記述に反映したと推測しても、あながち間違いでもあるまい。

・関重嶷と『発墳暦』

吉田芝渓より４歳年下の同時代人関重嶷という「考古知」の体現者について語りたいと思う。関重嶷は(1756～1836)、高２万石の小藩である伊勢崎藩酒井家の家老職の家に生を受け、生涯を伊勢崎藩の執政として領民経営にあたった。芝渓と同時代人の重嶷の生きた時代は、近世の文化的爛熟の盛りの時代であった。

関重嶷の生き方と知的体温を知れる彼の著作群は、時代の子である地方文人関睡洞（関重嶷の号）の矜持である。藩撰地誌『伊勢崎風土記』、天明３年浅間大焼けの記録である『沙降記』、考古学的記述・図の『発墳暦』と『古器図説』、その他紀行文や漢詩・和歌等枚挙にいとまがないほどである。また関重嶷は、山崎闇斎に始まる崎門学派の村士玉水[63]の門に連なる儒学者という一面もあり、近在の細谷村の出身である高山彦九郎[64]とも思想的に深い交誼を結んでいた。

『発墳暦』は寛政３年（1792）に『伊勢崎風土記』に先だって成立したと言われるが、最終の記事が文政10年（1828）とあるので、以降も書き継がれて現在の形を整えるのは、文政10年を遡ることはあり得ない。『発墳暦』は関重嶷が伊勢崎藩領内の古墳やその出土品についての見聞を記録したものであり、江戸時代の古墳の在りようが知れる好個の貴重な史料である。

『発墳暦述意』において重嶷は、次のような古墳観を披瀝している。「吾公封内の林野圃田及び市井閭閻の間に古丘有らざる処無し矣。民の往々これを発く者有り。孔夫子曰く『始めて俑を作りし者は、其れ後無きか』と。況んや人の陵墓を発き、而して其の宝器を奪い、遺骸を溝壑に投じて、己の欲を逞しうする者に於いておや。而して有司たる者、又これを忽にして、制する所以を知らずんば、則ち其の罪豈分かつ所無からんや。亦国家の宝祚を祀る所以に非るなり。予慨嘆

に堪えず、因って嘗て聞見する所の一二を記して、以て当路に寄すること左の如しと云う。」[65]

伊勢崎藩の領域にはほとんど山が見あたらず、古墳は小河川の形成する微高地上に立地する。江戸時代に桑を本田畑に植えることは幕府によって禁止されていたため、伊勢崎藩でも本田畑への植え付けを禁じており養蚕はいわゆる畦桑によったと言われる。[66]江戸時代中期以降上野国の爆発的な養蚕業の進展は、大幅な桑の需要増加が必須とされ、それまで可耕地とされてこなかった古墳という聖域にまで鍬の手が及び、『発墳暦述意』に記されているような古墳破壊の状況がかなり頻発したものと思われる。この古墳破壊という事実は、吉田芝渓の住む渋川周辺でも現出し、芝渓自身も数多く実見したはずである。

関重嶷の眼差しは、儒学者にして執政者の相貌を帯びて、「有司たる者、又これを忽にして、制する所以を知らずんば、則ち其の罪豈分つ所無からんや。」と執政者の心得を断じ、古墳＝陵墓という観点から「亦国家の宝祚を祀る所以に非るなり。」と天子（天皇）を確実に視野においた尊王論への萌芽をかいま見せている。

・南下古墳群と考古ディレッタント達の活動

渋川宿から三国街道を金古宿方面へ２里程脚を延ばすと、吉岡村南下の地に至る。榛名山麓の平坦な裾野の中に、取り残されたかのように低い丘陵が存在し、その丘陵上に南下古墳群[67]が形成されている。

この古墳群中には、虚空蔵塚古墳と同タイプの截石切組積石室を持つ古墳が２基確認されている。吉岡町南下字宮代の南下Ａ号古墳（図２）と字大林の南下Ｅ号古墳（図３）である。南下Ａ号古墳は、「きわめてたけの高い円墳であって、周囲は削り取られた形跡もないので、原形もこの形であったことは疑いのないところである。背後は墳丘とほぼ同高の台地であり、その傾斜地に山寄せに構築されたものである。その径東西約27m、南北約20m、基底部より１.6mまでは緩傾斜で、そこには中段があり、それより上は傾斜が急になっており、形はすこぶる整っている。」という外形をもつ。内部構造は、「両袖型の横穴式石室で、まれにみる美しい截石積の整然とした石室を有している。」で、石室各部の計測値は、羨道の高さ１.55m、幅１.58m、長さ３.95m、玄室の高さ２.40m、幅２.40m、長さ３.25m、全長７.77mを計る。[68]

南下Ａ号古墳の北西約70mのところにある南下Ｅ号古墳は、「墳丘については、発掘調査が実施されていないため、詳細を知ることはできないが、山寄せの古墳であり、現況の地割りから一辺17m前後の方墳とも推測される。」という。内部構造は、「主体部はほぼ南に開口する截石切組積の両袖型の小横穴式石室であり、玄門を有している。羨道部は玄室入口付近を除いて土砂によりほぼ完全に埋まっている。玄室内は現在サツマイモの貯蔵に利用されているが、後世幾分の土砂が堆積しているとはいえ、現在の床面は原床面に近いものと考えられる。」で、石室各部の計測値は、羨道の高さ推定１.06m、幅１.17m、長さ推定１.20m、玄室の高さ１.82m、幅１.94m、長さ２.76m、全長推定４.34mを計る。[69]

奈佐勝皐の山吹日記には「ひる過ぎるほとに大窪にかかりて行。へいちの物語佐藤嗣信ら母の

事かける所に、上野国大窪太郎かむすめ熊野まうてして、こさまのかうのとのに見えしといへるその大窪ときこえしはこの所にてや有けん。又ここの家居のうしろの山きはにいしむろあり。南にむかひて入口の高さ五尺あまり、よこ三尺あまり、うちに入て見れは、高さ七尺あまり、深さ五間はかり、横九尺はかりやあらん。うへもめくりもきはなき石もてたためる也。」[70] とある。

下野田村の華蔵寺を出立した奈佐勝皐[71]は、浄聖上人[72]と葛西玄沖[73]の案内で大久保村へ昼頃さしかかったという。彼らの進路を推定すると、華蔵寺の位置からして、おそらく佐渡奉行街道を通らずに三宮神社への道を女塚を経て熊野へ抜けたであろう。『山吹日記』の4月26日の記載には、高崎から陣場、南下、下野田を通過して華蔵寺に泊まったとある。このことからも、下野田から南下へという道は当時頻繁に利用されていたものと思われる。その証拠に、奈佐勝皐は「上野国大窪太郎かむすめ熊野まうてして」と、大久保と熊野という地名から平治物語の一節を連想している[74]。とすると「ここの家居のうしろの山きはにいしむろあり。」というこの石室は、いかなる古墳のものであろうか。彼らの道筋から推定できるのは、南下A号古墳が最有力候補である。その理由として、その古墳は「うへもめくりもきはなき石もてたためる」もの、つまり「天井も側壁も境目のない石を積んだ」截石切組積石室を有する古墳でなければならず、しかも入口（羨道）の高さ五尺（1.5m）あまり、よこ三尺（0.9m）あまり、うちに入りて（玄室）高さ七尺（2.1m）あまり、深さ五間（9m）はかり、横九尺（2.7m）はかり、の規模の石室でなければならない。測定具を持たない奈佐勝皐の目測であるための誤差は捨象するとしても、南下E号古墳ではその規模が矮小に過ぎ、南下A号古墳の規模に極めて近い。

このことから、南下A号古墳は天明期以前にはすでに石室が開口しており、截石切組積の美しい石室が、近在では周知の事実であったものと思われる。

さて吉田芝渓の足跡であるが、武州熊谷の医師三浦無窮[75]の寛政12年（1800）の『上毛紀行』によると、野田の医師原沢文仲[76]のもとへ4月6日吉田芝渓が訪ねてきたという記事がある[77]。『山吹日記』の奈佐勝皐の案内をした青梨子村の葛西玄沖や華蔵寺の浄聖上人と上野田村の原沢文仲、そして渋川村の吉田芝渓の繋がりを透かしてみると、かなり色濃い好古の知的ネットワークが介在しているように思える。このような事実からして、截石切組積石室については、吉田芝渓や浄聖や葛西玄沖等の話題に当然のぼったことが窺え、後年『上毛上野古墓記』として結実する見聞記は、彼らを中心とする考古ディレッタントとの知的接触なくしては不可能であったと思われる。

華蔵寺の住職浄聖は博識多才の人で、「広く内外の典籍をあさり、国漢史学に精通し、神道・仏道・儒学の道はもとより、天文・地理・医学・詩歌・俳諧におよんだ。蔵書数千巻を有し、日本の古史を求め、容易に手に入らないものは自分の手で写し取り、年月を重ねて一大叢書となったので『叙史類苑』[78]と呼んだ。」と熊谷の医師三浦無窮の『上毛紀行』に記されている。また『山吹日記』の著者奈佐勝皐との交際も厚く、さらに国学者塙保己一[79]の『群書類従』[80]の成立には、彼の蔵書と学識が背後の大きな支えになったといわれる。

当時の大学者塙保己一や奈佐勝皐等の国学ネットワークのほぼ中心に位置した僧浄聖の影響

を、直接に享受した吉田芝渓の幸運はいかばかりであったろうか。

このように、僧浄聖を媒介にした榛名山東麓の地方文人ネットワークが、江戸の文人ネットワークと結ばれる様が、18世紀後半の上野国渋川周辺の知的営為の醸す情景なのであった。

・村落による古墳の改変

外池昇は『上野国郡村誌』[81]の分析と検討から「村落の再生産構造における古墳・塚の役割」について論じ、「どんな些細にみえる発掘・削平の記述でも、個別的、また偶発的な行為としてでなく、村落における何らかの生業の一過程を示すものとして捉えなければならない。」としている。[82]そして村落における営為の一つとして、古墳にたいする耕作・採石等の事実を指摘している。

外池の前掲論文によれば、例えば群馬郡金古駅条を見ると「愛宕山石穴（略）往年ハ長凡15間モ塚形アリシト云、後漸ク破壊シ僅ニ其状ヲ遺セリ（略）」とある。また勢多郡勝沢村条には「陵ノ形三カ処（略）本村中所々其官員方葬祭ノ古跡ト見ヘ陵ノ容ヲナシ、土中ニ横穴有テ刀・矢ノ根等ヲ得ル、今ニ三カ所現存シ、其外ハ農民鑿テ其跡ノミ」と、農作業の一環として古墳の削平が行われたことが示唆されている。

吉田芝渓の『上毛上野古墓記』中にも、愛宕山古墳[83]の項で「陵の南には付近の民衆の墓が5,60基存在し、いずれも陵を削り墓域としている。(中略)聞くところによると、最初にあばかれて羨道が確認された時、石室の中は暗くて何も見えず、あえて入ろうとするものも無かった。(略)その後、石工が石を求めて移り、玄門をあばいたことがあった。」と記されている。

また関重嶷の『発墳暦』には、「淵名邑淵名院の主僧が、ある夜ひそかに後ろの丘を掘って仏像や古器を多くえた。」というような、古墳をあばいて遺物を掘り出した記事が散見する。

このことは人類学者清野謙次の「特に安永寛政頃から勃興した日本に於ける考古学的研究の趣味と考察とは、発掘品に就いて有識者に大なる関心を抱かしめたるのみならず、好古趣味と弄石趣味との普及は、古墳の乱掘と破壊とを将来した。」という指摘を肯定する。[84]

吉田芝渓は確実にこのような光景の中に身を置いているのである。

(3) 水戸学との邂逅

・吉田芝渓と水戸学

文化2年(1805)、吉田芝渓は弟子の木暮足翁を伴って水戸へ旅した。水戸藩主徳川治紀[85]に召され、謁して『開荒須知』『養蚕須知』を献上したのである。この時芝渓は、水戸藩の伝統的な尊皇思想を培った水戸学[86]にふれ、またその民政におおいに関心をもったといわれる。

年代から推測して、吉田芝渓が洗礼を受けたのはおそらく前期水戸学である。「皇室尊信の姿勢こそが、まさしく秩序の思想として、徳川政権が君臨する『当代』も含めた歴史の安定要因になる、というのが前期水戸学の逆説的な論理だったのである。」[87] とすれば、後述するように、『上毛上野古墓記』において吉田芝渓が発したメッセージは、「皇室尊信の姿勢こそが、まさしく秩序の思想」であるという前期水戸学の根本原理を、正統に継承した結果に他ならない。

後年木暮足翁や堀口藍園[88]に代表される渋川郷学の人々が、水戸学の磁場に感応し、水戸学に素

朴な憧れの感情を抱くに至る基はここに成立するのである。

・蒲生君平と吉田芝渓のトポス（topos）

文化５年（1808）『山陵志』[89]を著した蒲生君平[90]は、吉田芝渓と同様に前期水戸学の感化を受け、寛政８年（1796）と寛政12年（1800）の２回にわたって山陵の探索をおこなった。君平は実地調査による所見から、古墳の形式上の変遷を帰納し、それに基づき山陵の比定を考証している。そして、その結果を演繹して古墳変遷論を樹立している[91]。

吉田芝渓が『山陵志』を繙いたであろうことは、『上毛上野古墓記』の記述から推測してまず間違いない。そして、吉田芝渓も蒲生君平と同様に徹底的な現地調査を行い、愛宕山・宝塔山・蛇穴山の三古墳の石室の計測と詳細な観察を行っている。そのうえで、三古墳の石室を製作技法から編年し、記紀の記述をもとに成立年代の推定にまで及んでいる。

古墳の墳丘と石室という対象の違いこそあれ、19世紀初頭に、遺物にではなく遺構に注がれた蒲生君平と吉田芝渓の眼差しの同質さは、何と表現したら良いのだろうか。ここに、彼我の時代精神と知的時代相の織りなす知的営為にも同質のトポス[92]を見なすのは、穿ちすぎた見方だろうか。

4　文化７年秋８月渋川芝渓田友直識・『上毛上野古墓記』の分析と検討

(1)　『上毛上野古墓記』の成立

・「心に憤りを含む人」として

漢文で記された『上毛上野古墓記』の結語は、「私はこれらの陵に臨んでは嘆息し、涙が流れることを禁じ得なかった。その結果として、見聞したところを記録し、同志の人々に伝えるのみである。」と結ばれている。文化７年（1810）吉田芝渓の死の前年にものされたこの著作には、「芝渓の晩年、わずかに現れていたのが、地域を超える普遍と統合を示唆するかのような『天子』への言及であった。芝渓学は、のち全国統合を手探りする草莽活動に通じる志向を、その一端にはらんでいたことになる。」[93]というように、水戸学の影響と国学的な色彩が看取される。これは19世紀初頭という時代の趨勢であったのだろうか。

杉仁は近世中後期在村文化の構造を、「上層」としての漢学・漢詩文層と、「下層」としての村役人・豪農商・在方商人層にもっとも一般的な「俳諧層」の二重構造として把握し、吉田芝渓の在村文化における位置を明らかにしている[94]。「俳諧活動のつながりは、地域の内外にひろがる在方商業の活動網とかさなって展開した。自然と人間の調和的世界を幻想させ、俳諧仲間の調和的幻想は、地域経済圏の秩序永続の幻想とかさなった。地域経済圏の調和と維持の永遠の楽観視を願う村役人・豪農商にとって、俳諧など在村文化への参画はほとんど必然であった。」それに比較して吉田芝渓の担った「在村文化の『上層』にいた漢学・漢詩文層あるいは和歌・国学層は、地域圏の調和的世界を俳諧層ほどには楽観視しえなかった。漢学・国学など何等かの形で地域をこえうる視点をもつことによって、はやくから地域秩序の崩壊を感じとった漢詩文層は、朱子学的楽観世界に反する危機的な現状の打開を求めて古学や折衷学にすすむものが多く、和歌層も詠嘆

的な自然世界の調和に反する現状の秩序回復を復古主義に期待した。」[95] としている。

「上層」の漢学的視座を若くして身につけた吉田芝渓は、はやくから商品経済の急速な進展と階層分化から地域秩序の崩壊を予感して、代官所への「上書」を繰り返し[96]、荒れ果てた芝中[97]を開発し、『開荒須知』や『養蚕須知』を著述し、「心に憤りを含みたる人」（開荒須知）として生きた。芝渓の「心に憤りを含みたる人[98]」とは、そうした現状への認識と批判をつきつめ、それを積極的に乗り越えるものとして措定された。それは、渋川郷学の祖である教育者吉田芝渓の期待すべき人間像の表現であるとともに、儒学者吉田芝渓の思想を錬磨すべき大いなる実践の場であった。

そして、文化３年前期水戸学の洗礼を受けた吉田芝渓にとって、「上州一統の風俗」崩壊の兆候に対処すべく到達した理念が、始祖豊城入彦命からの三代の皇子等[99]の顕彰であった。『上毛上野古墓記』に封じ込めた吉田芝渓の意図は、前期水戸学の「皇室尊信の姿勢こそが秩序の思想」であるという根本原理とオーバーラップさせると、あぶり絵のように理解できる。それは「上州一統の風俗」崩壊の兆候を、始祖豊城入彦命以下三代の皇子の実在を証明することにより、秩序回復させようという企てであった。

後年明治前期の群馬県令楫取素彦[100]が「群馬県の統一は、一国一藩の国のように一斉に改革しても一斉に施策がゆき渡ることのできない政治機構下におかれていた。それは上野国が江戸の防御圏内としての軍事的な要求から極端な分割統治下におかれていたからである。藩も前橋の17万石が筆頭で、僅か１万石なのは吉井、七日市の両藩で、９藩合わせても40万7000石、平均５万石にみたない。その間に多くの天領や旗本領が犬牙錯綜していて、さながら寸断された形であった。」[101] と いうモザイクさながらの支配形態から派生した「上毛一統の風俗」の崩壊現象に苦慮し、群馬県民の求心力を歴史と伝統に求めた思想と軌を一にする。[102]

・伝承の増幅

総社古墳群についての記事の初出は、宝暦10年（1760）釈迦尊寺住職釈泰亮（愚海）[103]の輯録した『上毛伝説雑記15巻・上野伝説上』と『上毛伝説雑記拾遺７巻・総社記』[104]である。『上野伝説上』には「然れば上野といふは、上野国府に疑なきか。王宮の証拠には、王屋敷・三王宮・王馬塚・厩橋・王渡・王友等の地名今に存す。又御墓の跡の証拠には、石室山・愛宕山・雙子山・蛇穴山・観音山・飛山、各々九尺或は一丈四方の大穴ありて中に石櫃立つ。長さ四尺程、横も四尺計り、長さ八尺程、穴の櫃に、一枚石の蓋あり。また人皇十代より四十代までの内、上毛野の君も十代は之あり、此外にも数多の君王あるべけれども、今詳に知り難し。又後世に到りては、上野を植野と改め、王渡・王友等の字も大とし、御霊を五料にかえ、追腹を生原と書きかへ、また毛野国を上下に分ち、上毛野国・下毛野国といひしを、又毛の字を除き、上野国・下野国と書く類多し。」とある。石室山は宝塔山古墳に、雙子山は総社二子山古墳に比定されるものと思われる。また蛇穴山古墳は上毛野君田道の墓として触れられている。そして僧釈泰亮は上野の地を国府と比定する根拠を２点あげている。ひとつは王屋敷・三王宮・王馬塚・厩橋・王渡・王友等の植野周辺に散在する地名からの推定で、これは現在の地名学の先駆けと見なすことも可能である。もうひと

つの根拠は、石室山（宝塔山古墳）・愛宕山・雙子山（総社二子山古墳）・蛇穴山の横穴石室の大きさが、他の小古墳の横穴石室と比べて巨大であることと、石室山と愛后山の希な石櫃（石棺）の存在に注目して王墓である証拠としている。

宝暦10年成立の『上毛伝説雑記』の記述から理解される考古的記事は、宝塔山古墳[105]・蛇穴山古墳[106]・総社二子山古墳[107]後円部石室の開口時期が、確実に宝暦年間を遡るということ。そして、18世紀中葉を生きる人々の視界に、漸く記紀の記述を前提として、古墳やその石室等の考古遺構が市民権を得つつあるという事実である。

天明6年（1786）の国学者奈佐勝皐の毛武旅日記である『山吹日記』[108]には、「光岩(巌)寺と云める禅りんは山形侯の氏寺とて、境内の小山の上に世々のはかならへり。うしろのかたにめくりて見れは、是も南にむきて石室あり。けふ大窪なるをことにいかめしと思い給へしに猶まさりてなん。石のさまたくひなし。此東の方一町あまり隔てまた高き所のうへに観世音の御堂あり。其下に是も南に向て同しようなる有。口の方をつくろひかへて弁財天を安置せり。この観世音の御堂のはつれにやすらう。すさかいふ、むかひの小堂のうへ御らんせよ、いみしきへみのいて候というに、あふき見れは、けにむねのほとにまとひつきてかしらもたけて下の方を臨みつつあるを見て、いやて、玉をこそふくみつらめといふに、そはいつのむくひするならんとかたみに云。(中略)此あたりもと皆植野の地にてふるくは上野とかけり。いにしへ三諸別王このくににくたりてよよここに住給ふ。今も王屋敷とよへる所あり。わう友、わう馬塚なときこゆる皆いにしへを残せるなるへし。」と実際に踏査した事柄が記されている。

文中の「すさ」というのは連れ或いは案内者という意味で、文脈から華蔵寺の住職浄聖と青梨の医師葛西玄沖であることが知れる。宝塔山古墳については「うしろのかたにめくりて見れは、是も南にむきて石室あり。けふ大窪なるをことにいかめしと思い給へしに猶まさりてなん。石のさまたくひなし。」と、南下A号古墳と考えられる「大窪なる」古墳と比べてもさらに立派であるとしている。蛇穴山古墳は「此東の方一町あまり隔てまた高き所のうへに観世音の御堂あり。其下に是も南に向て同しようなる有。口の方をつくろひかへて弁財天を安置せり。」とし、蛇穴山古墳の名称の由来である上毛野君田道[109]の故事についても浄聖や葛西玄沖から説明を受けている。彼ら考古ディレッタントの中で『上毛伝説雑記』の記事は当然の前提であった。

奈佐勝皐の古墳の石室を観察する視点は、計測値ではなく「石のさま」に向けられ、宝塔山古墳が「石のさまたくいなし」であるがゆえに王墓であるという認識が生じてくる。

『山吹日記』の成立した天明6年から24年後の文化7年（1810）に吉田芝渓の著した『上毛上野古墓記』は、いわば『上毛伝説雑記』と『山吹日記』の総社古墳群にたいする問題意識をさらに深化し、論理化した地点にある。換言すれば、各所に流布していた上毛始祖伝承としての豊城入彦命伝承[110]が時代意識により増幅し、ここにひとつの完成された姿を見せることになる。

(2)　つぶさに墳陵の状態を見、計測し

川村肇は吉田芝渓の学問的態度を評して「『欲』の積極的肯定・農村荒廃についての孟子の把握

批判・『唯物』的学問態度はリアルに現実を反映しようとする芝渓の立場の現れである。現実の把握がリアルでなければ開荒の役に立たない。そしてリアルでなければ農村の現実を変革できないのである。」とし、「徴すべからざるもの」「測度すべからざるもの」を認めないという、優れて科学的合理精神に富んだ側面を指摘している。(111)

川村の指摘する吉田芝渓の観察と計測重視の学問的態度は、『上毛上野古墓記』において随所に遺憾なく発揮されている。そして芝渓が58歳の老軀を駆って「徴し」「測度した」順路そのままに記述がなされており、この見聞記を手に踏査すれば総社古墳の主だったものは理解できる仕組みになっている。ここにも教育者吉田芝渓の面目が躍如としている。

「石のさま」の観察では、「東西北の側面と上下の天井と床の各々が一石で築かれ、巧みに磨きあげられた正方形の箱のようである。北側の壁石の正面には梵字が鏤金されているが、これは最近刻まれたもので、弁財天女を祭っている。」と蛇穴山古墳石室の様子を的確に表現している。

また宝塔山古墳の石室は「扉石ほ一巨石で、東西北の壁はそれぞれ数石で築かれ、羨道から玄室に至るまで皆磨かれており、玄室には漆喰が塗られていたのが所々残っている。ただつくりは初陵（蛇穴山古墳）よりも粗い。」と「石のさま」を比較観察している。

さらに愛宕山古墳の項では「石は蛇穴山古墳や宝塔山古墳のように磨かれていないが」と、「石のさま」を磨くという観点から分類し、①巧みに磨きあげられた（蛇穴山古墳）、②羨道から玄室まで皆磨かれており（中略）ただつくりは初陵よりも粗い（宝塔山古墳）、③磨かれていない（愛宕山古墳）、という「石のさま」に分類基準をおいた順序づけをしている。

吉田芝渓の「測度した」計測値を検証するために、群馬県史資料編宝塔山古墳の計測値と比較対照したのが第１図である。

例えば宝塔山古墳の一辺は30歩で、１歩を1.8mとすると54mになり、現在の計測値とほぼ一致する。また愛宕山古墳は一辺が50歩程の方墳と記され、90mに相当する。最近の前橋市教育委員会の確認調査(112)によると、愛宕山古墳の周堀を含めた一辺の計測値が90mとされており、吉田芝渓の記述がかなりの精度を有していることを証明している。

(3) 古記を引いて

・被葬者の比定

吉田芝渓が『上毛上野古墓記』を著すに至った動機のかなりの部分を、この「被葬者の比定」という作業が占めているという事実は動かしようがない。『日本書紀』の記述によりながら吉田芝渓は、「私が思うに、豊城入彦命は民衆と和らぎ楽しみ情けや恵みをもって接した。それだから、民衆は豊城入彦命の孫である彦狭島王が赴任できなかったことを悲しみ、王の亡きがらを盗み上野国に葬ったのである。彦狭島王の亡きがらが上野国に葬られたとすれば、必ずや近くに祖父である豊城入彦命の陵もあるはずである。そして子王である御諸別王の陵もまた遠からず築かれたものと思われる。」とする。ここで吉田芝渓がいわんとしているのは、豊城入彦命と彦狭島王と御諸別王の三陵が築かれたのは、上野国のある地域、端的に言えば総社植野(113)の地にまとまっている

というのである。

「上毛野国は東山道の中央で、東国の入口にあたる政治の最も重要な地である。植野の西南20町の所に国府村[114]がある。伝承によると古代に上野国府の存在した所である。城跡や墓祉が田中の所々にいまだ残っている。享和年間に村民が、田中からかしいだ器を見つけ川越侯[115]に献上したことがある。有識者の語るところによると、いわゆる座右において戒めとする器で、これは明らかに君主の戒めの器であり、天皇や皇族でなければ誰がこれを使うであろうか。」

吉田芝渓は享和年間に村民が発見したというかしいだ器を、座右に天皇や皇族の置く戒めの器であると認識し、暗に三陵と豊城入彦命や彦狭島王や御諸別王との関係を示唆する。

「また近くの村の所々には墓穴が大変多く、皆陵のような玄室をもち、必ず石で作られている。玄室内は方形で広く皆同じようであるが、三陵のような壮大な巨石を使用したものは一つもない。」

三陵にたいするこの見解は、釈泰亮の『上毛伝説雑記』以来の上野国考古ディレッタント達の公式的見解で、彼らのものした地誌類[116]には頻繁に引用されている。

吉田芝渓の思考は、『日本書紀』の記述を論理的に解釈して、伝承をさらに深化させる。

「考えると、孝徳天皇大化2年（646年）に墓穴の制（薄葬の詔）を初めて定めて、王以上の墓はその内長9尺、幅5尺で、外域（墳丘）は方9尋、高さ5尋に規制された。このことから、三陵の墓穴は薄葬令[117]にてらすと広すぎて、それ以前の築造は明らかである。また天智天皇6年(666年)には、石槨の役[118]を起こさず(石室を作らない)、このことを永代にわたって手本にして欲しいとの詔があった。このことからも、石槨の役は天智6年以前に築かれたのは明らかである。以上のことを併せて考えれば、植野三陵は豊城入彦命と彦狭島王と御諸別王の陵墓であることはほとんど疑う余地はない。」

吉田芝渓の論理構成は、『日本書紀』の記述を前提に置くという史資料的限界をもちながらもかなり鋭い。(明治期の実証的研究者とされる八木奘三郎や坪井正五郎でさえ記紀の呪縛に囚われていたという事実がある。[119])

「ついては私が思うに、溝西の大陵（愛宕山古墳）は必ず豊城入彦命の陵である。その理由は、規模が壮大で石が磨かれておらず最も古い様相を示し、かつ羨道は臣民が作ることができないというところにある。また豊城入彦命は天皇の兄であるが故に羨道をもつことができる。あるいは天皇のお許しがあったかもしれないが、今では分からない。はたまた、陵のすぐ西に命の副葬品を埋納した陵(総社二子山古墳)が存在するというのもそれが命の陵であることを証明している。」

愛宕山古墳（溝西の大陵）は「規模が壮大で石が磨かれておらず最も古い様相を示す」が故に、上毛野国の始祖である豊城入彦命の陵に比定される。吉田芝渓が傍証としてあげている「命の副葬品を埋納した陵」というのは総社二子山古墳のことで、この古墳の被葬者の比定については何回かの変転を見ている。[120]

総社二子山古墳は前方部と後円部に石室を持つ希有な古墳で、伝承では「豊城入彦命の副葬品

を埋納した陪塚」として土地の人々に認識されていた。

この伝承の成立について筆者は一つの仮説を考えている。この仮説の証明には後日を期するとして、本稿ではそのあらましを述べてみる。

植野を含む総社周辺が驚天動地の大変革を被ったのは、慶長年間の秋元氏の総社入部に伴う城下町の形成と新田開発ラッシュによるものであった。[121] しかしながら、この現象はひとり総社藩のみのものではなく、日本国中が近世初頭の大開発時代の大いなる熱病の中にあった。

①前述のような時代状況の中で、総社二子山古墳の後円部石室が発掘された。

②綿貫観音山古墳[122]と相前後する時期に築造され、ほぼ同規模で、同形式の角閃石安山岩削石積石室[123]を有する総社二子山古墳後円部の副葬品は、おそらく綿貫観音山古墳のものとそれほど遜色のない内容が推定される。それではどうして豊城入彦命の陵墓とされずに、その副葬品を埋納した陪塚とされたのだろうか。それはひとえに、骨もなく石棺も安置されていないという理由による。しかしながら、その豪華絢爛たる副葬品の記憶は伝承となり、始祖豊城入彦命の陪塚という合理化された伝承に増幅された。

③それらの副葬品は勝山の元景寺[124]に預けられたが、その後散逸してしまう。総社二子山は元景寺の地所として、徳川秀忠から朱印状をもらった地である。

④御朱印地であるが故に、以後文政2年まで手がつけられない。

⑤吉田芝渓が『上毛上野古墓記』を著した文化年間には、総社二子山古墳が豪華な副葬品の記憶・伝承から、豊城入彦命と何等かの関係があると認識されていた。

⑥それ故に吉田芝渓は、植野三陵の中では一番古いと考えた愛宕山古墳を豊城入彦命墓とし、総社二子山古墳を豊城入彦命の副葬品を入れた陪塚とせざるを得なかった。

⑦文政2年に、総社二子山古墳の前方部石室が開口し人骨の埋葬が明らかになると、豊城入彦命の陵墓として認識されるようになる。

その後、総社二子山古墳は豊城入彦命の陵墓として明治9年公式に認められるという軌跡をたどることになる。しかし、後日の暗転については筆を改めて詳述したい。[125]

「寺前の陵は必ず彦狭島王の陵である。その玄室は溝西の大溝より小さいが、製作技法は頗る上質で、羨道をもっている。これは民衆が王の亡骸を盗んで、葬式を命の陵で執り行い、その精力を尽くして作ったが故に美しいのである。」

寺前の陵というのは宝塔山古墳のことで、精巧に作られた家形石棺[126]が玄室内に設置されており、畿内の同時期の石室と比べても遜色のないものである。宝塔山古墳を吉田芝渓が彦狭島王の陵墓としたのは、植野三陵のうちで石室の制作技法から勘案して、単に愛宕山古墳（溝西の大陵）の次に位置づけられるが故に、彦狭島王の陵墓とされる。「精力を尽くして作ったが故に美しい」というのは、吉田芝渓の感情が横溢したレトリックである。

「観音閣の下の命の陵（蛇穴山古墳）は、三陵の中で玄室が最も小さく、平地に羨道が作られている。玄室は二陵にならっているが、その製作技法は極めて良質である。この陵は豊城入彦命の

時代からおよそ170年ばかり後のもので、かなり文化程度の進んだ時代の製作物である。私は以上の点から、この陵は必ず御諸別王のものであろうと考えている。」

御諸別王は『日本書紀』の語るところでは豊城入彦命の曾孫にあたり、皇紀年の換算によると、およそ170年ばかり後の時代に当てられ、さして時間的齟齬は感じられない。さらに三陵の中で一番新しい理由として、吉田芝渓は玄室が三陵の中で最も小さいこと、平地に羨道が作られていること、製作技法が極めて良質で最高であることをあげる。このことの故に蛇穴山古墳は御諸別王の陵墓となるのである。

かくして吉田芝渓は植野三陵の被葬者として、愛宕山古墳に豊城入彦命、宝塔山古墳に彦狭島王、蛇穴山古墳に御諸別王を比定し、始祖豊城入彦命以来の連綿たる皇統の譜が継続していることを『上毛上野古墓記』によって証明しようと企てたのであった。

・古墳の順序付け

吉田芝渓の言う植野三陵が含まれる総社古墳群研究の現在的な到達点は、右島和夫の諸研究に詳しい。[127] 右島によれば「総社古墳群は、6世紀前半に位置づけられる王山古墳に始まり、一世代おいてか、その後、総社二子山古墳、遠見山古墳、総社愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳と連綿と首長の系譜がたどれる。」としている。[128]

また右島はさらに踏み込んで、愛宕山古墳の「墳形、石室の構造的特色、家形石棺の形態的特徴からするならば、明らかに総社二子山古墳に後出するものであり、また、宝塔山古墳の一段階前に位置づけられる。」とし、その築造を7世紀前半としている。宝塔山古墳や蛇穴山古墳についても、愛宕山古墳と同様な考古学的視点から、それぞれ前者を7世紀後半、後者を7世紀末葉の築造と考えている。

吉田芝渓は必ずしも考古学的記述を目指したものではないにしても、「つぶさに墳陵の状態を見（徴し）、計測し（測度）」という観察と計測を重視した彼の学的態度は、三陵の墳形や計測値をかなりの精度で捉え、「石のさま」と表現された石室の構造的特色を的確に観察し、ひいては（記紀を利用するにあたっての文献史料批判が、現代的視点からは全くないにしても）日本書紀の記述を引用しての論理構成は見事というほかはない。敢えて言えば吉田芝渓の結論への思考は、今日的学問成果という前提さえ与えられれば、確かな道筋で正しい結論が導き出せる程の上質な論理の組み合わせであると言えよう。

5　む　す　び

・内山真龍と吉田芝渓

遠州国学の代表的指導者内山真龍[129]は、「『出雲風土記』研究から出発しながら、自らの住む遠州を対象とする『遠江国風土記伝』『遠州集説』『遠江国説』の研究[130]に沈潜することによって、上古より歴史のある遠江が、世が下るにつれて所伝の古説が亡び、そのために新しい勢力が台頭して、古説を保持するものの地位が動揺したと考えていたと思われれる。そしてそのためにも、古書に

ある遠江国の歴史をよみがえらせることによって『古風』を復活させ、地方支配に役立たせたいと考えたのである。」とされる人物である。また真龍がその代表的著作『遠江国風土記伝』の完成につとめたのは、天明の打ち壊しと関連があるといわれる。

吉田芝渓とほぼ同時代を生きた国学者内山真龍は、芝渓と同様に何等かの形で地域をこえうる視点をもつことによって、はやくから「天明の打ち壊し」に代表される地域秩序の崩壊を感じ取り、風土記研究を深めていった。真龍の本懐は、地域秩序の崩壊を『遠江国風土記伝』等の著作を通じて「古風を復活させることによって、遠州一統の風俗を安定させる」ところにあった。

「近世」パラダイム世界をほぼ同時期に経験した二人の地方文人吉田芝渓と内山真龍が、ひとりは上州に、ひとりは遠州にあって、地域秩序の崩壊を予兆し、ひとりは「皇室尊信の姿勢こそが秩序の思想」であるという論理をもち『上毛上野古墓記』を、ひとりは「古風を復活させることにより」という国学的理念のもとに『遠江国風土記伝』を上梓したのであった。

この事実からも理解されるように、『上毛上野古墓記』に表明された吉田芝渓の「上州一統の風俗」崩壊の予兆にたいする言説は、ひとり芝渓だけの言説ではなく、18世紀中葉から19世紀初頭を生きた地方文人の思想的軌跡を物語るレクイエムにも聞こえる。

・プレ遺構図としての『上毛上野古墓記』

吉田芝渓の『上毛上野古墓記』における記述は、前述したように、「つぶさに墳陵の状態を見(徴し)、計測し（測度し）」という観察と計測を重視した彼の学的態度は、三陵の墳形や計測値をかなりの精度で捉え、「石のさま」と表現された石室の構造的特色を的確に観察し、図表現こそないが、それはまさに「プレ遺構図」ともいうべき具体性を備えている。

管見によれば、江戸時代後期の古墳石室に関する遺構図は、矢野一貞[131]（1794〜1879）の『筑後将士軍談』[132]所載の「筑後国生葉郡上宮田村在宮田石窟朱象図及窟中図」（重定古墳石室）[133]が白眉である。豊穣な図表現に正確な計測値と注記を書き込んだ図は、江戸時代の「考古知」の頂点を極めているといえよう。そして、吉田芝渓の「プレ遺構図」はそれに描くという要素を付け加えれば、僅か半世紀のタイムラグを経て、矢野一貞の美麗な「窟中図」に遭遇可能な地点にまで到達していると思われる。

それではなぜ吉田芝渓は、かくも正確な「プレ遺構図」とも言うべき『上毛上野古墓記』を書かねばならなかったのであろうか。それは、僧釈泰亮の『上毛伝説雑記』以来陵墓の根拠となっている三古墳の石室の巨大さをさらに強調するために正確な計測値が必要とされ、奈佐勝皐の『山吹日記』に記されたように、「石のさまたぐいなし」であるからこそ陵墓であるという証明のためにことさら克明な観察が要請されたのであった。

・「考古知」と知的ネットワーク

吉田芝渓の事例からも理解されるように、地方文人の「考古知」はその周囲の考古ディレッタント達（僧浄聖や葛西玄沖や原沢文仲）との知的交歓の中で鍛えられ深まっていった。

翻って江戸時代日本の考古史[134]（考古学史ではなく）を飾る巨人達、例えば木内石亭や藤貞幹[135]や

蒲生君平の「考古知」の様相を考えてみても、弄石社中に代表されるような知的ネットワークが存在し、知的刺激の横溢する情景のなかから自らの志を『雲根志』や『集古図』[136]や『山陵志』に刻み、結果として石亭や貞幹は分類学の眼差しを得、君平は古墳変遷論にまで言及している。彼らはともに表現するという知的営為を通じて、はじめて「考古知」者たりえ、現代の学的視線にも耐えうる著作をものすることができた。

それは地方文人吉田芝渓についても同様である。そして上野国においては、その後この「考古知」と知的ネットワークの不即不離の関係が、明治期には井上真弓[137]の『大室二子山室内并出品位置之図』[138]を描かしめ、昭和初期には、「考古知」レベルから堂々とした「考古学」の高みにまで到達した福島武雄[139]の『上野国箕輪町上芝古墳の発掘調査』[140]を成功させたものと思われる。

最後に本論攷を成すにあたって、原漢文である『上毛上野古墓記』を現代文に翻訳するという作業が不可欠であった。とても筆者には手に余るもので困惑していたところ、群馬県埋蔵文化財調査事業団職員遠藤俊爾氏の手助けを得ることができ、なんとか成稿に漕ぎ着けることができた。遠藤氏には誌上を借りて感謝する次第である。また遠藤氏との共同作業の成果は、『訳文・上毛上野古墓記』として本稿の後に掲載する。

(19960630稿)

【本研究は、平成8年度文部省科学研究費補助金（奨励研究 B）の成果である】

表1　宝塔山古墳石室計測表

		吉田芝渓	群馬県史資料編
墳丘	方	30歩　(54m)	南北辺　54m
	高	3丈余　(約10m)	12m
羨道	高	7尺　(2.12m)	2m
	上幅	4尺5寸　(1.364m)	
	下幅	6尺　(1.82m)	1.86m
	高	3丈　(9.09m)	8.90m
玄門	高	4尺5寸　(1.37m)	1.43m
	幅	4尺8寸　(1.454m)	1.485m
玄室	一辺	9尺5寸四方 (2.88m)	2.90m（右壁）
	高	6尺8寸　(2.06m)	2.07m
石棺（身）	長	7尺　(2.12m)	2.08m
	幅	3尺7寸　(1.121m)	1.125m
	高	3尺　(0.909m)	0.90m
蓋	長	7尺3寸　(2.212m)	2.280m
	幅	4尺2寸　(1.273m)	1.30m
	厚	5寸　(0.152m)	0.150m

注　一歩は1.80m
一尺を30.3cmで換算

註

(1) 岸田治男「昭和初年群馬県に於ける郷土史研究者の一動向」『群馬県埋蔵文化財調査事業団紀要』10号　1992

(2) 昭和4年2月、柴田常恵の指導助言により福島武雄・岩沢正作等の手により調査された。その報告は福島の夭折により頓挫したが、昭和7年福島の志を継いだ岩沢や相川龍雄の努力により、『群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2輯のなかに掲載されている。

(3) 昭和5年の「考古学」誌上における、森本六爾「埴輪研究史略」や谷木光之助「埴輪の装置状態」の諸論攷が、同時代人の証言として、上芝古墳発掘調査の成果が当時の日本考古学会に与えた影響の大きさを物語っている。

(4) 最初は僧侶で次に新聞記者として出発した豊国覚堂（1865～1954）は、大正2年から上毛郷土史研究会を主宰し、機関誌「上毛及上毛人」は昭和17年の終刊までに通算300号を数えた。また考古分野の論攷は約40％を占め、岩沢正作や福島武雄や相川龍雄の活躍の場ともなった。覚堂自身は高山彦九郎の研究者であるが、強烈な彼の「郷土本位の思想」が戦前の群馬県郷土史研究を支えたといっても過言ではない。

(5) 「上毛郷土史研究会」は大正2年に設立され、事実上の活動は大正11年に組織された「上毛考古会」として、昭和6年の藤岡十峯閣の上毛考古会例会まで都合19回を数え、群馬県郷土史研究の総本山としてあまたの郷土史研究者の交流の場を提供し続けた。

(6) 「パラダイム」という術語自体は、科学史家トーマス・S・クーンがその著「科学革命の構造」で唱えた科学史の概念で、科学革命が起こる歴史過程を「科学者集団」に従属した「パラダイム」の転換として観察している。本論攷では「近世」パラダイムという術語の内容を、田中優子のいう「近世的なものとは、人工するエネルギー、極端な文化的爛熟であるとともに、過去への熱い視線であった。『外部』＝『異質なるもの』との出会いであると同時に、総てのものが『相対的』であることの発見であった。」という言説に代表させる。

(7) 川村肇「民衆儒学へのアプローチ」『江戸の思想3』ぺりかん社　1996

(8) 田中優子「江戸の想像力」ちくま学芸文庫　筑摩書房　1992

(9) 山田慶児編「東アジアの本草と博物学の世界上」思文閣出版　1995

(10) 山田編　前掲書

(11) 芳賀登「日本近世における地誌学の発達」『地方史の思想と視点』柏書房　1976

(12) 芳賀　前掲書

(13) 「上野国志」は新田郡世良田村の毛呂権蔵が、安永3年（1774）に完成した群馬県最初の総合歴史地理書である。文献・社寺縁起・口碑伝説・風俗習慣等の全15巻で構成され、独力で実地踏査して完成までに30年を要したといわれる。考証が正確で、今なお貴重な参考資料とされている。

(14) 「上毛伝説雑記」は群馬郡元総社村釈迦尊寺の住職釈泰亮（愚海）の輯録したもので、伝説雑記15巻中には「沼田伝説3巻」「吾妻伝説1巻」「白井伝説3巻」「上野伝説2巻」「和田伝説・赤城伝説1巻」「小幡伝説1巻」「小幡伝説付録1巻」「新田伝説3巻」を収める。「上毛伝説雑記拾遺」には、「総社記2巻」「石倉記1巻」「箕輪記1巻」「吾妻郡略記1巻」が収められている。該書は宝暦10年（1760）に成立したが、火災に遭い消失し、その後記憶をたよりに筆録して安永3年（1774）に再び完成した。以後の上野国の地誌類には多大な影響を与えている。

(15) 「上野名跡考」は 高崎藩士富岡正忠子厚（1774～1859）によって文化6年（1809）に著された上野国の歴史地理書である。正忠は上野全般の風土記・国史を撰することを志し、本書では、山川の形勝・支配関係・社寺・産物・気象・旧跡などに詳細な考証を加え、出典についてもそれを明確にしている。

(16) 「上野名跡志」は嘉永6年（1853）高崎藩の国学者で藤岡京屋弥兵衛の支配人富田永世が輯録した上野国の地誌である。国内の名跡や金石文・古社寺などの縁起を始め、郷村の沿革と旧家の発祥・変遷などを考証している。引用書が「古事記」をはじめ260余を数える。

(17) 「高崎須奈子」は高崎城下の地誌である。宝暦5年（1775）春、西田美英著で記述は城の歴史以下神社仏閣・風俗習慣などにわたり、当時の高崎宿の様子が窺える好資料である。

(18) 群馬県資料集第1巻風土記編「高崎志」解説

(19) 「高崎志」は寛政元年（1789）、高崎藩の史臣川野辺寛が著した高崎城下の地誌である。上中下3巻からなり、記事は高崎城の変遷、城下町の町名由来・名所旧跡・社寺宝物などにわたる。

(20) 「安中志」は安中藩主板倉伊予守勝明（1809～1857）が、所領3万石のうち上野国内約2万石の領内（碓氷郡内2町35か村、群馬郡内6か村）の名主に命じ、村内の石高・神社仏閣・山川・旧跡・口碑等を書かせ、編者の所見を加えて集録し、天保2年（1831）から数年を費やして編纂した。

(21) 「館林記」は館林城の盛衰を記したもので、総論から書きおこし尾曳城の由来、同城の築造者である赤井氏の盛衰、小田原北条氏との確執、攻防、佐野氏との争闘など24項目にわけられている。

(22) 芳賀　前掲書

(23) 彼らは全国の同好の士と手紙などで情報のやりとりをし、時には展観もおこない、それは出版にまでおよんでいる。

(24) 中谷治宇二郎「石を愛する心・木内石亭と弄石社中」『考古学雑誌26―4』1936

(25) 中谷　前掲書

(26) 信濃では他に上田上松洗馬・木曽福島藤沢善右衛門・小県郡岡村柳屋平左衛門等諸氏の名が見える。

(27) 安中市簗瀬に所在する全長78mの前方後円墳である。石室は明治12年に開口され、その際出土した副葬品は明治14年に描かれた画譜とともに土地所有者宅に保管されている。

(28)　「尚古帳」は明治14年に築瀬二子塚古墳石室から出土した副葬品を模写したもので、日本画の技法で描かれ美しく彩色されている。

(29)　岡村敬二「江戸の蔵書家たち」講談社選書メチエ71　1996

(30)　石原正明（1760～1821）は国学者で、寛政４年本居宣長に入門したが、しばしば師の説を批判して異形を放った。寛政末年江戸に出て、塙保己一に従いその信頼を得て、温故堂学頭として「群書類従」「類聚国史」の編纂校訂に尽力した。

(31)　屋代弘賢（1758～1841）は考証学者で、国学を塙保己一に、漢学を山本北山に学ぶ。後年滝沢馬琴の耽奇会に翌年兎園会に参加する。弘賢の学問は該博を特色として、類書の編纂に実績を挙げたが、塙保己一を助けて「群書類従」の編纂校訂に従事した功績も大きい。松平定信の信任篤く、しばしばその邸に呼ばれて歌を詠んだ。

(32)　「諸国風俗問状」は石原正明や屋代弘賢が各地の知友に送付した全国アンケートである。質問の項目は131あり、各地の民間の年中行事について、正月から12月までの項目と、季節と無関係の項目とからなっていた。

(33)　下野田華蔵寺の住職浄聖（亮衍・1738～）は博識の人で、江戸の大学者奈佐勝皐との交際も厚く、彼が上野巡遊にはもっぱら華蔵寺を足だまりとして旅をし、その筆になる「山吹日記」でも浄聖の博学をほめたたえている。従って浄聖が江戸へ出ても京都に上っても大家として待遇されたのは無論のこと、諸名家の随筆や書簡・著書の中にも「上野の人浄聖院の説」などと記されたものが各所にみうけられる。

(34)　杉仁「吉田芝渓年譜考・上州渋川『在村文化』の基礎研究」早稲田実業学校紀要　1990

(35)　「北越雪譜」は天保８年（1837）鈴木牧之三十余年の念願により初編３巻が板行された。山東京伝によって校訂され江戸の書肆により発行されたが、雪国の生活の飢寒の苦しさばかりでなく、特異な民俗や越後縮等の製作過程が鋭い観察力と細かい描写で詳述されており、今日でも資料的価値が高い。

(36)　この項は「『牧之』鈴木牧之顕彰会編1961」から大部分を引用している。

(37)　白井宿は1256（康元元）年長尾氏が築城した白井城の城下町で、利根川と吾妻川が合流する北群馬郡子持山裾野の先端に位置する。1624（寛永元）年白井城廃城後も六斎市として知られたが、三国街道の変更により衰えた。

(38)　耽奇会は文政７年（1824）の春から同８年の11月まで、滝沢馬琴や屋代弘賢・山崎美成をはじめ多くの好古の愛好家が参加し、古書画や古物や石碑等の拓本を持ち寄り展観・批評したもので、その図や拓本・考説などは「耽奇漫録」としてまとめられた。

(39)　高田藩、新発田藩、長岡藩、村上藩、村松藩、与板藩、三根山藩、黒川藩、三日市藩、州崎藩、椎谷藩の11大名である。

(40)　各藩には藩儒と呼ばれる儒学者が存在した。酒井氏時代の前橋藩では「前橋風土記」を撰述した古市剛がそれにあたる。

(41)　「高崎志」を撰述した史臣川野辺寛がこれにあたり、江戸詰時代の文化的交流による知的ネットワークを介しての江戸文化人との交歓がそのような著作の礎となっている。

(42)　伊勢崎藩執政関重嶷は「伊勢崎風土記」「発墳暦」「古器図説」等の著作があるが、これらの著作も江戸詰時代の森島中良等の江戸文化人との交歓を介しての文化的刺激が考えられる。

(43)　備後の菅茶山（1748～1827）の廉塾、豊後日田の広瀬淡窓（1782～1856）の咸宜園等は全国的に門人を集めた。これらの塾は多様な階層から入門者があり、「君は川流を汲め我は薪を拾わん」というような、身分、地域を越えた連帯感が育っていった（岩波講座日本文学史）。この状況は江戸の漢学塾でも同様の現象であったと思われる。

(44)　田部井鹿蔵（1880～1955）は穣村と号し、邑楽郡渡瀬村（館林市）に生まれる。1918年に渋川小学校長に就任し、1935年から全国小学校長会副会長を９年間勤め、教員給与の国庫負担達成など教員の地位確立に尽力した。
研究面では「堀口藍園と渋川郷学の研究」を大成した。

(45)　「第10節文化　３渋川の教学」渋川市誌

(46)　山崎石燕は宝永６年（1709）に、北牧宿（子持村）問屋山崎八郎左衛門の分家重郎左衛門の二男に生まれ、通称を源蔵、諱を興虎、号を石燕、君山、吾川、臥雲亭といった。下仁田村の高橋道斎に国学を、江戸に出て井上金蛾に儒学（折衷学派）を、また狩野派の絵を学んだ。吉田芝渓は石燕から儒学の基礎と人間の生き方を学んだ。

(47)　森田長渓は寒暑にめげず書物に親しみ、その範囲は経書、歴史、仏教書、詩文にまで及んだ。若くして柏木如旁に学び、長渓の学堂である蛙鳴館で多数の門人を教えた。1839（天保10）年82歳で没した。

(48)　町田延陵（1743～1806）は書家で、吾妻郡中之条町山田に生まれる。長じて儒学・詩文を平沢旭山・安達清河に、書を関鳳岡・三井龍湖・東江源鱗に学び、儒学・詩文・書道ともに大成の域に達した。後年水戸侯に招かれて孝経を講じて侯を落涙させたという。

(49)　角田無幻（1743～1809）は書家・修験の僧で、北群馬郡下野田の華蔵寺に生まれた。1759（宝暦９）年16歳の時、勢多郡津久田村の林徳寺角田廣観の法嗣となる。書法を東江源鱗に学び、後に晋唐古法を慕い一家を成す。

(50)　木暮足翁（1788～1861）は本名賢樹、渋川村南横町の農家に生まれる。吉田芝渓に漢学を学び、その学統「渋川郷学」を高橋蘭斎に伝える。24歳で家督を妹婿に譲り遊学。華岡青州に外科手術を、高野長英に蘭医学を学んだという。また歌学を屋代弘賢に、国学を本居太平に学んだ。帰郷して医を開業する傍ら塾を開き、門弟に和魂漢才・大義名分・尊王開国を説く。

(51)　僧周休は持柏木村で安永３年（1775）に生まれた。天明５年11才で同村の極楽院西善寺に入り、剃髪し周弁和尚につき仏道・学問を修行した。天明７年に檀林郷校（真光寺か）に入り８年間仏教学を学んだ。このころ吉田芝渓・翠屏について主として文章学を学んでいる。寛政７年21才の時江戸へ出て東叡山学寮に入り、８年間仏教や経史を、そして佐々木琴台に漢詩を学んだ。

(52) 「上毛上野古墓記」中に見える高井村の福島子徳のことか。
(53) 田中　前掲書
(54) 平沢旭山（1733～1791）は宇治に生まれた。若い頃京都の儒者（折衷学派）片山北海に学び、長じて江戸へ出て昌平黌に学び、ついにはその学頭になった。旅を好み、北は北海道から南は九州まで旅し、その地の学者・文人と交わり名所を訪ね、得意とする平淡流暢な紀行文を遺している。上州にも天明の頃再三訪れ、草津、沢渡、四万、伊香保、榛名山などへ遊び「漫遊文章」５巻を著している。天明５年には渋川へ遊び、吉田芝渓にこわれて同家に三年余も滞在した。
(55) 1789（寛政元）年吉田芝渓が、平沢旭山の「養蚕須知」や和漢の蚕書を研究し、これを基に体験・工夫を加えて著した。従来蚕を霊妙なものとし、経験と勘で養蚕していたのを打破して科学的に語り、我が国養蚕業の振興に寄与した書である。
(56) 吉田芝渓が災害時における農民の心得、対処法を記述した著作といわれるが原本は不明である。開荒須知や養蚕須知などとともに、農政家であり農業実践の指導者としての芝渓の見識を示すものである。
(57) 吉田芝渓が当時離村者の多いのを憂い、開墾による利益と農民精神の振興を目指して、寛政７（1795）年に著した。科学的で視野も広く、社会的立場から開拓論を展開している。
(58) 弁学遼東豕は文化年間の成立と見られ、吉田芝渓の孟子弁と孟子講をその内容とする。
(59) 篠木弘明「上毛古書解題・吉田芝渓の部」
(60) 川村肇「民衆儒学へのアプローチ」『江戸の思想３』ぺりかん社1996参照。
(61) 「渋川市誌第２巻通史編上」1993
(62) 截石切組積石室を有する古墳は、このほか、代表的なものに南下Ａ号古墳・南下Ｅ号古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳がある。
(63) 村士玉水（1729～1776）は、初め山崎闇斎門の三宅尚斎、後に稲葉迂斎に学び、両師没後は朱子独りを先生と称し、篤くこれを信じ学問の則とした。安永３（1774）年伊勢崎藩主酒井忠温は玉水の門に学んだ。以後藩校学習堂の創設に尽力し、士風の昂揚、民風の刷新の基礎をつくった。
(64) 高山彦九郎（1747～1793）は、尊王倒幕運動の先覚者で正之と称した。幼時伊勢崎で学び、叔父の影響もあってか崎門学派及び陽明学の影響を受けた。昵懇の関重嶷には深い思想的影響を与え、失敗したが伊勢崎藩の藩政改革でも大きな役割を果たした。
(65) 「訳文発墳暦」橋田友治訳註　伊勢崎市史研究
(66) 「伊勢崎市史通史編２近世」1993
(67) 昭和10（1935）年の分布調査によれば、108基の古墳が確認されている。ほとんどが小円墳であるが、前方後円墳も６基含まれている。この中で特に注目されるのが、截石切組積石室を持つ、南下Ａ号古墳と南下Ｅ号古墳である。
(68) 「群馬県史　資料編３原始古代３古墳」
(69) 註68参照
(70) 「群馬県史料集　日記編『山吹日記』奈佐勝皐著　萩原進校注」
(71) 江戸の国学者奈佐勝皐は、天明６（1786）年４月16日から５月23日まで、38日間、武蔵、上野、下野をと踏査した。その紀行が「山吹日記」である。西上州の自然と古蹟や人間関係などが細かく観察し、生彩ある紀行文として有名である。奈佐勝皐は1745年生まれ、名は久左衛門、号隅東。屋代弘賢が「古今要覧稿」の序文に、隅東先生と呼んでいる人物である。
(72) 註33参照
(73) 葛西玄沖は青梨子村の医師で名医の誉れが高い。
(74) この「山吹日記」が、他の上野国内の紀行と比較して優れているところは、単なる旅行記ではなく、その土地の歴史、伝承、文化財についてあらかじめ研究しておいてから、現地に行って更にこれを深めるといった学究的態度に貫かれている事である。（萩原進「山吹日記」解説）
(75) 三浦無窮は武州熊谷の名医で、野田の原沢文仲の師である。寛政元（1800）年４月上州を訪れ「上毛紀行」を著している。
(76) 原沢文仲（1764～1839）は、三浦無窮に嶺東第一家と讃えられ、天下の名医として紀州の華岡青州と並び称された。江戸に出て漢方、蘭方の医学をことごとく修めたという。
(77) 「吉岡村誌」
(78) 僧浄聖の多年の文献渉猟の結果で、江戸時代の蔵書家の有りようが窺える。
(79) 塙保己一（1746～1821）は40歳の時立原翠軒の推薦で水戸藩主徳川治保に謁見し、後に「大日本史」の校正に参画する。寛政５（1793）年、和学講談所と文庫創設を願い出て認められ、林大学頭の支配下で幕府の財務援助を受けることとなり、精力的な資料収集に拍軍がかかった。この成果が「群書類従」「続群書類従」として大成された。
(80) 「群書類従」は、盲目の天才塙保己一が一大事業として取り組んだ古典籍資料の集大成である。
(81) 「上野国郡村誌」は明治８年６月５日の「皇国地誌」の編集を促す太政官達第97号を根拠に、熊谷県（後の群馬県）が所轄各町村等に調査させたものの集成である。
(82) 外池昇「『上野国郡村誌』にみる古墳・塚」調布日本文化第４号　1994
(83) 愛宕山古墳は前橋市総社町大屋敷に所在する方墳である。主体部は両袖型の横穴式石室で、天井及び壁石は巨大な自

然石を用いて構築されている。石室内には凝灰岩製の家型石棺が安置されており珍しい。構築時期は7世紀前半が推定される。

(84) 清野謙次「日本考古学・人類学史」1954

(85) 徳川治紀は水戸藩第7代藩主で、その第3子に烈公徳川斉昭がいる。

(86) この水戸学は前期水戸学である。

(87) 野口武彦「江戸の歴史家」ちくま学芸文庫　1993

(88) 堀口藍園（1818～1891）は渋川宿の藍染問屋に生まれる。家業を継ぎ藍園と号した。家業に専念するかたわら、文字通り刻苦勉励し学問に励み、高橋蘭斎に経史、木暮足翁に国学、竹渓周休道人に漢詩を学び、碩学吉田芝渓の人格的感化を受けた。

(89) 「山陵志」は文化5（1808）年に100部が刻本された。漢文で著されたその内容は、畿内の山陵を自ら歩き、その知見をもとにして単に山陵の考証にとどまらず、古墳の編年等をも考察し、日本の古墳研究の草分けである。

(90) 蒲生君平は明和5（1768）年宇都宮に生まれた。水戸の学者立原翠軒の感化を受け陵墓の荒廃を嘆き、畿内に2回足を運び、山陵を渉猟して「山陵志」を著した。

(91) 勅使河原彰「日本考古学の歩み」名著出版　1995

(92) トポス（topos）という術語は本来ギリシア語で、文学の主題や表現方法、場所、位相という意味である。

(93) 杉仁「吉田芝渓の開荒活動と朱子学批判の思想」早稲田実業学校研究紀要　1991

(94) 註93参照

(95) 同上

(96) 吉田芝渓は農村振興・風習改善を深く心配し、領主小笠原氏への上書を繰り返している。

(97) 芝中は現在は渋川市御蔭になり、伊香保へ行く道路の左側に吉田芝渓の墓が存在する。

(98) 「開荒須知」の中の吉田芝渓の本懐を示すキーワードである。

(99) 豊城入彦命、彦狭島王、御諸別王の三代を指す。

(100) 楫取素彦(1829～1912)は明治7年7月熊谷県権令から県令となり、同9年第2次群馬県令として前橋に移り、同17年元老院議官になるまで多くの治績を残し、歴代知事随一の人材といわれている。

(101) 萩原進「明治初期群馬の政治と文化の関係」上毛史学　昭和27年春夏季号

(102) 県令楫取素彦は、ビジュアルなモニュメントとしての古墳に注目し、上毛の始祖である豊城入彦命の探索を命じている。

(103) 釈泰亮は愚海と号した。幼児から仏門に入り諸方を行脚し、長じて群馬郡総社村釈迦尊寺に住持すること15年。その間に古老の伝説を聞き、記録を閲覧して、上野に関する伝設数十巻を火災に遭い焼失した。安永年間になって記憶を掘り起こし「上毛伝説雑記」15巻をものにした。

(104) 註14参照

(105) 宝塔山古墳は、前橋市総社町の総社小学校と光厳寺との間に所在する一辺54m、高さ11mの壮大な方墳である。墳丘南斜面中腹には、横穴式石室が開口している。石室は截石切組積の複室式のもので、羨道、前室、玄室に分かれ、玄室には安山岩製の家型石棺が安置されている。

(106) 蛇穴山古墳は、前橋市総社町総社の総社小学校庭東南隅に位置する。1976年前橋市教委の調査によって、東西43.4m、南北39.1mの方墳であることが判明した。墳形・石材の加工技術、壁面の漆喰塗布など、隣接する宝塔山古墳に類似している。

(107) 総社二子山古墳は、前橋市総社町植野の天狗岩用水とＪＲ上越線との間に位置している。全長90m前後の、主軸を東西においた二段築造の前方後円墳で、周濠の跡があり、葺石・埴輪の配列も施されていたようである。この古墳は後円部と前方部の基壇上に両袖型の横穴式石室が構築されており異例である。明治7（1874）年豊城入彦命の墓とされ、御陵墓として墓掌と墓丁がおかれたが、スキャンダルから同年取り消された。

(108) 註74参照。

(109) 上毛野君田道は、豊城入彦命四世の孫荒田別命の次子で、兄竹葉瀬とともに新羅が朝貢を怠ったという理由で出陣し、勇戦したが戦死する。【日本書記】

(110) 豊城入彦命ら上毛野氏の祖。崇神天皇が活目命と二人に夢占いをさせ、兄が武として毛野国に派遣され、弟が文として皇位を継ぐ。「古事記」には豊木命とある。

(111) 川村肇「渋川における幕末の儒学」日本教育史研究10号　1991

(112) 調査主任戸所慎策氏のご教示による。

(113) 現在前橋市総社町植野及び総社

(114) 現在前橋市元総神町

(115) 当時前橋藩領であったので、藩主である川越侯松平氏に献上されたものと思われる。

(116) 上野名跡考や上野名跡誌

(117) 孝徳天皇大化2年の藩葬令や天智天皇2年の「石槨の役を起こさず」という詔（日本書記）は、現在でも資料批判されつつ利用されている。

(118) 同上

(119) 勅使河原彰「日本考古学の歩み」名著出版　1995

(120) 註107参照。
(121) 天狗岩用水の開削は、秋元氏の手によりこの時に行われた。
(122) 高崎市綿貫町にある古墳時代後期の前方後円墳。墳の全長は98mで後円部の高さが10mを測り、墳丘頂上部と中段に埴輪類を配している。埋葬主体部は角閃石安山岩の巨大な石室で、総社二子山古墳と同質である。
(123) 榛名山(現在の二ツ岳付近)を給源とする角閃石安山岩は、非常に加工しやすく、石室を構築するにはもってこいの材質である。
(124) 気運山元景寺は、初代総社城主秋元長朝が父景朝菩提のため天正18(1590)年法現寺を改易し、景朝の法号春光院殿気運元景大居士から取って創建されたと伝えられる。
(125) 総社二子山古墳と大室前二子古墳の発掘を絡めた論攷となる予定である。
(126) 古墳時代末の家型石棺は、群馬県では愛宕山古墳と宝塔山古墳の2例しか確認されていない。
(127) 右島和夫「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」群馬県研究22　1985
右島和夫「古墳からみた6，7世紀の上野地域」国立歴史民俗博物館　1992
(128) 右島前掲書
(129) 国学者内山真龍は風土記研究に傾倒し、世の人々より「風土記翁」とまでいわれ、自ら「秋鹿郡人神宅臣金太理」の再現として「天平の比の国学者」の衣鉢を継ごうとした。
(130) 古伝説をそのまま引用するという、本居宣長の古伝説絶対信仰に近い態度をとる。
(131) 矢野一貞は寛政6（1794）年に生まれ、国史を学び、和漢の書に通暁し、文政10（1827）年34歳の時久留米藩の矢野家に迎えられた。のち藩校明善堂につとめ、藩内の古墳その他の遺跡をほとんど余すところなく歩き回り、図に描き詳細に記録した。「筑後将士軍談」は一貞の代表作である。
(132) 「筑後将士軍談」は城館・第宅・墳墓・碑銘等の資料をのせている。ことに墳墓・碑銘の部門は、その付図とともに生彩を放っており、考古学研究としての見るべきものが多い。
(133) 松浦武四郎の「丁亥前記」は、明治20（1887）年3月、30カ国を旅行しようと出立し、5月に帰宅したときの日記で、この中に4月21日重定古墳を訪れた記事がある。
(134) 「孝古知」の展開過程を「考古史」と呼びたい。
(135) 藤貞幹（1732～1797）は逆境に育ちながら勉学し、歴史や考古学・有職故実方面に新生面を開いた。考古学関係の著書として「六種図考」「七種図考」「集古図」「古瓦譜」「仏刹古瓦譜」等があり、他に「好古目録」や「好古小録」にも考古関係記事が多い。
(136) 「集古図」は文化4年にまとめられた26巻からなる集成図で、天文・地理・度量・服飾・鈴印等の項目がある。特に銅器・刀剣・玉器・石器・瓦器・磁器・食器・木器・碑銘等考古学的資料を数多く掲載している。
(137) 幕末の国学者にして医師である井上正香の二男。井上真弓の研究はこれからの課題である。
(138) 井上真弓が菅政友に考証を依頼する際の図面として描かれたものである。
(139) 福島武雄（1898～1930）については、原田龍雄「福島武雄小伝」(「上毛及上毛人202、203」1933）がある。
(140) 註2参照

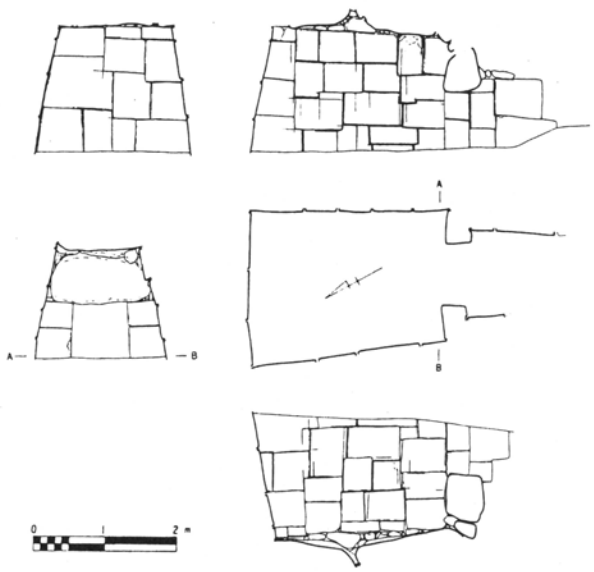
参考文献

朝日「日本歴史人物事典」朝日新聞社
「伊勢崎市史」通史編2　近世
岩波講座「日本文学史第11巻・変革期の文学III」
岡村敬二「江戸の蔵書家たち」講談社メチエ71
岸田治男「昭和初年群馬県に於ける郷土史研究者の一動向」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要10
清野謙次「日本人種論変遷史」
「群馬県史資料編3　原始古代3　古墳1
「群馬県百科事典」上毛新聞社
「上野志料集成」壱・弐
「群馬県史料集」第一巻風土記編2
斉藤忠「日本考古学史」日本歴史叢書　吉川弘文館
斉藤忠「日本考古学史料集成1」江戸時代
「渋川市誌」
外池昇「『上野国郡村誌』にみる古墳・塚」調布日本文化第4号
地方史マニュアル1「地方の思想と視点」柏書房
勅使河原彰「日本考古学の歩み」名著出版
中谷治宇二郎「日本先史学序史」
日本史研究会・京都民科歴史部会編「『陵墓』からみた日本史」青木書店
野口武彦「江戸の歴史家」ちくま学芸文庫
「牧之」鈴木牧之顕彰会編
「前橋市史」

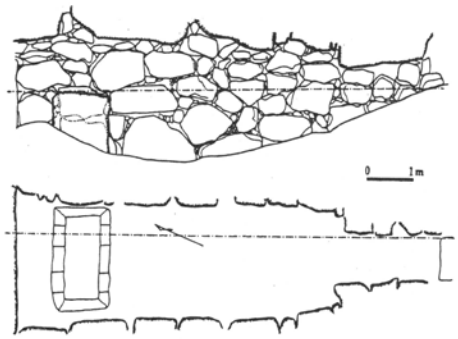
宮下健司「信濃における江戸時代の考古学史」信濃40―2
木曜クラブ「考古学史研究」第5号
森浩一編「考古学の先覚者たち」中央公論社
山田慶児編「東アジアの本草と博物学の世界」上
「吉岡村誌」

虚空蔵塚古墳の石室と前庭

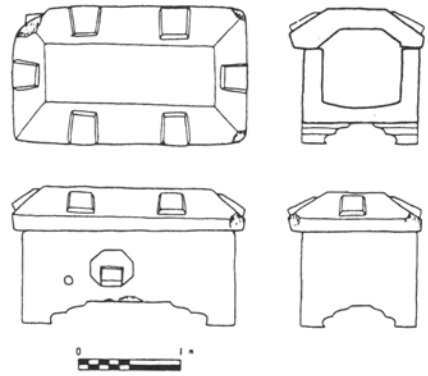
南下A号古墳石室



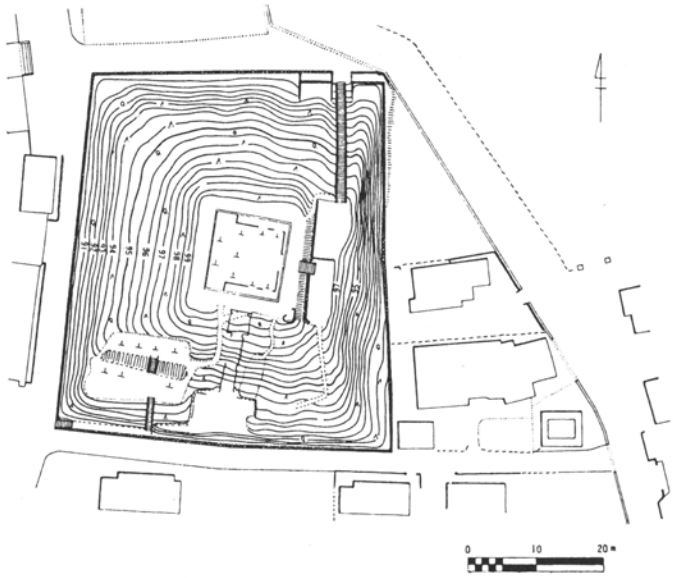
南下E号古墳石室



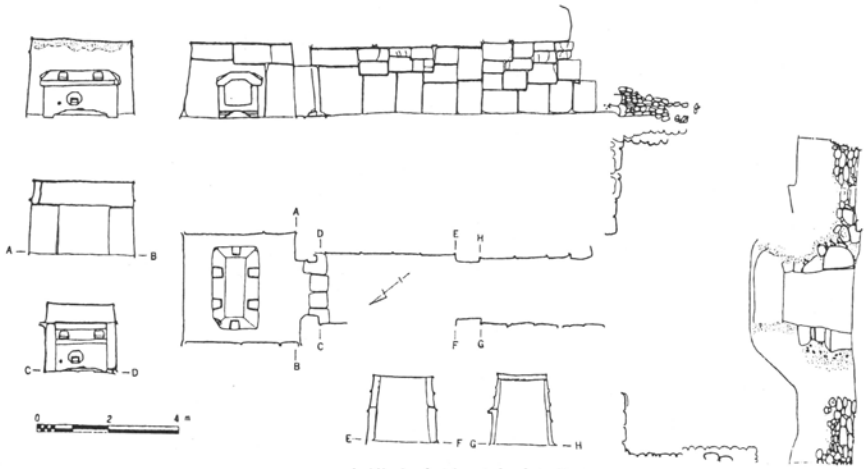
愛宕山古墳石室実測図



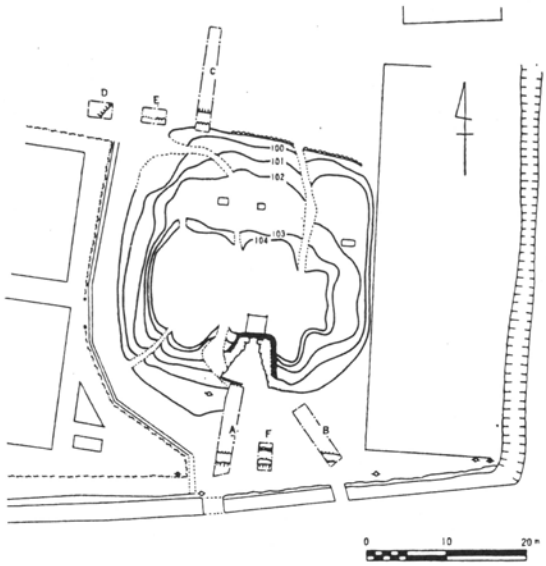
宝塔山古墳石控



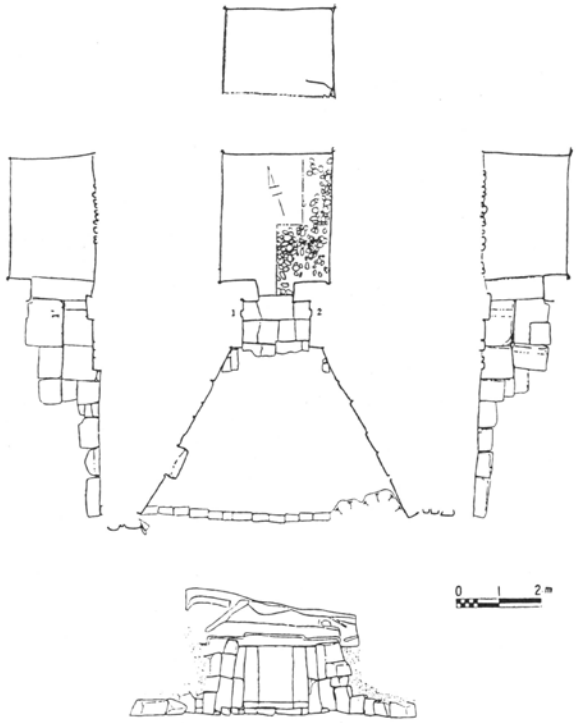
宝塔山古墳平面図



宝塔山古墳石室実測図

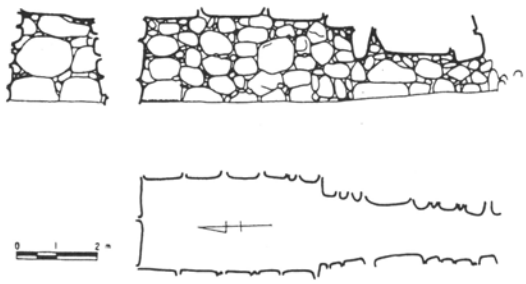


蛇穴山古墳墳丘平面図

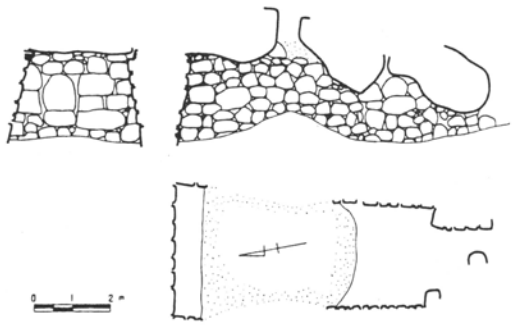


蛇穴山古墳の石室と前庭

総社二子山古墳平面図



前方部石室



後円部石室

総社二子山古墳前方部、後円部両石室

訳文・上毛上野古墓記

渋川芝渓田友直子正　著
遠　藤　俊　爾・岸　田　治　男（共訳）

上毛群馬郡上野邑（現前橋市総社町植野）には三基の古い墓がある。古老の伝えるところによると、「これらは上代の彦狭島王の大陵である」という。しかしながら、未だこれらの王陵のいずれがそうであるかは誰にも知れない。文献の不足を嘆くべきであろう。

私が以前、その内の二基の墓を観察したとき、王陵であるということを知らなかったとはいえ、その規模が壮大で巨石を構築材に使用している所などは、公侯や貴族でさえ造営するのは容易ではないと感じた。このことから心にすこぶる疑いが起こり、辺りをさまよう間にとめどなく涙が流れた。その後に王陵であることを聞いたので、いままで蓄えていた疑いが解け始まった。

今年（文化七年）の八月に、高井村の古い友人である福島子徳を訪ねたとき、話がその陵のことに及んだ。子徳に導かれてそのうちの一陵を観察したが、またまた涙が落ちるのを禁じえなかった。二基の墓が光巌寺という寺の境内にある。寺は村の中央にあり、寺門の外の石橋によって街と別たれている。石橋の幅は一丈（当時は曲尺で、以下の寸法はこれに倣う）、長さは四尺八寸程で、聞くところによると壊された陵の玄室の扉石であるという。

寺の参道の左右には杉の並木が森のようになっており、郭門がその中にある。杉並木の南にある二十歩ばかりの大きさの陵（蛇穴山古墳）の上には、観音閣が安置されている。観音閣の北側はやや低くなってそこには薬王閣があり、閣の外側には杉の木が並んで植えられている。陵の石室の南側は壊れ、なかば石が落ちている。落ちた石の中央には玄室の入り口（玄門）が見える。玄門の高さは四尺二寸、幅三尺弱で、玄室内は奇しくも一辺が九尺四方であり、高さが六尺を測る。また東西北の壁面と上下の天井と床の各々が一石で築かれ、巧みに磨き上げられた正方形の箱のようである。北側の壁石のほぼ中央には梵字が一字鏤金されているが、これは最近（寛文11年・1671の銘がある）刻まれたもので、弁財天女を祀っている。聞くところによると、玄門の外側にはかつて羨道があったけれども、壊して田を作り道を造ったという。

陵（蛇穴山古墳）の西北百歩程のところに、三十歩四方の一陵（宝塔山古墳）がある。その陵の高さは三丈余りで、東側の壊れている陵端は阿弥陀閣の地となっている。西側は寺の厨門にせまり、陵上の東北には陵をあばく以前にすでに構えられていた秋元侯の墓がある。また陵の西南には寺の代々の住職の墓が十余りある。陵の真南には石段が十段あり、これを上ると石室の入り口である羨門があるが、すでに壊されて巨石の扉石が傍らに倒れているので、昔の状態は想像するしか方法がない。羨門の高さは七尺、上幅四尺五寸、下幅六尺が測れ、羨道を入って一丈五尺の所に立っている石は、門の傍らに立つ木のようであり、戸を設けた所だろうか。そしてそこからさらに一丈五尺の所が玄門である。羨道は三丈の長さがあり、両側の壁は皆巨石の石畳のよう

である。玄門の高さは四尺五寸、幅は四尺八寸、玄室内は一辺が九尺五寸四方の方形で、高さは六尺八寸である。扉石は一巨石で、東西北の壁はそれぞれ数石で築かれ、羨道から玄室に至るまで皆磨かれており、玄室にはしっくいが塗られていたのが所々残っている。ただ、造りは初陵(蛇穴山古墳)よりも粗い。聞くところによると、現在は玄室内に石棺があるけれども、これより(文化7年)前に四世の住職(法印亮俔)が石棺の蓋を塔礎にしたという。その蓋石の長さは七尺三寸、幅四尺二寸、厚さ五寸で寺の左の築山の上にある。また石棺の本体は磨いて盥盤にしたという。その棺石の長さは七尺、幅三尺七寸、高さ三尺でこれまた寺の前に置かれたという。これはかつて私が見たことがある。

光厳寺の境の西に大溝(天狗岩用水)があり、その先に一陵(愛宕山古墳)がある。一辺が五十歩程の方形墳で、高さ数尋、西南北は皆田で所々に雑穀が見られ、陵の周囲は半ば以上が耕地となっている。陵の南には付近の民衆の墓が五、六十基存在し、いずれも陵を削り墓域としている。その墓域から陵上へは小道が続き、それを登ると巨石が一基横たわっている。子徳が言うには、これが玄室への入り口であり、詳しく言うと、まず羨道の扉石があり、その後ろにはすでに発かれている玄門がある。深さ八・九尺程石に沿って下りると、すなわち北側に玄門があり南側は羨道である。聞くところによると、最初に発かれて羨道が確認された時、石室の中は暗くて何も見えず、敢えて入ろうとするものもなかった。ところが浮浪児がたびたび羨道内で死ぬことがあり、村人はこれを嫌って羨道を埋めてしまった。その後、石工が石を求めてうつり、玄門を発いたことがあった。門の高さは九尺、玄室内は東西一丈余、南北二丈四尺ばかりで、扉石は五石で閉塞されている。石は蛇穴山古墳や宝塔山古墳のようには磨かれていないが、石棺を有している。石棺の大きさは長さ七尺五寸、幅三尺六寸、高さ三尺五寸で、蓋は厚さ二尺弱、幅四尺、長さ八尺である。石棺の南面には穴が一つ空いている。これは石工が発いた時に穿ったもので、石工はその日のうちに逃げてしまったので、石棺の中の副葬品の有無を知ることができない。あるいは、副葬品を取って去ったとも言われている。

陵(愛宕山古墳)の西の外れ五十歩の所に、また一陵(総社二子山古墳)が存在する。楕円形で中央が低く瓢箪のようで、伝承によると豊城入彦命の副葬品を埋納した陵であるといわれる。私は深く古老の伝える伝承を信じ、文献上の証拠が足りないとしても、その伝承が偽りというものでもない。

日本書紀の記載では、崇神天皇四十八年、皇子豊城入彦命に「東国を治めよ」という詔があった。これが上毛野君と下毛野君の始祖である。また景行天皇五十五年、豊城入彦命の孫である彦狭島王は東山道十五国都督を拝命したが、東国へ赴任の途中春日穴咋村に到着すると、病に臥して亡くなってしまった。この時、東国の百姓は彦狭島王がこられなかったを悲しみ、密かに王の亡骸を盗み出し、上野国に葬った。同五十六年秋八月、御諸別王に「汝の父彦狭島王は東国に赴くことなく、早く亡くなってしまった。だから汝が専ら東国を治めよ」という詔が下った。天皇の命を受けて御諸別王は、父の業を受け継ごうと思い、東国に赴任し治め善政を施した。また、

蝦夷討伐にも功績を遺した。このことから、東国には久しく戦乱もなく、この所以で現在も御諸別王の子孫が東国に住んでいる。これは書紀の記録である。

私が思うに、豊城入彦命は民衆と和らぎ楽しみ情けや恵みをもって接した。それだから、民衆は豊城入彦命の孫である彦狭島王が赴任できなかったことを悲しみ、王の亡骸を盗み上野国に葬ったのである。彦狭島王の亡骸が上野国に葬られたとすれば、必ずや近くに祖父である豊城入彦命の陵もあるはずである。そして、子王である御諸別王の陵もまた遠からず築かれたものと思われる。春日穴咋村は長野県佐久郡にあるけれども、一説には岐阜県池田郡に当てる人もいて、未だいずれであるか決定できない。上毛野国は東山道の中央で、東国の入り口にあたる政治の最も重要な地である。植野の西南二十町のところに国府村がある。伝承によると古代に上野国府の存在したところである。そこには城跡や墓跡が田中の所々にいまだ遺っている。

享和年間に村民が、田中から傾いだ器をみつけ川越侯に献上したことがある。有識者の語るところによると、いわゆる座右において戒めとする器で、これは明らかに君主の戒めの器であり、天皇や皇族でなければ誰がこれを使うであろうか。しかしながら、国府は豊城入彦命の政府であることは明らかである。また、陵の南二十町には総社村がある。祠があり、上野国中の神々を集めて祀ることにより、名を総社という。後にそれが村名となった。おそらく豊城入彦命や御諸別王の時代に建てられ、春秋祭祀がとりおこなわれたものだろうか。

また近くの村の所々には墓穴が大変多く、皆陵のような玄室をもち、必ず石で造られている。玄室内は方形で広く皆同じようであるが、三陵のような壮大な巨石を使用したものは一つもない。

考えると、孝徳天皇大化二年（646）に墓穴の制（薄葬の詔）を初めて定めて、王以上の墓は、その内長九尺、幅五尺で、外域（墳丘）は方九尋、高さ五尋に規制された。このことから、三陵の墓穴は薄葬令にてらすと広すぎて、それ以前の築造は明らかである。また天智天皇六年には石槨の役を起こさず(石室を造らない)、このことを永代にわたって手本にして欲しいとの詔があった。このことからも石槨の陵は、天智天皇六年以前に築かれたのは明らかである。以上のことを併せて考えれば、植野三陵は豊城入彦命と彦狭島王と御諸別王の陵墓であることはほとんど疑う余地はない。

ついては私が思うに、溝西の大陵（愛宕山古墳）は必ず豊城入彦命の陵である。その理由は、規模が壮大で石が磨かれておらず最も古い様相を示し、かつ羨道は臣民が造ることはできないというところにある。また、豊城入彦命は天皇の兄であるがゆえに羨道をもつことができる。あるいは天皇のお許しがあったかもしれないが、今ではわからない。はたまた、陵のすぐ西に命の副葬品を埋納した陵（総社二子山古墳）が存在するというのも、それが命の陵であることを証明している。

寺前の陵は必ず彦狭島王の陵である。その玄室は溝西の大陵より小さいが、製作技法はすこぶる上質で、羨道をもっている。これは民衆が王の亡骸を盗んで、葬式を命の陵で執り行い、その精力を尽くして造ったがゆえに美しいのである。

観音閣の下の命の陵は、三陵の中で玄室が最も小さく、平地に羨道が造られている。玄室は二陵にならっているが、その製作技法は極めて良質で最高である。この陵は豊城入彦命の時代からおよそ百七十年ばかり後のもので、かなり文化程度の進んだ時代の製作物である。私は以上の点から、この陵は必ず御諸別王のものであろうと考えている。

近くの村の所々にある墓陵は、きっとその子孫のものであろう。文献の不足で、それらの墓陵が誰のものなのかを知ることができないのは本当に嘆かわしい。

豊城入彦命が東国を治めた後百有余年が経過して、日本武尊の東征の役があった。その後十三年して御諸別王が東国都督となった。そして、東国の民衆は父王である彦狭島王が来られなかったことを悲しみ、王の亡骸を盗みだして上野に葬った。このことは豊城入彦命の恩徳があまねく民衆に伝わっていたからであろう。日本武尊の一時の功績など比べるべくもない。御諸別王は早くから善政を行い、また蝦夷対策も万全で、東国は久しく戦乱もなかった。この功績は日本武尊の業績に決して劣るものではない。

丘陵上に墳を造るのは古法である。そして墓陵を選び定めるのも古法である。丘陵に築かれた古墳からなにがわかるのだろうか。ただ年月が流れ変貌し、そのいずれが皇族の大陵であるのかを知るのだろうか。すでに荒れ地は開墾されて田となり、その手が墓穴に及んで初めて上古の皇族の墓域を観察すれば、古陵にはすでに新たな死者の魂を安置する場所ができてしまっている。古い魂ははたして何に頼れば良いのだろうか。

伝承によると、死者の魂の帰るべきところがあれば疫病や祟りは起こらない。私はその死者の魂の帰る場所が失われてしまったことを悲しむ。また石棺の蓋をとって礎とし、石棺の身を磨いて盥とするのも、どういう心なのであろうか。

豊城、武尊、御諸別、三王の功績はあるいは高くあるいは類似し、その年代もまた相伯仲している。しかしながら、日本武尊を祀る神社は東国に大変多く、星霜千七百有余年経過しても、その霊威は光り輝いて少しも衰えていない。それにひきかえ、豊城入彦命以下三代の陵が皆ことごとく掘り発かれ、棺槨が異なるところにあるのを一人悲しむのである。古来、天皇の一家であり同じように天皇の子孫であるのに、その明らかな輝きは湮滅してしまい、どうして天と淵ほどの差ができてしまったのか。

私はこれらの陵に臨んでは嘆息し、涙が流れることを禁じ得なかった。その結果として、見聞したところを記録し、同士の人々に伝えるのみである。

文化七年秋八月　同郡渋川芝渓田友直識

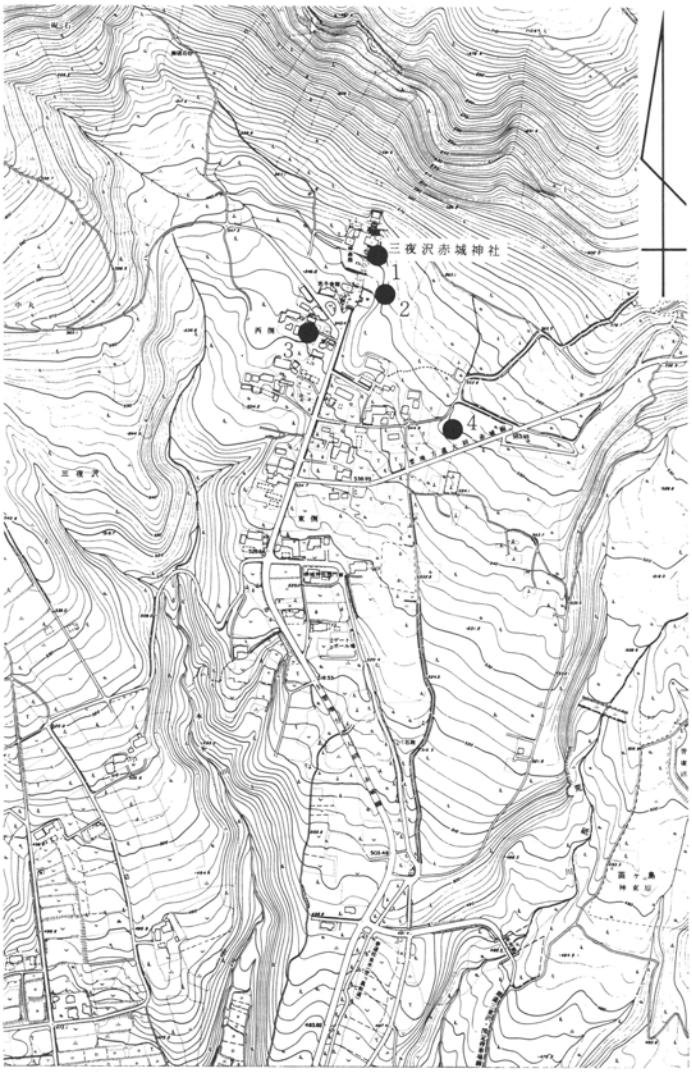
宮城村三夜沢赤城神社採集の中世遺物について

追　川　佳　子

1　は　じ　め　に

群馬県における中世瓦の類例は、極めて少ないものの、僅かながら増加の傾向にある。一方、中世土器資料の増加には、めざましいものがある。近年刊行された[1]『高崎市史　資料編３　中世Ⅰ』は、その集大成の一つといえよう。

本稿では、赤城山南麓に鎮座する式内社三夜沢赤城神社境内において採集した、瓦を含む中世遺物を紹介することにより、当社の考古学的資料提示と、希少な中世瓦の類例の増加を図ろうとするものである。



第１図　三夜沢赤城神社位置及び遺物採集位置図（１：10,000）

2　位置と周辺遺跡

三夜沢赤城神社は、勢多郡宮城村大字三夜沢字境内に鎮座する正一位(『延喜式』では、従五位下）の格式を有し、赤城山を自然神格とする上野国二宮である。祭神は大己貴命と豊城入彦命で、近世以降赤城神社の本社とされている。

鎮座地は、標高550m程の緩斜面部であるが、社殿の後背地は急斜面となり、地形上の変換点にあたる。翻って、赤城山南麓の南方平野部より望むと、南麓のほぼ中央に位置している。

当社近辺は、[2]『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編)』によれば、周知の遺跡には認定されてい

ないが、[3]隣接地で古代遺物の散布が確認されている。（第１図４）

周辺遺跡では、当社北西方向約1.2kmの急斜面を登り詰めた尾根上、標高877.9m地点に、「櫃石（ひついし）」と呼ばれる磐倉（いねくら）が所在する。

櫃石は、[4]『日本三代実録』の元慶四年（880）五月二十五日条に記述が認められる「赤城石神」にあてられ、赤城神信仰の発祥とも考えられている。

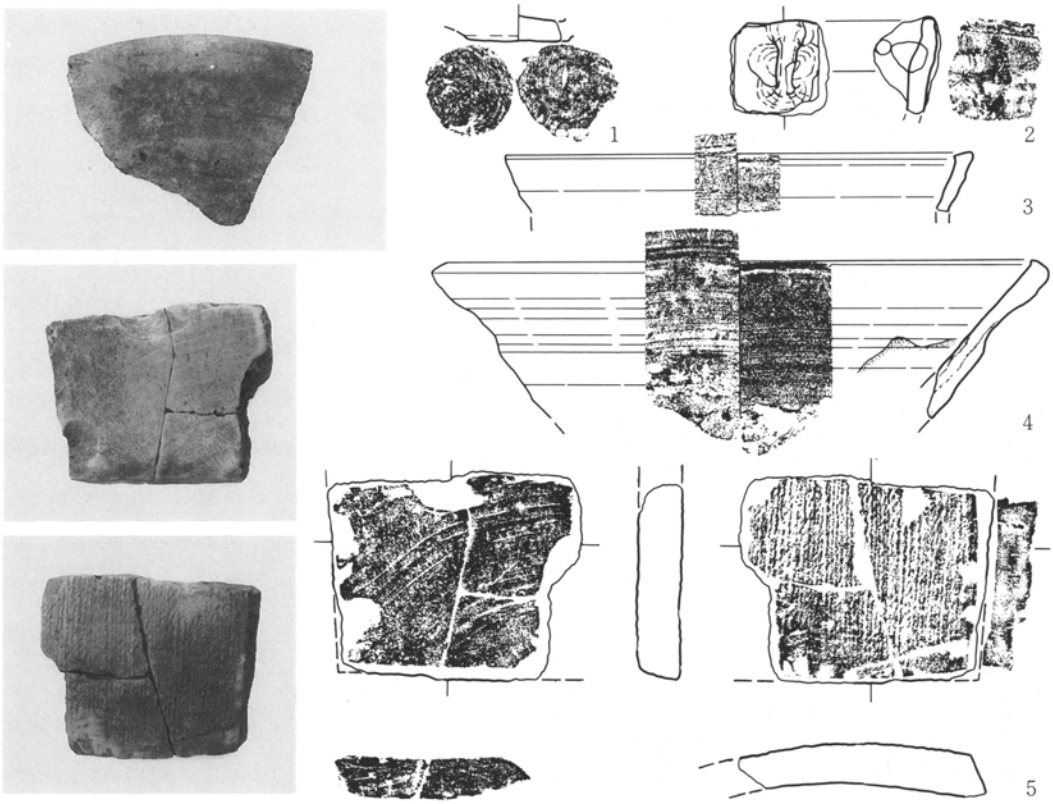
当社東方約２kmの尾根には、宇通（うつう）遺跡（寺院跡）（勢多郡粕川村大字赤城山）が所在する。また、南西方向約2.5kmの尾根には、やはり寺院跡に関係あると見られる[5]柏倉十文字（かしわくらじゅうもんじ）遺跡（勢多郡宮城村大字柏倉）が所在する。このような周辺状況により、古代の信仰形態の一端を窺うことができる。

また、中世の遺跡としては、当社北東1.5kmに、宿の平城跡（山城）（勢多郡宮城村大字苗ヶ島）が所在する。

３　採集遺物

今回紹介する遺物は、次の５点の中世遺物であるが、この他に縄文式土器などがある。採集地は、１から３が当社南西に広がる平坦地（第１図―３）、４（第１図―２）５（第１図―１）については、境内である。（第２図参照）

以下、遺物個々についての観察を述べる。



第２図　採集遺物実測図および写真（１～４は１：４、５は１：５）

1　**円盤**(転用) 土師質土器皿(カワラケ) 観察○土師質土器皿の底部を利用する円盤で、体部の大半を打ち欠いている。体部は、高さ0.3㎜程の底面から丸味を帯びた状態で立ち上がっているが、欠損が著しく詳細は不明である。左回転の轆轤成形で、底面は回転糸切りである。○胎土は粗く夾雑物が多く、白色粒子・黒色鉱物粒子・石英等が多い。鏡下では多孔質である。○酸化焔焼成で軟質である。○鈍黄橙色を呈す。所見○底径が小さく、器厚が厚いことから15世紀の所産と考えられる。

2　**軟質陶器 内耳鍋形土器**　観察○耳部を含む口縁部のみの残存である。紐作り後、轆轤成・整形と考えられる。耳部は、取り付け後に基部を整形し、全体を篦撫整形を施している。○口径は不詳。器厚は1.1cmを計る。○胎土はやや粗く夾雑物には石英・黒色鉱物粒子・黒色粒子等を含む。鏡下では空孔が目立つ。○外面は暗橙色、内面は灰橙色から鈍黄橙色を呈しており、焼成は酸化焔から中性焔と思われ硬質である。所見○口縁部、耳部の特徴から、15世紀の所産と考えられる。

3　**軟質陶器 内耳鍋形土器**　観察○口縁部のみの残存。やや曲線的に立ち上がる。○紐作り後の轆轤成・整形と考えられる。器厚は2より薄く0.7cmを計る。○口径は推定で24.8cmを計る。○胎土は粗く、石英・透明鉱物粒子・黒色鉱物粒子・白色鉱物粒子・黒色粒子を含む。○焼成は還元焔焼成でやや硬質である。○内面、外面ともに灰黒色を呈す。所見○口縁部が直線的で、器厚が薄いことから、15世紀後半から16世紀前半の所産と考えられる。

4　**軟質陶器 鉢**　観察○口縁部のみの残存である。○紐作り後の轆轤成・整形であるが、体部外面は、整形が粗い。轆轤の整形単位は狭く、轆轤回転が早目であったと思われる。器内面には少量であるが、煤が付着している。○口径は推定で33.0cmを計る。○胎土はチャート(灰色)円粒、黒色鉱物粒、石英粒を含む。○還元焔焼成でやや硬質である。○内面は黒灰色、外面は灰色から灰褐色を呈している。所見○口縁部立ち上がりの角度と口唇部の特徴から、15世紀の所産と考えられる。

5　**平瓦 女瓦**　観察○左狭端側部のみの残存である。○表裏面には粘土剝ぎ取り痕が残存し、凸面の全面には絡状体状の縄叩きを施す。側部喰出段は、同部の欠損が多いため確認出来ない。端部面取りは1回である。成形は離れ砂の痕跡等から、一枚作と判断される。○器厚は2.3cmと厚い。○胎土はシルト質の素地で、白色粒子、白色鉱物粒、黒色鉱物円粒を少量、微粒長石を多量に含む。○還元焔焼成で軟質である。○色調は灰色を呈す。所見○ 成・整形技法の特徴および器厚から、13世紀の所産と考えられる。また 胎土の特徴から埼玉県美里町所在の水殿瓦窯跡の製品と思われる。

4　ま　と　め

今回採集された遺物には、水殿瓦窯跡(すいでんがようあと)[6]産とも推定される13世紀の女瓦、および15・16世紀の生活の痕跡ともいえる軟質陶器類がある。これらの資料は、中世三夜沢を語る上で重要な資料提供となったと考える。特に、鎌倉時代に瓦葺建物の存在が強く示唆される点は注目に値する。

中でも瓦は、中世社寺建築の様式と考えあわせると、社殿等の神社建築物に所用したとは思われず、寺院等の建築施設に伴うと推定される。

第3図は、現地形（1：10,000）と天保十一年絵図(写)(「宮城村史」より)を対比させたものである。絵図は、凡そ1：10,000に近い縮尺に対比できるようにした。絵図(写)の所見として、切妻造の建物は、俯瞰し、入母屋ないし寄棟造の建物は、正面図として表現している。また、図としての精度も高く任意縮尺で、現地形にほぼ符号している。
A.拝殿　B.神楽殿　C.本殿　D.竜赤寺跡　E.神光寺跡
F.総門跡　G.采女屋舗跡　H.現駐車場
I.中世石造遺物散布地　J.現総門　K.石殿(石宮)
L.第2図―5(瓦)採集地点　M.第2図―4(鉢)採集地点
N.第2図―1～3　採集地点
1.東宮？　2.西宮？　3.竜赤寺　4.神光寺　5.総門？
(5を総門とすると、現総門は移築されていると考えられる。)
6.采女屋舗(奈良原采女家跡)　7.真隅田家(増田家)

第3図　現地形（1：10,000）と天保十一年絵図(写)

また、境内の隣接地には、14～15世紀の石造物が多く、特に観応二年（1351）在銘の赤城塔（宝塔）等の仏教遺物が多く所在するのも注目される。

三夜沢赤城神社に残された文献や記録等によると、当社は明治初年まで東宮と西宮の二社が並祠されていた。当社所蔵の『年代記』[7]の記事は、貞和元年（1345）条に始まり、応永十三年（1406）条に「東社・西社」として、東西両宮について初めて記述している。また、増田家（旧西宮家）所蔵の天保十一年（1840）の八月付けの絵図[8]によれば、東宮には「竜赤寺」、西宮には「神光寺」の二ヶ寺の神宮寺が建立されていたことが認められる。現社殿は、この絵図の位置関係から東宮の奥側にあたると考えられる。瓦の採集地は、この東宮神宮寺「竜赤寺」に至近の位置と判断される。

以上のようなことから、採集された瓦は、鎌倉時代前期、既に三夜沢の地に寺院が建立されていたことを類推させる。そして、この寺院跡は『年代記』の東西両宮の存在と、絵図に描かれた東西両宮の神宮寺「竜赤寺」「神光寺」と無縁のものとは思われないことから、鎌倉時代には神社と神宮寺の両者が建立されていたことも想起されよう。

5　お　わ　り　に

今回の採集遺物は、量的に少ないものの、鎌倉時代の女瓦を採集できたことに最大の成果があるといえよう。そして、鎌倉時代に瓦葺建築物＝寺院≒神宮寺が存在した可能性が推測させられたことは、たいへん意義のあることと思われる。また、鎌倉永福寺の創建期瓦と同一窯の水殿瓦窯跡の製品であることが確実視されるならば、波及する問題は更なるものがあろう。資料数が少数である点に今後の課題が残ったが、本稿が三夜沢赤城神社の鎮座時期を再検討する上でひとつの資料となれば幸いである。

末筆ながら、本稿執筆にあたり、ご教示・ご協力をいただいた諸先輩方に御礼申し上げます。

註および参考文献

(1)　高崎市史編さん委員会編『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』 1996
(2)　群馬県教育委員会編『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』1971 による。
(3)　勢多郡宮城村教育委員会　細野高伯氏の御教示による。
(4)　黒坂勝美・國史体系編修會編『日本三代実録 後篇』新訂増補國史体系 1973 による。
(5)　勢多郡宮城村教育委員会　細野高伯氏の御教示による。
(6)　丸山陽一「水殿瓦窯跡」『第3回中世瓦研究会発表資料』1996 他による。
(7)　宮城村誌編集委員会編『宮城村誌』1973 による。
(8)　尾崎喜左雄「赤城神社をめぐる村」宮城村誌編集委員会編「宮城村誌」1973 による。
赤城神社編　「赤城神社誌要」　『上毛及上毛人』　第239号　1937
尾崎喜左雄　「赤城神社」　勢多郡誌編纂委員会　『勢多郡誌』　1958
大場磐雄　「赤城神の考古学的考察」　『神道考古学論攷』　1971
尾崎喜左雄　「赤城神」　前橋市史編さん委員会編　『前橋市史 第一巻』　1971
堀口英三校註　「赤城太神宮御鎮座略本紀」　群馬県文化事業振興会編　『群馬県史料集　第八巻　縁起篇Ⅰ』　1973
貴志正造訳　「赤城大明神の事」　東洋文庫94　安居院編　『神道集』　1973
神保侑史　「「上野国神名帳」に表れたる神名について」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編　『群馬の考古学』　1988
木津博明ほか　「上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

三原田遺跡出土の凹石・磨石計量表

能　登　　健

本表は、昭和47年7月から49年2月にかけて発掘調査された三原田遺跡（群馬県勢多郡赤城村に所在）で出土した凹石・磨石の計量的な研究を目的に作成した計測表である。

分析の目標には二つの方向があった。一つは、『信濃』第30巻第4号（1978）「縄文時代の凹穴に関する覚書」に述べたように、凹石の用途が「手に持って使用する敲打具である」とする見解を計測値によって追証すること。もう一つは、黒曜石や翡翠などの入手経路の特殊な石材に対して、ともすると看過されやすい在地の石材の入手方法を解明することによって縄文人の日常的な行動パターンを理解したいということにある。ここでは、紙数の都合上から計量結果のみの報告として、これらの具体的な分析結果は別項を用意したい。

計量の基準と経過は下記の通りである。

1．計量資料の総数は625個で、三原田遺跡出土資料のほぼ全てにあたる。凹穴のあるものを凹石とし、ないものを磨石と分類した。計量は最大長・最大幅・最大長と最大幅の比率・最大厚・重量・体積・比重に対して行った。また凹石については表裏の穴の数を記し、凹石・磨石ともに石質を項目に加えるとともに、資料に注記された出土地点、および報告書を中心にして伴出した土器型式が分かるものについてはこれを併記した。

2．計量に際しては、欠損などにより計量不能の項目はゼロ表示で示してある。なお、重量・体積・比重の計量には鉱山天秤を使用した。なお、鉱山天秤は移動が困難であったために、収蔵資料のうち移動可能なもののみの計量に止まった。しかし、統計的な分析数は充足していると思う。また、群馬県企業局『三原田遺跡』（1990）に掲載された既発表資料については重複を避けるために記載数値を優先した。

3．計量の作業は報告書の刊行される前後2回にわたっておこなった。当時、出土遺物は群馬県立歴史博物館と企業局分室の二カ所に分散保管されており、さらに資料に通し番号が付されていなかったために、残念ながら本計量表の通番資料と原資料との照合は不可能になっている。現在、これらの資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに一括保管されている。

4．石材同定は飯島静男氏に依頼した。この計量表の作成に際しては赤山容造氏に種々のご指導を頂いた。またコンピュータ入力に際しては坂口一・井上昌美両氏のご協力があった。さらに資料の収集作業については上記両氏をはじめとして神谷佳明・黒田晃・黒田紀子・小暮紀子・桜井美枝氏等に多大なるご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
1	凹石	18	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	6-A'11-3土壙	
2	凹石	2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-6住	加曽利E2
3	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-34住　炉中	加曽利E4
4	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-13住	三原田
5	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	2-38住	加曽利E2
6	凹石	2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-17住	阿玉台2
7	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	溶結凝灰岩	7-H'28-A 土壙	
8	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-5住	加曽利E3
9	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-25住	加曽利E2
10	凹石	6	4	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-4住　炉中	加曽利E2
11	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	珪質変質岩	1-J10-1土壙	
12	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-33住　床直	加曽利E3
13	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-8住	加曽利E2
14	凹石	2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-X24-1土壙	
15	凹石	2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-17住	
16	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-4住	
17	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
18	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-N14-3土壙	
19	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-G10-3土壙	
20	凹石	2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-3住	加曽利E2
21	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	変質玄武岩	2-G17-A 土壙	
22	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-7住	加曽利E3
23	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	凝灰岩質砂岩	3-41住	加曽利E2
24	凹石	4	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-8住	加曽利E3
25	凹石	4	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-4住　炉中	加曽利E2
26	凹石	3	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-M42-A 土壙	
27	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-15住	加曽利E3
28	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	変質安山岩	2-35住	加曽利E4
29	凹石	2	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	3-O22-A 土壙	
30	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住南土壙	
31	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	2-38住	加曽利E2
32	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-27住	加曽利E3
33	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-Y10-A 土壙	
34	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-J16-G 土壙	
35	凹石	2	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-8住	加曽利E3
36	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	凝灰岩質砂岩	7-15住	加曽利E3
37	凹石	1	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-Y23(ハ) 土壙	
38	凹石	3	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
39	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	2-7住	加曽利E3
40	凹石	3	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-13住	加曽利E3
41	凹石	5	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-J11-G 土壙	
42	凹石	3	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-8住	加曽利E3
43	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-X9-C 土壙	
44	凹石	5	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-36•38住	
45	凹石	2	2	0.0	0.0	0.0	3.3	530	229	2.3	石英閃緑岩	7-B'23(ローハ)	
46	凹石	1	1	0.0	0.0	0.0	3.6	376	149	2.5	粗粒輝石安山岩	H'29　4層下	
47	凹石	5	2	0.0	4.9	0.0	4.2	0	0	0.0	蛇紋岩	1-O4-A 土壙	
48	凹石	1	0	0.0	5.7	0.0	4.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	3-T30-B 土壙	
49	凹石	2	2	0.0	6.0	0.0	3.0	271	0	0.0	流紋岩	1-LM6	
50	凹石	1	0	0.0	6.5	0.0	5.8	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'17-25土壙	
51	凹石	2	1	0.0	7.1	0.0	5.1	0	0	0.0	石英閃緑岩	7-1住	加曽利E2
52	凹石	2	2	0.0	8.0	0.0	5.7	0	0	0.0	石英斑岩	6-7住	称名寺1
53	凹石	1	0	6.0	7.4	0.8	5.3	508	187	2.7	石英閃緑岩	2-Q14-O 土壙	

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
54	凹石	1	0	6.2	5.8	1.1	4.9	242	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-44住	堀之内1
55	凹石	1	1	6.9	6.3	1.1	5.9	334	146	2.3	粗粒輝石安山岩	4-N35(ロ,ハ)　褐色土層	
56	凹石	1	1	7.5	6.3	1.2	4.3	311	113	2.8	粗粒輝石安山岩	3-26住	加曽利E2
57	凹石	1	1	7.6	7.2	1.1	5.0	355	157	2.3	粗粒輝石安山岩	6区不明	
58	凹石	1	1	7.9	6.5	1.2	4.8	352	0	0.0	石英閃緑岩	不明	
59	凹石	1	1	8.0	5.8	1.4	3.2	175	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-F'23　4層	
60	凹石	1	1	8.2	4.9	1.7	3.3	175	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-D'16(ロ)	
61	凹石	1	0	8.2	5.6	1.5	3.1	206	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-6住	加曽利E4
62	凹石	1	0	8.2	6.6	1.2	3.7	221	103	2.2	粗粒輝石安山岩	5-D7　4層	
63	凹石	1	1	8.3	7.3	1.1	3.2	317	115	2.7	粗粒輝石安山岩	8-K'33　5層	
64	凹石	1	1	8.4	7.6	1.1	4.9	462	0	0.0	アプライト	1-V4-C 土壙	
65	凹石	1	1	8.5	7.9	1.1	4.1	408	156	2.6	石英閃緑岩	7-4住	加曽利E2
66	凹石	1	1	8.5	8.4	1.0	3.2	392	144	2.7	粗粒輝石安山岩	5-Z8　5層	
67	凹石	1	1	8.6	7.3	1.2	4.5	387	151	2.6	石英閃緑岩	1-P3-4	
68	凹石	1	1	8.8	7.2	1.2	3.5	327	0	0.0	石英閃緑岩	7-5住	加曽利E2
69	凹石	1	1	8.8	8.0	1.1	5.5	491	220	2.2	粗粒輝石安山岩	6-27住	加曽利E3
70	凹石	1	1	8.8	8.1	1.1	4.3	548	209	2.6	石英閃緑岩	6-E17(ロ)	
71	凹石	1	1	8.9	6.2	1.4	5.3	445	167	2.7	粗粒輝石安山岩	1-M1　5層	
72	凹石	1	1	8.9	6.4	1.4	5.1	334	155	2.2	粗粒輝石安山岩	7-X23	
73	凹石	2	2	8.9	7.1	1.3	3.6	305	144	2.1	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
74	凹石	1	1	8.9	7.9	1.1	4.0	410	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-F'23　4層	
75	凹石	1	0	8.9	8.0	1.1	6.4	631	252	2.5	流紋岩	予備調査	
76	凹石	3	1	9.0	7.2	1.3	3.7	340	129	2.6	黒色頁岩	2-35住	加曽利E4
77	凹石	1	1	9.0	7.4	1.2	4.2	406	150	2.7	粗粒輝石安山岩	1-2住	加曽利E2
78	凹石	1	1	9.0	7.4	1.2	4.8	506	185	2.7	粗粒輝石安山岩	6-X13(イ)	
79	凹石	1	0	9.0	7.6	1.2	4.1	424	158	2.7	石英閃緑岩	1-N8　5層	
80	凹石	2	2	9.0	8.1	1.1	4.3	457	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-C'38	
81	凹石	1	1	9.0	8.2	1.1	5.3	539	221	2.4	粗粒輝石安山岩	N9	
82	凹石	1	1	9.1	6.5	1.4	3.9	268	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-N8-1 土壙	
83	凹石	1	1	9.2	6.9	1.3	4.3	446	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-5住	加曽利E2
84	凹石	1	0	9.2	7.3	1.3	4.4	418	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-15住	加曽利E3
85	凹石	2	2	9.2	7.5	1.2	4.5	512	194	2.6	粗粒輝石安山岩	1-Q9	
86	凹石	1	1	9.2	8.5	1.1	4.4	531	204	2.6	石英閃緑岩	8-Z33　4層	
87	凹石	1	0	9.3	6.6	1.4	3.7	337	138	2.4	粗粒輝石安山岩	5-Z8(ニ)	
88	凹石	1	1	9.3	6.9	1.3	4.2	415	159	2.6	粗粒輝石安山岩	3区	
89	凹石	1	1	9.3	7.3	1.3	4.8	496	179	2.8	粗粒輝石安山岩	3-24住	三原田
90	凹石	1	1	9.3	7.4	1.3	4.4	428	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-12住	加曽利E2
91	凹石	1	0	9.3	7.5	1.2	4.4	441	175	2.5	粗粒輝石安山岩	6-8住	加曽利E3
92	凹石	1	1	9.3	7.8	1.2	3.5	408	158	2.6	石英閃緑岩	1-N8	
93	凹石	1	0	9.3	8.0	1.2	5.4	511	182	2.8	粗粒輝石安山岩	2区　5層	
94	凹石	1	0	9.3	8.7	1.1	5.8	695	261	2.7	粗粒輝石安山岩	2-57住	
95	凹石	1	0	9.3	9.0	1.0	4.3	541	197	2.8	石英閃緑岩	6-E'16F'16　4層5層	
96	凹石	1	1	9.3	9.0	1.0	5.3	516	228	2.3	粗粒輝石安山岩	8-E'35-3 土壙	
97	凹石	1	0	9.4	6.8	1.4	3.9	352	133	2.7	粗粒輝石安山岩	6-8住	加曽利E3
98	凹石	1	1	9.4	7.3	1.3	4.0	442	164	2.7	粗粒輝石安山岩	2-27住	加曽利E3
99	凹石	1	1	9.4	8.4	1.1	4.5	417	184	2.3	粗粒輝石安山岩	表採	
100	凹石	1	0	9.4	8.5	1.1	5.3	632	253	2.5	粗粒輝石安山岩	1-S3	
101	凹石	1	0	9.4	9.4	1.0	4.8	674	253	2.7	粗粒輝石安山岩	1-G8	
102	凹石	2	1	9.5	6.0	1.6	4.7	461	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-9住	加曽利E2
103	凹石	2	2	9.5	6.3	1.5	4.4	424	151	2.8	粗粒輝石安山岩	2区　表採	
104	凹石	1	1	9.5	7.3	1.3	4.8	517	192	2.7	ひん岩	2-38住　床直	加曽利E2
105	凹石	1	1	9.5	7.4	1.3	4.0	449	169	2.7	石英閃緑岩	L10　表採一括	
106	凹石	1	1	9.5	7.4	1.3	4.0	355	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-A'15-23土壙	

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
107	凹石	2	0	9.5	7.4	1.3	4.5	510	189	2.7	粗粒輝石安山岩	3-N30-F 土壙	
108	凹石	1	0	9.6	5.6	1.7	3.7	289	120	2.4	溶結凝灰岩	2-N15　5層	
109	凹石	1	0	9.6	5.7	1.7	3.7	336	126	2.7	溶結凝灰岩	1-G6　4層5層	
110	凹石	1	0	9.6	8.0	1.2	4.0	500	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-F'17　5層	
111	凹石	2	2	9.6	8.2	1.2	4.8	593	230	2.6	石英閃緑岩	1-J7	
112	凹石	2	1	9.7	5.7	1.7	3.3	297	109	2.7	粗粒輝石安山岩	5-5住西側土壙	
113	凹石	1	1	9.7	6.3	1.5	4.7	321	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-13住	加曽利E1
114	凹石	1	1	9.7	7.2	1.3	3.3	348	139	2.5	粗粒輝石安山岩	予備調査	
115	凹石	1	1	9.7	8.1	1.2	4.1	523	197	2.7	粗粒輝石安山岩	1-N8	
116	凹石	2	1	9.7	8.3	1.2	5.0	583	226	2.6	かこう岩	8-C'38-4 土壙	
117	凹石	1	1	9.8	6.8	1.4	4.0	425	150	2.8	粗粒輝石安山岩	3-26住	加曽利E2
118	凹石	2	0	9.8	7.1	1.4	3.6	386	143	2.7	粗粒輝石安山岩	4-O38	
119	凹石	1	1	9.8	7.5	1.3	3.8	380	159	2.4	粗粒輝石安山岩	3-U,V21,22　住居	
120	凹石	1	1	9.8	7.7	1.3	4.3	441	192	2.3	粗粒輝石安山岩	4-Q35　褐色土下部	
121	凹石	1	0	9.8	8.4	1.2	4.4	551	204	2.7	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
122	凹石	2	1	9.8	8.8	1.1	5.2	584	246	2.4	粗粒輝石安山岩	2-5住内5土壙	
123	凹石	1	1	9.9	7.4	1.3	4.3	435	174	2.5	粗粒輝石安山岩	3-41住	加曽利E2
124	凹石	1	1	9.9	7.7	1.3	3.6	452	167	2.7	石英閃緑岩	予備調査	
125	凹石	1	1	9.9	7.8	1.3	4.4	509	205	2.5	石英閃緑岩	6-8住	加曽利E3
126	凹石	1	0	9.9	8.3	1.2	5.2	690	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-N12-B 土壙	
127	凹石	2	2	10.0	6.0	1.7	2.6	255	96	2.7	粗粒輝石安山岩	2-13住	加曽利E3
128	凹石	2	2	10.0	7.0	1.4	4.3	467	183	2.6	粗粒輝石安山岩	3区	
129	凹石	2	1	10.0	7.2	1.4	4.5	529	196	2.7	粗粒輝石安山岩	5-M9　5層	
130	凹石	1	1	10.0	8.1	1.2	4.0	339	156	2.2	粗粒輝石安山岩	8-L'34　4層	
131	凹石	2	1	10.0	8.5	1.2	5.0	516	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住	加曽利E2
132	凹石	1	1	10.0	9.7	1.0	6.6	903	330	2.7	粗粒輝石安山岩	3-33住	加曽利E3
133	凹石	1	0	10.1	6.5	1.6	3.5	375	0	0.0	流紋岩	6-C'16　4層	
134	凹石	2	1	10.1	6.5	1.6	4.2	417	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-20住	加曽利E3
135	凹石	1	1	10.1	7.4	1.4	4.3	455	0	0.0	溶結凝灰岩	3-K21-A 土壙	
136	凹石	1	1	10.1	8.0	1.3	4.8	612	221	2.8	粗粒輝石安山岩	Q15　5層	
137	凹石	1	1	10.1	8.4	1.2	4.8	572	256	2.2	粗粒輝石安山岩	予備調査	
138	凹石	1	1	10.1	8.8	1.1	4.9	688	260	2.7	粗粒輝石安山岩	1-T7	
139	凹石	1	1	10.2	4.8	2.1	4.1	313	117	2.7	石英閃緑岩	1-N7	
140	凹石	2	1	10.2	6.1	1.7	4.3	423	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-36住	加曽利E2
141	凹石	2	2	10.2	6.7	1.5	3.9	433	167	2.6	粗粒輝石安山岩	2-J12　4層	
142	凹石	1	1	10.2	7.0	1.5	4.2	485	185	2.6	粗粒輝石安山岩	2-49住　溝中	加曽利E3
143	凹石	2	1	10.2	7.5	1.4	4.6	461	205	2.3	溶結凝灰岩	3-N30-F 土壙	
144	凹石	1	1	10.2	7.8	1.3	4.6	508	183	2.8	粗粒輝石安山岩	3-7住	加曽利E3
145	凹石	1	1	10.2	7.9	1.3	4.0	415	170	2.4	粗粒輝石安山岩	3-22住	加曽利E3
146	凹石	2	2	10.2	8.2	1.2	5.2	681	249	2.7	粗粒輝石安山岩	2区　5層	
147	凹石	2	2	10.2	9.1	1.1	5.1	739	270	2.7	粗粒輝石安山岩	3区	
148	凹石	1	1	10.2	9.2	1.1	4.2	568	222	2.6	粗粒輝石安山岩	1-G10-3 土壙	
149	凹石	2	2	10.2	10.0	1.0	7.1	806	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-D'17-46土壙	
150	凹石	1	1	10.3	5.8	1.8	3.3	292	0	0.0	石英閃緑岩	1-N4　5層	
151	凹石	1	1	10.3	7.0	1.5	3.8	414	0	0.0	輝緑岩	2-25住	加曽利E2
152	凹石	2	1	10.3	7.3	1.4	4.7	528	196	2.7	石英閃緑岩	1-V4-C 土壙	
153	凹石	2	2	10.3	7.5	1.4	4.4	494	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'16	
154	凹石	1	1	10.3	7.5	1.4	4.6	507	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'17-25土壙	
155	凹石	2	0	10.3	7.6	1.4	6.3	682	274	2.5	粗粒輝石安山岩	不明	
156	凹石	2	1	10.3	7.7	1.3	4.4	537	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-5住	加曽利E2
157	凹石	1	1	10.3	8.0	1.3	3.0	424	159	2.7	石英閃緑岩	6-D'19　4層	
158	凹石	2	0	10.3	8.0	1.3	5.6	669	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-20住内土壙	
159	凹石	1	1	10.3	8.1	1.3	4.1	508	0	0.0	石英閃緑岩	6-27住	加曽利E3
160	凹石	1	1	10.3	9.8	1.1	4.6	708	257	2.8	石英閃緑岩	7-G'28-D 土壙	

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
161	凹石	1	1	10.4	5.2	2.1	2.7	231	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-Q2　5層	
162	凹石	1	0	10.4	6.4	1.6	3.2	348	0	0.0	石英閃緑岩	3-38住　床直	加曽利E1
163	凹石	2	1	10.4	7.5	1.4	4.3	652	248	2.6	粗粒輝石安山岩	2-Q15-B	
164	凹石	1	1	10.4	7.9	1.3	5.7	715	269	2.7	石英閃緑岩	不明	
165	凹石	1	1	10.4	9.0	1.2	6.6	717	340	2.1	粗粒輝石安山岩	1-T9-C 土壙	
166	凹石	1	1	10.5	4.5	2.3	3.3	245	0	0.0	石英閃緑岩	6-31住　溝中	加曽利E3
167	凹石	2	1	10.5	6.5	1.6	4.0	419	154	2.7	粗粒輝石安山岩	1-36住	加曽利E4
168	凹石	1	1	10.5	7.5	1.4	4.0	504	196	2.6	粗粒輝石安山岩	2区	
169	凹石	1	0	10.5	7.5	1.4	4.2	502	194	2.6	石英閃緑岩	5-10住	加曽利E3
170	凹石	2	2	10.5	7.6	1.4	4.0	460	175	2.6	粗粒輝石安山岩	5-20住	三原田
171	凹石	2	2	10.5	7.7	1.4	4.5	524	217	2.4	粗粒輝石安山岩	3区	
172	凹石	1	1	10.5	7.9	1.3	3.6	468	184	2.5	石英閃緑岩	6-4住	加曽利E2
173	凹石	2	0	10.5	7.9	1.3	4.3	514	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-K12-C 土壙	
174	凹石	2	2	10.5	8.2	1.3	4.0	586	225	2.6	粗粒輝石安山岩	3-S27	
175	凹石	1	1	10.6	7.2	1.5	5.3	675	253	2.7	粗粒輝石安山岩	6-E17(ロ)No101	
176	凹石	2	1	10.6	7.4	1.4	3.9	541	202	2.7	粗粒輝石安山岩	2-1住	加曽利E4
177	凹石	1	1	10.6	7.8	1.4	3.2	428	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-I12　5層	
178	凹石	1	1	10.6	8.2	1.3	5.0	623	248	2.5	かこう岩	2-55住	加曽利E3
179	凹石	2	0	10.6	8.8	1.2	3.4	326	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-M34-A 土壙	
180	凹石	2	2	10.6	9.3	1.1	5.0	791	308	2.6	石英閃緑岩	6-C'18	
181	凹石	2	1	10.7	7.3	1.5	4.3	513	192	2.7	粗粒輝石安山岩	3-S27,28-B 土壙	
182	凹石	2	2	10.7	7.4	1.4	4.3	493	192	2.6	粗粒輝石安山岩	2-8住	加曽利E3
183	凹石	1	1	10.7	7.8	1.4	3.8	491	193	2.5	石英閃緑岩	7-X23(イ)	
184	凹石	1	0	10.7	8.0	1.3	3.5	494	187	2.6	石英閃緑岩	7-A'23(ハニ)	
185	凹石	2	2	10.8	4.8	2.3	2.8	242	0	0.0	砂岩	2-2住	称名寺1
186	凹石	1	1	10.8	6.0	1.8	4.3	408	156	2.6	石英閃緑岩	3-23住	加曽利E2
187	凹石	1	1	10.8	6.8	1.6	4.5	546	0	0.0	かこう岩	7-Y21(ハ)	
188	凹石	1	1	10.8	7.3	1.5	3.2	416	160	2.6	粗粒輝石安山岩	3-U,V21,22　覆土下部	
189	凹石	1	0	10.8	7.3	1.5	4.5	482	0	0.0	ひん岩	5-A'8　5層	
190	凹石	2	1	10.8	7.6	1.4	4.3	505	202	2.5	変質安山岩	6-F19(1)　表採	
191	凹石	1	1	10.8	7.7	1.4	4.6	606	222	2.7	粗粒輝石安山岩	不明	
192	凹石	5	2	10.8	8.0	1.4	5.6	610	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-17住	阿玉台2
193	凹石	1	1	10.8	8.3	1.3	4.8	634	244	2.6	溶結凝灰岩	7-A'21-B 土壙	
194	凹石	2	1	10.8	9.0	1.2	4.5	744	285	2.6	粗粒輝石安山岩	2-L20	
195	凹石	2	2	10.8	9.3	1.2	4.2	568	0	0.0	粗粒輝石安山岩	不明	
196	凹石	1	1	10.9	7.0	1.6	4.6	544	210	2.6	粗粒輝石安山岩	5-7住	称名寺1
197	凹石	1	1	10.9	7.1	1.5	4.0	484	184	2.6	溶結凝灰岩	2-N11	
198	凹石	2	2	10.9	7.6	1.4	4.4	602	223	2.7	粗粒輝石安山岩	8-E'F'38No2	
199	凹石	2	0	10.9	7.9	1.4	5.3	748	287	2.6	ひん岩	1-R5	
200	凹石	1	1	10.9	8.2	1.3	6.1	830	312	2.7	粗粒輝石安山岩	3-Q15　5層	
201	凹石	3	2	10.9	9.0	1.2	5.3	749	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-B'30(ニ)	
202	凹石	2	2	10.9	9.0	1.2	5.3	735	279	2.6	石英閃緑岩	3-S27,28-B 土壙	
203	凹石	1	1	10.9	9.0	1.2	6.3	834	334	2.5	流紋岩	3-M32　5層	
204	凹石	1	0	10.9	9.1	1.2	4.4	657	259	2.5	石英閃緑岩	8-16住	焼町2
205	凹石	1	1	11.0	6.4	1.7	3.5	376	0	0.0	粗粒輝石安山岩	不明	
206	凹石	2	1	11.0	6.9	1.6	4.0	569	198	2.9	粗粒輝石安山岩	2-J11-F　土壙	
207	凹石	2	2	11.0	7.4	1.5	3.8	483	0	0.0	石英閃緑岩	2-36・38住	
208	凹石	2	1	11.0	7.7	1.4	4.3	584	216	2.7	粗粒輝石安山岩	2-57住	
209	凹石	1	1	11.0	7.8	1.4	5.0	625	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-2住(欠番)	
210	凹石	1	1	11.0	8.5	1.3	5.2	719	282	2.6	石英閃緑岩	6-26住	加曽利E3
211	凹石	1	1	11.0	8.5	1.3	5.6	896	320	2.8	石英閃緑岩	3-G	
212	凹石	2	2	11.1	6.5	1.7	4.2	418	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-50住　床直	加曽利E2
213	凹石	1	0	11.1	7.0	1.6	4.1	531	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-20住	三原田

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
214	凹石	1	0	11.1	7.0	1.6	4.6	476	176	2.7	粗粒輝石安山岩	6-C'20-11土壙	
215	凹石	1	1	11.1	7.3	1.5	4.0	472	184	2.6	溶結凝灰岩	2-3住	加曽利E3
216	凹石	1	1	11.1	7.4	1.5	3.9	477	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-L4	
217	凹石	2	2	11.1	8.1	1.4	4.5	687	263	2.6	粗粒輝石安山岩	1-S9-10	
218	凹石	1	1	11.2	6.3	1.8	3.8	466	175	2.7	粗粒輝石安山岩	3-N30　黒色土中	
219	凹石	2	1	11.2	7.5	1.5	4.0	604	226	2.7	溶結凝灰岩	2区　5層	
220	凹石	1	0	11.2	7.9	1.4	4.5	644	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-5住	加曽利E2
221	凹石	1	0	11.2	8.1	1.4	4.3	592	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-D'27(ロ) 土壙	
222	凹石	1	1	11.2	8.6	1.3	4.7	560	251	2.2	粗粒輝石安山岩	8-A'37-3土壙	
223	凹石	2	1	11.2	8.9	1.3	4.8	691	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-B'15　4層	
224	凹石	1	0	11.3	6.8	1.7	4.8	618	252	2.5	粗粒輝石安山岩	3-23住	加曽利E2
225	凹石	2	2	11.3	7.1	1.6	4.4	578	213	2.7	石英閃緑岩	3-N22　4層	
226	凹石	1	0	11.3	8.4	1.3	4.2	631	259	2.4	閃緑岩	7-Y30(ハ) 土壙上面	
227	凹石	2	2	11.3	8.8	1.3	6.6	958	0	0.0	かこう岩	7-5住	加曽利E2
228	凹石	2	1	11.3	9.0	1.3	4.3	734	279	2.6	粗粒輝石安山岩	8-Z37　5層	
229	凹石	1	1	11.3	9.0	1.3	5.0	777	328	2.4	粗粒輝石安山岩	2区　表採	
230	凹石	2	0	11.3	9.8	1.2	5.7	945	342	2.8	粗粒輝石安山岩	3-N25-A 土壙	
231	凹石	1	1	11.4	5.7	2.0	3.9	426	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-58住	加曽利E3
232	凹石	1	1	11.4	6.8	1.7	3.3	420	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'F'	
233	凹石	2	2	11.4	7.2	1.6	4.2	531	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-E'26(ニ)　5層	
234	凹石	2	1	11.4	7.5	1.5	4.9	600	235	2.6	粗粒輝石安山岩	2-J11-1　覆土上部	
235	凹石	2	0	11.4	7.6	1.5	3.9	528	203	2.6	粗粒輝石安山岩	4-18住	三原田
236	凹石	1	1	11.4	7.6	1.5	4.2	559	208	2.7	石英閃緑岩	1-9住	加曽利E2
237	凹石	2	0	11.4	7.8	1.5	4.8	731	260	2.8	粗粒輝石安山岩	不明	
238	凹石	2	2	11.4	8.2	1.4	4.5	688	262	2.6	石英閃緑岩	4-3住	三原田
239	凹石	2	2	11.4	8.9	1.3	4.5	753	278	2.7	粗粒輝石安山岩	3-M32	
240	凹石	3	2	11.4	9.3	1.2	4.8	854	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-6住	加曽利E2
241	凹石	2	0	11.5	6.0	1.9	3.9	449	163	2.8	石英閃緑岩	2-L15　4層	
242	凹石	2	2	11.5	7.0	1.6	3.7	556	207	2.7	石英閃緑岩	2-K13	
243	凹石	2	2	11.5	7.4	1.6	4.5	526	203	2.6	石英閃緑岩	6-14住　床直	三原田
244	凹石	2	2	11.5	7.4	1.6	4.9	683	244	2.8	粗粒輝石安山岩	1-9住	加曽利E2
245	凹石	2	1	11.5	8.7	1.3	3.5	550	197	2.8	粗粒輝石安山岩	8-20住	阿玉台2
246	凹石	1	1	11.5	8.7	1.3	4.8	710	282	2.5	溶結凝灰岩	1-N9　4層5層	
247	凹石	2	2	11.5	9.1	1.3	6.3	917	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-A'37-3土壙	
248	凹石	1	0	11.5	9.2	1.3	5.4	859	335	2.6	石英閃緑岩	1-39住　炉石	
249	凹石	1	0	11.6	6.8	1.7	3.2	382	0	0.0	溶結凝灰岩	6-30住	加曽利E3
250	凹石	3	3	11.6	7.8	1.5	2.6	547	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-A'24(イ) 土壙	
251	凹石	2	1	11.6	8.1	1.4	5.0	783	313	2.5	石英閃緑岩	6-E16-(イ)26住	
252	凹石	1	1	11.6	8.2	1.4	3.1	522	195	2.7	粗粒輝石安山岩	1-S6	
253	凹石	2	2	11.6	8.3	1.4	4.1	591	260	2.3	粗粒輝石安山岩	O16　4層	
254	凹石	3	2	11.6	8.5	1.4	4.3	663	271	2.5	粗粒輝石安山岩	8-Y38	
255	凹石	3	2	11.6	8.9	1.3	4.1	598	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'17-25土壙	
256	凹石	2	1	11.6	9.2	1.3	5.1	751	309	2.4	粗粒輝石安山岩	不明	
257	凹石	2	1	11.6	9.6	1.2	7.6	1178	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-31住	加曽利E3
258	凹石	2	2	11.7	7.6	1.5	3.2	523	203	2.6	粗粒輝石安山岩	3区	
259	凹石	2	1	11.7	7.6	1.5	3.9	558	217	2.6	粗粒輝石安山岩	3-U28	
260	凹石	2	2	11.7	7.7	1.5	3.1	412	184	2.2	粗粒輝石安山岩	E36-1-1	
261	凹石	1	1	11.7	7.8	1.5	3.5	573	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-Z26(ニ)	
262	凹石	2	2	11.7	8.0	1.5	4.4	711	270	2.6	石英閃緑岩	3区	
263	凹石	2	2	11.7	8.8	1.3	4.8	633	255	2.5	粗粒輝石安山岩	5-20住	三原田
264	凹石	1	1	11.7	9.4	1.2	4.6	789	281	2.8	輝緑岩	1-S6　4層	
265	凹石	1	1	11.7	11.0	1.1	3.7	721	277	2.6	石英閃緑岩	2-9住　床直	加曽利E4
266	凹石	3	1	11.7	11.9	1.0	7.0	1123	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-21住	加曽利E2

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
267	凹石	1	1	11.8	5.7	2.1	3.1	342	0	0.0	石英閃緑岩	1-M6,7間ベルト	
268	凹石	2	1	11.8	6.0	2.0	4.4	390	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住南土壙	
269	凹石	2	2	11.8	7.2	1.6	4.0	447	184	2.4	粗粒輝石安山岩	1-20住　炉中	加曽利E2
270	凹石	2	1	11.8	7.5	1.6	4.0	540	0	0.0	砂岩	2-11住	加曽利E4
271	凹石	2	2	11.8	8.0	1.5	4.0	568	208	2.7	粗粒輝石安山岩	8-H'36-2土壙	
272	凹石	3	2	11.8	8.4	1.4	5.0	626	262	2.4	粗粒輝石安山岩	1-4住　炉中	三原田
273	凹石	2	0	11.8	10.8	1.1	5.3	919	413	2.2	粗粒輝石安山岩	3-11住	加曽利E3
274	凹石	2	1	11.9	7.4	1.6	5.0	709	261	2.7	石英閃緑岩	1-R5	
275	凹石	2	1	11.9	7.7	1.5	4.1	649	231	2.8	粗粒輝石安山岩	2区　5層	
276	凹石	1	0	11.9	8.6	1.4	3.6	566	218	2.6	粗粒輝石安山岩	2-U15-G土壙	
277	凹石	2	1	12.0	6.7	1.8	3.9	564	0	0.0	粗粒輝石安山岩	不明	
278	凹石	2	2	12.0	7.2	1.7	4.2	666	247	2.7	石英閃緑岩	1-9住	加曽利E2
279	凹石	2	0	12.0	7.4	1.6	3.8	517	184	2.8	石英閃緑岩	2-47住	三原田
280	凹石	2	2	12.0	9.4	1.3	4.7	835	317	2.6	石英閃緑岩	5-Z7(ハ)	
281	凹石	2	1	12.0	9.5	1.3	5.2	831	343	2.4	粗粒輝石安山岩	3-O30-A土壙	
282	凹石	3	2	12.0	9.6	1.3	4.8	841	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-C'16(ハニ)	
283	凹石	1	1	12.0	12.5	1.0	4.4	894	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-2住	加曽利E2
284	凹石	3	0	12.1	5.9	2.1	2.9	364	123	3.0	輝緑岩	3-20住	加曽利E3
285	凹石	2	2	12.1	7.1	1.7	3.3	420	161	2.6	粗粒輝石安山岩	6-28住	加曽利E3
286	凹石	2	1	12.1	7.1	1.7	4.0	337	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-B'12	
287	凹石	2	2	12.1	7.9	1.5	4.2	599	228	2.6	粗粒輝石安山岩	3-29住	堀之内2
288	凹石	2	0	12.1	8.2	1.5	3.7	592	219	2.7	石英閃緑岩	7-E'28(ハ)	
289	凹石	1	1	12.1	8.6	1.4	4.0	480	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-A'37-3土壙	
290	凹石	2	2	12.1	8.6	1.4	4.5	709	278	2.6	流紋岩	1-M9	
291	凹石	2	0	12.1	9.2	1.3	5.2	872	353	2.5	溶結凝灰岩	2区　表採	
292	凹石	2	2	12.1	9.3	1.3	5.7	962	366	2.6	石英閃緑岩	7-A'	
293	凹石	2	2	12.2	5.9	2.1	3.5	423	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-L22-B土壙	
294	凹石	2	0	12.2	7.1	1.7	4.7	639	0	0.0	石英閃緑岩	7-23住　床直	新道並行
295	凹石	2	2	12.2	7.4	1.6	4.0	545	201	2.7	石英閃緑岩	2-O17　4層5層	
296	凹石	2	2	12.2	7.5	1.6	4.6	659	250	2.6	粗粒輝石安山岩	2-1住	加曽利E4
297	凹石	1	0	12.2	7.6	1.6	3.0	478	175	2.7	粗粒輝石安山岩	3-23住	加曽利E2
298	凹石	1	1	12.2	7.7	1.6	3.7	529	0	0.0	石英閃緑岩	6-A'11	
299	凹石	2	2	12.2	7.8	1.6	4.9	678	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-B'37-1-2土壙	
300	凹石	2	0	12.2	7.9	1.5	5.2	812	324	2.5	粗粒輝石安山岩	4-24住	
301	凹石	2	1	12.2	9.2	1.3	4.0	733	276	2.7	粗粒輝石安山岩	5-20住　床直	三原田
302	凹石	2	2	12.2	10.6	1.2	5.1	874	370	2.4	粗粒輝石安山岩	8-5住	
303	凹石	2	2	12.3	5.8	2.1	3.7	426	0	0.0	石英閃緑岩	7-D'E'25(イ)　5層	
304	凹石	1	0	12.3	7.0	1.8	4.1	581	213	2.7	石英閃緑岩	2区　5層	
305	凹石	2	1	12.3	7.1	1.7	3.3	430	169	2.5	溶結凝灰岩	1-N5　4層5層	
306	凹石	2	2	12.3	8.2	1.5	4.2	636	270	2.4	粗粒輝石安山岩	1-S7	
307	凹石	2	2	12.3	8.2	1.5	4.4	614	238	2.6	粗粒輝石安山岩	2-Q13-O土壙	
308	凹石	1	1	12.3	8.7	1.4	4.2	738	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住　床直	加曽利E2
309	凹石	2	2	12.3	9.0	1.4	4.2	748	277	2.7	粗粒輝石安山岩	2-52住	加曽利E3
310	凹石	1	0	12.3	9.1	1.4	4.6	743	310	2.4	粗粒輝石安山岩	2-1住	加曽利E4
311	凹石	1	1	12.4	5.6	2.2	3.6	438	158	2.7	グラノファイヤー	2-57住	
312	凹石	2	0	12.4	6.0	2.1	3.6	464	177	2.6	石英閃緑岩	4-24住	焼町1
313	凹石	2	1	12.4	6.0	2.1	4.1	458	174	2.6	石英閃緑岩	予備調査	
314	凹石	1	0	12.4	6.4	1.9	4.7	550	205	2.7	石英閃緑岩	7-1住	
315	凹石	2	0	12.4	6.8	1.8	4.6	602	235	2.6	粗粒輝石安山岩	1区	
316	凹石	1	0	12.4	7.1	1.7	4.0	594	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-N12-B土壙	
317	凹石	1	1	12.4	7.3	1.7	3.6	511	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-J'31-A土壙	
318	凹石	1	0	12.4	7.3	1.7	5.3	715	264	2.7	粗粒輝石安山岩	3-K23	
319	凹石	2	1	12.4	7.5	1.7	5.0	751	278	2.7	石英閃緑岩	1-S7	
320	凹石	2	2	12.4	7.8	1.6	4.3	657	241	2.7	粗粒輝石安山岩	1-6住	加曽利E2

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
321	凹石	2	2	12.4	7.9	1.6	3.6	546	0	0.0	石英閃緑岩	5-6住　4層5層	
322	凹石	2	1	12.4	8.1	1.5	4.1	677	256	2.6	粗粒輝石安山岩	1-G8-1土壙	
323	凹石	1	0	12.4	9.0	1.4	5.9	1005	367	2.7	変質安山岩	2-L20-B 土壙	
324	凹石	1	0	12.5	7.2	1.7	5.4	720	261	2.8	粗粒輝石安山岩	1-34住	加曽利E3
325	凹石	2	1	12.5	7.5	1.7	4.4	676	243	2.8	粗粒輝石安山岩	2-K11-K 土壙	
326	凹石	2	0	12.5	8.7	1.4	5.4	818	332	2.5	粗粒輝石安山岩	予備調査	
327	凹石	3	2	12.5	8.8	1.4	3.9	624	259	2.4	粗粒輝石安山岩	1区	
328	凹石	2	2	12.5	8.9	1.4	4.6	710	293	2.4	粗粒輝石安山岩	7-5住	加曽利E2
329	凹石	2	2	12.5	9.8	1.3	5.2	947	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-N28　褐色土中	
330	凹石	1	0	12.5	10.0	1.3	4.6	864	314	2.8	粗粒輝石安山岩	3-43住	加曽利E2
331	凹石	2	2	12.6	6.9	1.8	5.0	734	0	0.0	変質安山岩	8-X33　5層	
332	凹石	2	2	12.6	7.3	1.7	4.3	665	259	2.6	溶結凝灰岩	5-10住	加曽利E3
333	凹石	2	2	12.6	7.7	1.6	4.2	673	257	2.6	石英閃緑岩	6-7住	称名寺1
334	凹石	3	2	12.6	7.7	1.6	6.5	515	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-20住　床直	阿玉台2
335	凹石	2	0	12.6	7.8	1.6	4.6	720	276	2.6	粗粒輝石安山岩	2-E16　遺構外	
336	凹石	1	0	12.6	7.9	1.6	3.5	609	218	2.8	ひん岩	3-M22　5層	
337	凹石	2	0	12.6	8.0	1.6	4.1	624	226	2.8	粗粒輝石安山岩	2-U12　5層下部	
338	凹石	2	1	12.6	8.2	1.5	5.8	920	364	2.5	粗粒輝石安山岩	5-A'7	
339	凹石	2	0	12.6	8.7	1.4	3.6	686	271	2.5	石英閃緑岩	Q23　4層	
340	凹石	2	2	12.7	6.2	2.0	4.1	552	0	0.0	石英閃緑岩	7-B'21,22　5層	
341	凹石	2	1	12.7	6.7	1.9	4.7	625	0	0.0	石英閃緑岩	2-L20-C 土壙	
342	凹石	2	2	12.7	7.2	1.8	3.4	564	0	0.0	閃緑岩	7-C'21,22	
343	凹石	1	1	12.7	8.6	1.5	2.9	575	209	2.8	粗粒輝石安山岩	2-N15　5層	
344	凹石	4	3	12.7	10.4	1.2	3.5	726	290	2.5	粗粒輝石安山岩	1-T1	
345	凹石	2	0	12.8	5.3	2.4	3.5	441	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-F'17　5層	
346	凹石	2	2	12.8	6.5	2.0	4.5	529	198	2.7	石英閃緑岩	1-11住	加曽利E2
347	凹石	2	0	12.8	6.7	1.9	4.8	624	236	2.6	石英閃緑岩	6-38住	加曽利E3
348	凹石	2	2	12.8	9.1	1.4	4.8	915	342	2.7	石英閃緑岩	2-N15　5層	
349	凹石	1	0	12.8	10.0	1.3	5.8	1102	430	2.6	石英閃緑岩	1-N7	
350	凹石	2	2	12.8	11.0	1.2	4.0	908	350	2.6	溶結凝灰岩	1-R2	
351	凹石	2	2	12.9	6.2	2.1	3.0	418	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-G'29(ニ)	
352	凹石	2	2	12.9	7.6	1.7	4.0	773	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-13住	加曽利E1
353	凹石	2	2	12.9	7.9	1.6	5.0	837	334	2.5	粗粒輝石安山岩	2-U22	
354	凹石	2	1	12.9	8.2	1.6	5.3	856	323	2.7	粗粒輝石安山岩	3-N25-A 土壙	
355	凹石	2	2	12.9	8.5	1.5	4.0	748	0	0.0	石英閃緑岩	2-L12-H 土壙	
356	凹石	2	2	12.9	9.8	1.3	4.5	820	335	2.5	粗粒輝石安山岩	7-J'31-F 土壙	
357	凹石	2	1	12.9	10.4	1.2	4.0	830	311	2.7	石英閃緑岩	7-C'26-B 土壙	
358	凹石	1	1	13.0	5.8	2.2	3.8	450	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-38住　床直	加曽利E1
359	凹石	3	0	13.0	6.7	1.9	4.1	672	251	2.7	粗粒輝石安山岩	7-G'28-D 土壙	
360	凹石	2	0	13.0	7.3	1.8	3.9	621	0	0.0	石英閃緑岩	2-住A　遺構外	
361	凹石	3	2	13.0	7.5	1.7	3.6	571	215	2.7	石英閃緑岩	2-57住	
362	凹石	2	2	13.0	7.8	1.7	3.7	546	225	2.4	溶結凝灰岩	2-30住　(炉石)	三原田
363	凹石	1	1	13.0	9.2	1.4	3.9	666	262	2.5	粗粒輝石安山岩	7-Y29　上部	
364	凹石	2	2	13.0	9.2	1.4	4.8	878	366	2.4	粗粒輝石安山岩	2-K12	
365	凹石	2	0	13.0	9.4	1.4	3.5	611	254	2.4	粗粒輝石安山岩	3-20住	加曽利E3
366	凹石	1	1	13.0	9.4	1.4	6.0	1052	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-H'30-D 土壙	
367	凹石	2	2	13.1	7.3	1.8	3.9	527	208	2.5	石英閃緑岩	2-J14	
368	凹石	2	2	13.1	7.3	1.8	5.5	802	319	2.5	粗粒輝石安山岩	1-N7　4層？	
369	凹石	2	2	13.1	7.9	1.7	4.0	650	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-1住　炉中	加曽利E2
370	凹石	2	0	13.1	7.9	1.7	4.3	754	278	2.7	粗粒輝石安山岩	1-Q6	
371	凹石	2	2	13.1	8.0	1.6	4.4	615	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-G'16(イ)	
372	凹石	2	2	13.1	8.4	1.6	4.0	724	275	2.6	粗粒輝石安山岩	7-B'21-D 土壙	
373	凹石	2	0	13.1	8.6	1.5	5.5	948	347	2.7	粗粒輝石安山岩	3-U31(ロ)　5層	

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
374	凹石	2	2	13.2	7.0	1.9	3.7	470	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-Y10-G 土壙	
375	凹石	3	2	13.2	7.6	1.7	4.7	815	311	2.6	粗粒輝石安山岩	2-N15　5層	
376	凹石	2	2	13.2	7.8	1.7	4.3	632	279	2.3	粗粒輝石安山岩	2-13住	加曽利E3
377	凹石	3	2	13.2	7.9	1.7	3.5	523	200	2.6	溶結凝灰岩	1-V11	
378	凹石	2	2	13.2	8.5	1.6	4.0	608	264	2.3	粗粒輝石安山岩	8-20住	阿玉台2
379	凹石	2	2	13.3	7.3	1.8	4.5	714	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-C'22(ニ)	
380	凹石	2	2	13.3	7.4	1.8	3.8	618	227	2.7	粗粒輝石安山岩	1-15住　(炉石)	加曽利E2
381	凹石	1	0	13.3	7.6	1.8	3.7	0	0	0.0	石英閃緑岩	1-79住	加曽利E3
382	凹石	2	1	13.3	9.2	1.4	5.6	790	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-F'21(ニ) 土壙	
383	凹石	4	2	13.3	9.4	1.4	4.5	897	342	2.6	石英閃緑岩	7-16住(欠番)	
384	凹石	1	1	13.4	7.5	1.8	4.0	736	273	2.7	粗粒輝石安山岩	6-29住	加曽利E3
385	凹石	2	0	13.5	6.8	2.0	4.4	665	245	2.7	粗粒輝石安山岩	6-40住	加曽利E3
386	凹石	1	0	13.5	8.8	1.5	6.0	1019	390	2.6	粗粒輝石安山岩	8-I'36(イ)　5層	
387	凹石	1	0	13.5	8.8	1.5	8.1	1001	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-14住	黒浜
388	凹石	3	2	13.6	6.1	2.2	4.8	374	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
389	凹石	1	0	13.6	7.1	1.9	6.0	952	350	2.7	粗粒輝石安山岩	6-B'11　4層5層	
390	凹石	2	1	13.6	7.2	1.9	4.1	681	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-15住	加曽利E3
391	凹石	2	2	13.6	7.4	1.8	4.1	698	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-5住	加曽利E3
392	凹石	2	1	13.6	7.6	1.8	5.0	802	305	2.6	粗粒輝石安山岩	3-23住	加曽利E2
393	凹石	2	2	13.6	8.0	1.7	4.5	849	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-Z23(ニ)　5層	
394	凹石	2	1	13.6	8.5	1.6	4.5	711	317	2.2	粗粒輝石安山岩	1-N8	
395	凹石	1	0	13.7	7.5	1.8	3.5	571	210	2.7	粗粒輝石安山岩	7-B'21-D 土壙	
396	凹石	2	2	13.7	8.5	1.6	5.6	813	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-E'17(ハ)	
397	凹石	2	2	13.7	8.9	1.5	4.9	919	351	2.6	石英閃緑岩	1-13住	加曽利E3
398	凹石	1	0	13.8	5.8	2.4	3.7	524	192	2.7	石英閃緑岩	3-O22	
399	凹石	2	2	13.8	5.9	2.3	4.5	683	0	0.0	石英閃緑岩	6-R'13　4層	
400	凹石	2	2	13.8	7.3	1.9	4.1	659	245	2.7	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
401	凹石	2	2	13.8	9.3	1.5	4.1	840	312	2.7	石英閃緑岩	2-36住西北土壙	
402	凹石	1	1	13.9	7.4	1.9	4.0	622	237	2.6	石英閃緑岩	7-43住(欠番)　床直	
403	凹石	2	2	13.9	8.1	1.7	3.4	585	247	2.4	粗粒輝石安山岩	2-I17-K 土壙	
404	凹石	2	2	13.9	8.5	1.6	4.3	851	317	2.7	ひん岩	7-G'28?	
405	凹石	2	2	14.0	7.2	1.9	4.6	801	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-1住	加曽利E2
406	凹石	2	2	14.1	6.5	2.2	4.1	683	0	0.0	ひん岩	7-I'30(ニ)	
407	凹石	2	1	14.1	7.7	1.8	3.5	623	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-X10	
408	凹石	1	1	14.1	9.7	1.5	5.3	1100	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-4住	加曽利E2
409	凹石	1	0	14.2	5.8	2.4	3.9	497	177	2.8	石英閃緑岩	予備調査	
410	凹石	2	0	14.2	8.6	1.7	4.5	759	310	2.5	粗粒輝石安山岩	3-R26(ニ)	
411	凹石	4	2	14.3	7.1	2.0	4.2	748	275	2.7	粗粒輝石安山岩	7-L29　4層	
412	凹石	1	1	14.3	9.7	1.5	6.2	833	432	1.9	粗粒輝石安山岩	5-2住	加曽利E3
413	凹石	2	2	14.5	8.4	1.7	4.2	766	330	2.3	粗粒輝石安山岩	7-19住	焼町1
414	凹石	2	2	14.6	5.8	2.5	3.5	462	175	2.6	粗粒輝石安山岩	1-2住	加曽利E2
415	凹石	5	2	14.6	6.0	2.4	3.8	612	223	2.7	粗粒輝石安山岩	5-A'7　4層5層	
416	凹石	1	1	14.7	6.0	2.5	5.1	647	252	2.6	変質安山岩	1-V5　5層	
417	凹石	1	1	14.8	7.3	2.0	4.8	844	0	0.0	砂岩	8-H'36-6 土壙	
418	凹石	1	1	14.8	8.0	1.9	4.6	890	323	2.8	粗粒輝石安山岩	3-31住	加曽利E3
419	凹石	2	0	14.8	9.4	1.6	6.6	1384	525	2.6	粗粒輝石安山岩	2-57住	
420	凹石	3	2	15.0	7.1	2.1	5.3	731	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-M12	
421	凹石	2	1	15.0	7.6	2.0	5.1	925	347	2.7	石英閃緑岩	6-6住	加曽利E3
422	凹石	1	0	15.1	10.1	1.5	5.1	1193	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-39住　溝中	加曽利E3
423	凹石	2	2	15.2	7.3	2.1	4.2	833	0	0.0	閃緑岩	7-9住	加曽利E2
424	凹石	2	0	15.2	7.4	2.1	5.8	1036	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-S17-A 土壙	
425	凹石	2	2	15.2	7.8	1.9	4.4	907	335	2.7	石英閃緑岩	1-R6　4層	
426	凹石	1	0	15.2	8.3	1.8	5.8	1144	504	2.3	粗粒輝石安山岩	6-45,46住　床直	加曽利E4

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
427	凹石	2	2	15.3	6.6	2.3	4.1	682	266	2.6	粗粒輝石安山岩	6-4住	加曽利E2
428	凹石	2	0	15.3	6.9	2.2	4.5	791	313	2.5	粗粒輝石安山岩	4区	
429	凹石	1	1	15.4	7.0	2.2	3.9	645	0	0.0	石英閃緑岩	6-D'19　5層	
430	凹石	2	2	15.4	9.6	1.6	5.2	1169	0	0.0	石英閃緑岩	2-7住内土壙	
431	凹石	1	0	15.5	9.2	1.7	4.4	1019	370	2.8	粗粒輝石安山岩	2-8住	加曽利E3
432	凹石	1	0	15.6	8.4	1.9	4.0	852	0	0.0	ひん岩	2-7住　溝中	加曽利E3
433	凹石	2	1	15.6	8.5	1.8	4.7	1157	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-6住　床直	加曽利E2
434	凹石	2	1	15.7	5.4	2.9	4.2	565	210	2.7	石英閃緑岩	3-28住　床直	加曽利E2
435	凹石	2	1	15.8	9.2	1.7	6.1	1397	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-36住	加曽利E3
436	凹石	2	1	15.8	9.6	1.6	5.3	1292	0	0.0	溶結凝灰岩	2-36,38住	
437	凹石	2	0	16.1	8.0	2.0	3.9	529	240	2.2	粗粒輝石安山岩	7-B'24-2　5層上	
438	凹石	4	3	16.1	8.2	2.0	5.1	951	374	2.5	粗粒輝石安山岩	3-19住	加曽利E3
439	凹石	2	2	16.2	7.6	2.1	3.3	681	262	2.6	輝緑岩	3-M22-D 土壙	
440	凹石	3	2	16.4	7.2	2.3	5.3	1001	373	2.7	石英閃緑岩	3-20住	加曽利E3
441	凹石	1	1	16.6	8.4	2.0	6.5	1729	0	0.0	石英閃緑岩	1-V6　5層	
442	凹石	3	0	16.9	6.5	2.6	4.7	908	319	2.9	閃緑岩	1-6住	加曽利E2
443	凹石	1	0	17.4	7.1	2.5	3.9	799	294	2.7	石英閃緑岩	2-M20-C 土壙	
444	凹石	2	2	17.5	8.3	2.1	4.7	948	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-6住	加曽利E2
445	凹石	1	0	17.6	8.4	2.1	5.3	1187	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-20住	加曽利E2
446	凹石	2	0	18.1	9.5	1.9	4.8	1214	0	0.0	流紋岩	7-F'21,22　4層	
447	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	3-6住	加曽利E3
448	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	2-9住　床直	加曽利E4
449	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	3-36住	加曽利E2
450	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	変質玄武岩	2-17住	加曽利E3
451	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	7-C'22-G 土壙	
452	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-5住	加曽利E3
453	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	砂岩	3-Q30-A 土壙	
454	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-14住	加曽利E3
455	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	1-K10-1土壙	
456	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	6-B'12-A 土壙	
457	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	1-G8-1土壙	
458	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-31住	加曽利E3
459	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	砂岩	2-5住	加曽利E3
460	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	1-38住	加曽利E3
461	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-6住	加曽利E2
462	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-F'19-C,D 土壙	
463	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-8住	加曽利E3
464	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	3-13住	加曽利E3
465	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	変質安山岩	3-20住	加曽利E3
466	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-24住(欠番)	
467	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	ひん岩	3-29住	堀之内2
468	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-A'11-3土壙	
469	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	1-T7-A 土壙	
470	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	溶結凝灰岩	6-29住	加曽利E3
471	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
472	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	デイサイト	2-7住	加曽利E3
473	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-17住　床直	加曽利E3
474	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	3-24住	三原田
475	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	3-M22-A 土壙	
476	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	1-6住	加曽利E2
477	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	頁岩	4-6住内土壙	
478	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-13住	加曽利E3
479	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-19住	加曽利E3

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
480	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	グラノファイヤー	6-B'20-4 土壙	
481	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	玄武岩	5-8住	加曽利E3
482	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	溶結凝灰岩	1-E5-1 土壙	
483	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	黒色頁岩	3-28住	加曽利E2
484	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-22住	加曽利E3
485	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	輝緑岩	1-S4-B 土壙	
486	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	2-20住　炉中	加曽利E3
487	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	1-20住	加曽利E2
488	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	7-E'31-A 土壙	
489	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-2住	加曽利E2
490	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-5住	加曽利E3
491	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-26住	加曽利E3
492	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-K10-4～8 土壙	
493	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	玄武岩	1-U8-C 土壙	
494	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-8住	加曽利E3
495	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	1-O3-A 土壙	
496	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-K10-4～8 土壙	
497	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-K10-4～8 土壙	
498	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	砂岩	3-26住	加曽利E2
499	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-I'21-1 土壙	
500	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-L8-1 土壙	
501	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-21住	加曽利E2
502	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	凝灰岩質砂岩	1-22住	加曽利E3
503	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-2住	称名寺1
504	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	閃緑岩	5-X8-1 土壙	
505	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	灰色安山岩	3-23住	加曽利E2
506	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	石英閃緑岩	2-L20-C 土壙	
507	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-4住	加曽利E2
508	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-14住	黒浜
509	磨石	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0.0	かこう岩	1-6住	加曽利E2
510	磨石	0	0	0.0	7.6	0.0	4.7	0	0	0.0	石英閃緑岩	7-B'21(ロ) 土壙	
511	磨石	0	0	0.0	8.7	0.0	4.5	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-29住	加曽利E3
512	磨石	0	0	0.0	9.1	0.0	4.5	0	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-20住　床直	三原田
513	磨石	0	0	4.2	6.3	0.7	4.4	572	210	2.7	ひん岩	2-7住	加曽利E3
514	磨石	0	0	5.3	4.3	1.2	3.7	103	0	0.0	石英閃緑岩	1-24住(欠番)	
515	磨石	0	0	5.3	4.5	1.2	3.8	125	0	0.0	砂岩	7-F'21-1 土壙	
516	磨石	0	0	5.6	3.0	1.9	1.9	51	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-I17-H 土壙	
517	磨石	0	0	5.7	5.2	1.1	3.0	137	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-4住	
518	磨石	0	0	6.0	3.9	1.5	3.5	118	0	0.0	砂岩	3-T29-A 土壙	
519	磨石	0	0	6.0	5.7	1.1	4.2	171	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-F'21-1 土壙	
520	磨石	0	0	7.1	6.8	1.0	6.1	372	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-4住	加曽利E2
521	磨石	0	0	7.2	5.9	1.2	3.9	209	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-2住	称名寺1
522	磨石	0	0	7.2	6.2	1.2	3.7	244	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-6住	加曽利E2
523	磨石	0	0	7.2	7.6	0.9	7.2	436	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-1住	加曽利E4
524	磨石	0	0	7.7	6.7	1.1	2.8	227	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-B'10-1 土壙	
525	磨石	0	0	7.9	6.2	1.3	2.8	210	0	0.0	ホルンフェルス	7-10住	三原田
526	磨石	0	0	7.9	7.5	1.1	4.5	382	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-A'15(ニ) 土壙	
527	磨石	0	0	7.9	7.6	1.0	3.5	314	0	0.0	石英閃緑岩	3-29住	堀之内2
528	磨石	0	0	8.0	4.2	1.9	2.3	115	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-58住	加曽利E3
529	磨石	0	0	8.1	6.4	1.3	4.0	320	120	2.7	石英閃緑岩	予備調査	
530	磨石	0	0	8.2	5.8	1.4	3.7	236	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住	加曽利E2
531	磨石	0	0	8.3	6.6	1.3	4.2	319	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-27住	加曽利E3

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
532	磨石	0	0	8.3	7.2	1.2	5.0	449	0	0.0	砂岩	8-9住	三原田
533	磨石	0	0	8.4	8.0	1.1	7.2	635	0	0.0	石英斑岩	2-57住	
534	磨石	0	0	8.5	6.2	1.4	5.2	386	0	0.0	石英閃緑岩	8-C'38-2土壙	
535	磨石	0	0	8.6	6.9	1.2	4.1	384	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-J11-A 土壙	
536	磨石	0	0	8.7	7.7	1.1	4.8	487	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-H15-E 土壙	
537	磨石	0	0	8.8	8.5	1.0	4.2	476	176	2.7	粗粒輝石安山岩	3-?24(ロ)	
538	磨石	0	0	8.9	7.3	1.2	3.7	415	157	2.6	粗粒輝石安山岩	予備調査	
539	磨石	0	0	9.0	6.1	1.5	4.2	315	0	0.0	凝灰岩質砂岩	7-9南土壙	
540	磨石	0	0	9.1	8.1	1.1	7.0	710	0	0.0	ひん岩	5-4住	加曽利E3
541	磨石	0	0	9.2	1.5	6.1	2.2	336	0	0.0	輝緑岩	2-35住	加曽利E4
542	磨石	0	0	9.2	6.8	1.4	2.9	296	0	0.0	粗粒輝石安山岩	1-84住　床直	加曽利E3
543	磨石	0	0	9.2	7.3	1.3	5.1	470	182	2.6	砂岩	2-Q13-A 土壙	
544	磨石	0	0	9.2	7.5	1.2	3.5	365	135	2.7	粗粒輝石安山岩	7-I'31(イ)	
545	磨石	0	0	9.3	8.5	1.1	3.7	475	172	2.8	粗粒輝石安山岩	3-T27	
546	磨石	0	0	9.4	7.2	1.3	7.1	663	0	0.0	石英閃緑岩	3-27住　床直	堀之内2
547	磨石	0	0	9.5	5.8	1.6	2.8	245	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-A'15-23土壙	
548	磨石	0	0	9.6	9.0	1.1	8.2	983	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-27住	加曽利E3
549	磨石	0	0	9.7	6.9	1.4	6.5	588	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-6住	加曽利E4
550	磨石	0	0	9.7	8.0	1.2	4.3	592	221	2.7	石英閃緑岩	4-M35(ハ)　褐色土下部	
551	磨石	0	0	9.8	6.8	1.4	2.7	257	0	0.0	砂岩	7-15住	加曽利E3
552	磨石	0	0	9.8	8.4	1.2	4.8	535	215	2.5	かこう岩	7-6住	加曽利E2
553	磨石	0	0	9.9	8.8	1.1	3.8	470	0	0.0	珪質変質岩	3-N30-D　土壙	
554	磨石	0	0	10.1	5.9	1.7	2.2	226	0	0.0	粗粒輝石安山岩	5-5住	加曽利E3
555	磨石	0	0	10.1	8.5	1.2	5.3	668	241	2.8	粗粒輝石安山岩	2-45,50住　床直	加曽利E3,E2
556	磨石	0	0	10.1	8.7	1.2	4.4	406	0	0.0	粗粒輝石安山岩	4-6住	加曽利E4
557	磨石	0	0	10.3	8.3	1.2	5.3	679	255	2.7	石英閃緑岩	1-P3-4	
558	磨石	0	0	10.4	6.1	1.7	3.2	315	0	0.0	石英閃緑岩	7-E'28-A 土壙	
559	磨石	0	0	10.4	6.7	1.6	2.9	302	113	2.7	ひん岩	3-23住	加曽利E2
560	磨石	0	0	10.4	9.4	1.1	5.5	713	274	2.6	粗粒輝石安山岩	6-14住内土壙	
561	磨石	0	0	10.5	7.8	1.3	3.8	508	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-6住	加曽利E2
562	磨石	0	0	10.5	9.0	1.2	5.6	666	270	2.5	粗粒輝石安山岩	8-A'37-3土壙	
563	磨石	0	0	10.5	10.0	1.1	8.0	1176	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-X13(イ) 土壙	
564	磨石	0	0	10.6	8.6	1.2	5.9	733	0	0.0	砂岩	7-9住	加曽利E2
565	磨石	0	0	10.6	8.6	1.2	5.9	778	295	2.6	石英閃緑岩	3-23住	加曽利E2
566	磨石	0	0	10.7	8.2	1.3	5.5	71	0	0.0	溶結凝灰岩	7-17住	阿玉台2
567	磨石	0	0	10.8	7.7	1.4	3.6	447	163	2.7	変質安山岩	6-35住　床直	加曽利E3
568	磨石	0	0	10.8	8.2	1.3	3.7	510	179	2.9	粗粒輝石安山岩	2区表採	
569	磨石	0	0	10.8	9.4	1.1	5.4	781	305	2.6	石英閃緑岩	6-8住	加曽利E3
570	磨石	0	0	10.9	7.2	1.5	3.9	500	175	2.9	珪質変質岩	1-9住	加曽利E2
571	磨石	0	0	11.0	6.8	1.6	4.1	480	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-36,38住	
572	磨石	0	0	11.0	7.1	1.5	2.6	363	0	0.0	石英閃緑岩	3-8住	加曽利E3
573	磨石	0	0	11.0	7.6	1.4	4.7	597	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-5住	加曽利E2
574	磨石	0	0	11.0	8.1	1.4	4.2	613	221	2.8	粗粒輝石安山岩	2-28住(炉石)	
575	磨石	0	0	11.3	7.3	1.5	3.2	423	160	2.6	石英閃緑岩	1-24住(欠番)	
576	磨石	0	0	11.5	8.6	1.3	4.0	642	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-G'30-B 土壙	
577	磨石	0	0	11.5	10.4	1.1	7.0	878	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-28住	加曽利E3
578	磨石	0	0	11.6	6.5	1.8	5.1	613	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-A'22(ニ) 土壙	
579	磨石	0	0	11.6	6.8	1.7	4.0	491	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-20住	三原田
580	磨石	0	0	11.6	8.0	1.5	4.2	631	236	2.7	粗粒輝石安山岩	5-5住	加曽利E3
581	磨石	0	0	11.7	7.5	1.6	5.0	691	0	0.0	変質安山岩	1-7住	三原田
582	磨石	0	0	11.7	9.7	1.2	6.9	1151	441	2.6	粗粒輝石安山岩	予備調査	
583	磨石	0	0	11.8	8.2	1.4	4.9	651	0	0.0	溶結凝灰岩	2-47住	三原田
584	磨石	0	0	11.8	9.3	1.3	4.5	853	309	2.8	粗粒輝石安山岩	7-E'36	

No.	分類	孔表	孔裏	最大長	最大幅	長/幅	最大厚	重量	体積	比重	石　　質	出　土　地　点	土器型式
585	磨石	0	0	11.9	5.1	2.3	2.2	222	0	0.0	砂岩	3-29住　床直	堀之内2
586	磨石	0	0	11.9	7.5	1.6	4.4	580	213	2.7	粗粒輝石安山岩	3-P26	
587	磨石	0	0	11.9	7.8	1.5	4.1	586	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-13住	加曽利E1
588	磨石	0	0	12.0	8.8	1.4	4.8	790	299	2.6	石英閃緑岩	8-E'36	
589	磨石	0	0	12.0	11.8	1.0	9.7	1887	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-11住　柱穴中	加曽利E3
590	磨石	0	0	12.1	7.5	1.6	3.7	513	190	2.7	粗粒輝石安山岩	1-22住	加曽利E3
591	磨石	0	0	12.1	9.0	1.3	6.1	967	354	2.7	石英閃緑岩	1-5住	加曽利E3
592	磨石	0	0	12.3	7.7	1.6	5.0	699	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-A'14　遺構外	
593	磨石	0	0	12.3	10.0	1.2	9.0	1582	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-D'17-4土壙	
594	磨石	0	0	12.4	8.0	1.6	6.0	933	347	2.7	粗粒輝石安山岩	6-D'17	
595	磨石	0	0	12.4	8.2	1.5	5.2	768	293	2.6	溶結凝灰岩	1-M8-7土壙	
596	磨石	0	0	12.5	8.4	1.5	5.4	848	315	2.7	粗粒輝石安山岩	8-A'37-3土壙	
597	磨石	0	0	12.5	9.2	1.4	4.5	821	323	2.5	粗粒輝石安山岩	8-T41	
598	磨石	0	0	12.6	8.5	1.5	4.0	663	245	2.7	石英閃緑岩	2区　4層	
599	磨石	0	0	12.7	6.8	1.9	4.5	567	216	2.6	粗粒輝石安山岩	3-V25　4層	
600	磨石	0	0	12.7	11.6	1.1	4.6	1074	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-15住	加曽利E3
601	磨石	0	0	12.9	9.0	1.4	3.6	689	0	0.0	石英閃緑岩	3-38住　床直	加曽利E1
602	磨石	0	0	13.0	9.2	1.4	4.4	784	298	2.6	ひん岩	6-14住　床直	三原田
603	磨石	0	0	13.0	9.4	1.4	4.9	814	325	2.5	溶結凝灰岩	6-6住	加曽利E3
604	磨石	0	0	13.2	6.1	2.2	3.0	423	0	0.0	粗粒輝石安山岩	6-28住	加曽利E3
605	磨石	0	0	13.2	6.3	2.1	4.1	477	0	0.0	粗粒輝石安山岩	2-45,50住　床直	加曽利E3,E2
606	磨石	0	0	13.3	6.1	2.2	4.0	526	193	2.7	石英閃緑岩	1-S5-A 土壙	
607	磨石	0	0	13.3	9.5	1.4	3.4	780	287	2.7	粗粒輝石安山岩	不明	
608	磨石	0	0	13.3	9.5	1.4	4.8	984	363	2.7	石英閃緑岩	2-M20-C 土壙	
609	磨石	0	0	13.4	8.7	1.5	6.0	1172	0	0.0	閃緑岩	6-A'11-3土壙	
610	磨石	0	0	13.5	7.5	1.8	4.6	752	0	0.0	ひん岩	1-L8-1土壙	
611	磨石	0	0	13.5	9.8	1.4	3.9	801	0	0.0	粗粒輝石安山岩	8-H'36-2土壙	
612	磨石	0	0	13.6	7.3	1.9	5.4	828	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-7住	加曽利E2
613	磨石	0	0	13.7	7.1	1.9	3.9	705	249	2.8	石英閃緑岩	H19(ニ)	
614	磨石	0	0	14.1	8.6	1.6	6.8	1117	528	2.1	粗粒輝石安山岩	8-U31(イ)	
615	磨石	0	0	14.2	7.3	1.9	6.9	1022	0	0.0	粗粒輝石安山岩	3-L21-D 土壙	
616	磨石	0	0	14.3	7.6	1.9	6.5	1113	0	0.0	石英閃緑岩	3-49住	勝坂2
617	磨石	0	0	14.4	7.1	2.0	4.1	666	0	0.0	溶結凝灰岩	3-31住	加曽利E3
618	磨石	0	0	14.7	7.3	2.0	4.9	871	309	2.8	粗粒輝石安山岩	1-M3　4層	
619	磨石	0	0	14.7	7.8	1.9	4.6	816	320	2.6	溶結凝灰岩	3-41住	加曽利E2
620	磨石	0	0	14.9	9.6	1.6	5.8	1262	0	0.0	溶結凝灰岩	1-1住	
621	磨石	0	0	15.5	5.6	2.8	4.3	621	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-9住	加曽利E2
622	磨石	0	0	15.6	10.8	1.4	5.2	1340	0	0.0	粗粒輝石安山岩	7-H'29-D 土壙	
623	磨石	0	0	15.8	7.8	2.0	5.2	1070	366	2.9	輝緑岩	3-M22-D 土壙	
624	磨石	0	0	16.1	6.3	2.6	4.3	711	261	2.7	変質安山岩	1-K1　5層	
625	磨石	0	0	20.9	7.8	2.7	7.0	1909	0	0.0	石英閃緑岩	1-11	加曽利E2

本稿は平成４年度科学研究費補助金（奨励研究Ｂ）の交付を受けた成果の一部である

群馬県の水田・畠調査遺跡集成

能　登　　健・小　島　敦　子

1．　本表は、昭和56年から平成６年の間に群馬県内で発掘調査された水田・畠遺跡の一覧表である。なお、平成７年調査の遺跡も一部含まれているが、いずれも当該地域で初検出の水田・畠遺跡であるので掲載した。

群馬県内の水田・畠遺跡はこれまで1983年に能登が46遺跡を、1988～1990年に小島が138遺跡を集成し、その一部を1989年に能登が発表している。したがって本表は改訂３版となる。

能登　健　1983　群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題　群馬県史研究第17号
小島敦子　1990　群馬県の水田・畑遺跡一覧表　日本第四紀学会1990年大会巡検ガイドブック
能登　健　1989　古墳時代の火山災害　第四紀研究第２７巻第４号

※一般的には古代・中世のハタケを「畠」で、近世のハタケを「畑」と表記することが多いが、ここでは古代のハタケを集成の中心にしたので「畠」の字を用いた。

2．　本表作成の目的は、農業発達史的視点で水田・畠調査遺跡を分析するためのデータの整理にある。したがって、本表の遺跡は遺跡が所在する市町村の県勢順で配列した。なお、遺跡の所在地は大字にあたる地名までとした。詳細は報告書に拠られたい。

3．　本表に掲載する遺跡は、報告書として公表されたものを原則としたが、報告書が未刊のものについては調査概報および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』に拠った。一部未発表の遺跡については、調査した市町村教育委員会から情報を得たものも含まれている。それについては文献欄に「教委情報」と表記した。

4．　本表に掲載した遺跡は、発掘調査で確認された水田と畠のみに限定し、水田と関わると思われる溝や水路のみの遺跡については割愛した。ただし、具体的な水田の遺構を確認した遺跡ではないが、プラントオパール（p.o.）分析で水田を認知した遺跡、水田耕作に関連する重要な遺構と考えられる溜井については掲載した。また中・近世の遺構については、年代に不明な部分が多く、年代幅が現代にまでおよぶ可能性のあるものもあると思われるので割愛した。

5．　遺跡名は報告書掲載の名称を原則とし、同地点の継続調査や別報告のある遺跡については、遺跡単位にまとめるように努めた。複数の遺跡が遺跡群としてまとめらている遺跡もあるが、本表では報告された最小単位の遺跡名を採用した。なお、藤岡市の水田遺構の一部は、調査後につけられた総称「○○地区水田址遺跡」で記載し、調査単位の遺跡名は省略した。

6．　年代の指標は群馬県の発掘調査の鍵層を用い、下表に示した。なお、報告書にHr-I・Hr-S（早田1989）と記載されているものがあるが、Hr-FP・Hr-FAと同一テフラ（町田・新井1992）であることから、本表作成にあたってはそれぞれ後者に読みかえている。

鍵層の名称	記号	給源	年代	典拠文献
浅間Aテフラ	As-A	浅間山	1873(天明3)年	町田・新井1992
粕川テフラ	As-Kk	浅間山	1128(大治3)年	粕川村小島純一氏による
浅間Bテフラ	As-B	浅間山	1108(天仁1)年	町田・新井1992
弘仁九年泥流層		赤城山麓	818(弘仁9)年	能登ほか1990
榛名二ツ岳伊香保テフラ	Hr-FP	榛名山	6世紀中葉	町田・新井1992
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA	榛名山	6世紀初頭	町田・新井1992
榛名有馬火山灰	Hr-AA	榛名山	5～6世紀初頭	町田ほか1984
浅間Cテフラ	As-C	浅間山	4世紀中葉	町田・新井1992

早田勉1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」第四紀研究第27巻第4号
町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス〔日本とその周辺〕』
能登健・早田勉・内田憲治1990「弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析」信濃第42巻第10号
町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄1984「テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』

7．検出された水田・畠のうち、鍵層直下と判定された水田は◆マーク、畠は●マークとした。ただし年代の不確定な遺構あるいは鍵層に直接覆われていない遺構については、水田を◇マーク、畠を○マークとした。この◇・○マークは鍵層と直接関連がなく、報告書による年代観も相当の幅があると思われる。また、？マークは報告書に「不確実である。」との記載があるものと、報告書の記述に不明な点があるものに付した。ともに、その詳細については直接報告書を参照されたい。

8．本表の各鍵層下の罫線は鍵層の位置である。As-B罫線の右側に接した位置の◆●マークはAs-B直下を示し、As-B罫線の左に接した◇○マークはAs-B上層での確認を示す。以下他の鍵層も同様にマークを配置してある。なお罫線間に位置した◇○マークは鍵層から離れて検出されたことを示し、必ずしも両鍵層の中間的年代を示しているものではない。詳細については報告書を確認されたい。

9．本表作成にあたっては、下記の方々のご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

前原　豊(前橋市教育委員会)　神戸聖語・村井田雅明・関口　修・綿貫鋭次郎(高崎市教育委員会)　増田　修(桐生市教育委員会)　金沢　誠(太田市教育委員会)　荒木勇次(渋川市教育委員会)　志村　哲(藤岡市教育委員会)　富澤敏弘(北橘村教育委員会)　山下歳信(大胡町教育委員会)　小島純一(粕川村教育委員会)　内田憲治・加部二生(新里村教育委員会)　大橋一智(榛名町教育委員会)　田口一郎(箕郷町教育委員会)　若狭徹・清水　豊(群馬町教育委員会)　石井克巳(子持村教育委員会)　子安和順(甘楽町教育委員会)　田口　修(松井田町教育委員会)　福田義治(中之条町歴史民俗資料館)　三宅敦気(月夜野町教育委員会)　加藤　生・石北直樹(昭和村教育委員会)　横山　巧(佐波東村教育委員会)　小田澤佳之・中里正憲(玉村町教育委員会)　須永光一(尾島町教育委員会)　小宮俊久(新田町教育委員会)

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
1	櫛島川端	前橋市櫛島町	◇	◆ ○		◆ ○	◆●◇○	◆●	11・12・13・14
2	元総社稲葉	前橋市元総社町		◆					97
3	元総社寺田	前橋市元総社町					◆	◆	52
4	元総社明神	前橋市元総社町		◇○？		○	◆●		82・84・85
5	国分寺中間地域	前橋市元総社町					●		24・27・37・47
6	赤鳥	前橋市古市町				○？			75
7	後閑II	前橋市後閑町		◆					74
8	公田東	前橋市公田町・上佐鳥町		◆	◇○	○	◆	◆	14
9	勝呂	前橋市江田町		◆					79
10	荒砥下押切II	前橋市荒口町		◆					2
11	荒砥宮田	前橋市荒口町		◆ ○	◆				3
12	荒砥諏訪西	前橋市荒口町		◆				●	3
13	荒砥前田	前橋市荒口町		◆ ○	◆				1・258
14	女堀荒口前原・前田	前橋市荒口町	○	◆					23
15	荒砥荒子	前橋市荒子町		◆？					3
16	荒砥中屋敷II	前橋市荒子町		◆					2
17	柳久保遺跡群	前橋市荒子町・鶴が谷町		◆					81・89・91
18	今井道上	前橋市今井町	◆粕川テフラ下p.o.			◇	◆p.o.		60
19	公田池尻	前橋市上佐鳥町		◆		◆	◇		14
20	中原遺跡群	前橋市上増田町		●	◆●			●	94・95・86・87
21	西善鍛冶屋	前橋市西善町				○			98
22	梅木	前橋市西大室町		◆●					90
23	青柳寄居	前橋市青柳町	◇FP・FA起源洪水層下						88
24	地蔵前	前橋市川曲町		◆					83
25	柳橋	前橋市川曲町		◆					87
26	前山	前橋市泉沢町		◆p.o.					77
27	前箱田	前橋市前箱田町		◆					73
28	箱田境	前橋市前箱田町		◆					76
29	西三並	前橋市中内町		●					92
30	鳥羽	前橋市鳥羽町		●◇			○	●	40・49
31	前田	前橋市東善町		◆					93
32	女堀東大室地区	前橋市東大室町	○						23
33	荒砥洗橋(二之宮洗橋)	前橋市二之宮町		◆◇					32・6
34	荒砥大日塚	前橋市二之宮町		◆					58
35	荒砥天之宮	前橋市二之宮町		◆◎		◎		●	25
36	荒砥島原	前橋市二之宮町		◆					19
37	二之宮宮下西	前橋市二之宮町		◆	◇ ◇		◇	◆	6
38	二之宮宮下東	前橋市二之宮町		◆	◇ ◇	◇ ◇			7
39	二之宮宮東	前橋市二之宮町		◆					62
40	二之宮千足	前橋市二之宮町	◎	◆ ◇	◇◎	◇◇◇	◆ ◇	◆	50
41	二之宮谷地	前橋市二之宮町		◆		◇◎			63
42	荒砥上ノ坊	前橋市二之宮町・荒子町	○					●	70
43	五反田	前橋市箱田町		◆					80
44	五反田II	前橋市箱田町		◆					96
45	村前	前橋市箱田町	○	◆					78
46	箱田古市前	前橋市箱田町					◆●	◆	12
47	女堀飯土井地区	前橋市飯土井町	○						23
48	飯土井上組	前橋市飯土井町			○時期不明３面				6
49	野中天神	前橋市野中町・上長磯町		◆○					71
50	中大門	前橋市六供町		◆					72
51	笂井八日市	前橋市笂井町・小島田町		◆		◇p.o.	◆p.o.		56

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
52	田端	高崎市阿久津町			◇古墳時代と平安時代の住居の間				30
53	井野屋敷前	高崎市井野町		◆					161
54	井野天神前	高崎市井野町		◆					161
55	井野嶋分	高崎市井野町		◆					173・180
56	井野矢ノ上	高崎市井野町		◆					200
57	下佐野遺跡群	高崎市下佐野町		◆					150
58	下佐野	高崎市下佐野町	●						31
59	大八木東谷	高崎市下小鳥町		◆?					161・180
60	大八木富士廻	高崎市下小鳥町					◆		150
61	下大類芹沢	高崎市下大類町		◆?					173
62	下中居条里	高崎市下中居町・矢中町	●	◆				◆	161・186・12・13・14
63	下之城	高崎市下之城町		◆					15
64	下之城村西	高崎市下之城町		◆?					177・180
65	下之城村前	高崎市下之城町		◆					173・177・180
66	下之城村東	高崎市下之城町		◆					187・188
67	下之城村北II	高崎市下之城町		◆					173
68	貝沢井野前	高崎市貝沢町		◆?					173・180
69	貝沢細井	高崎市貝沢町		◆?					159・180
70	貝沢前沖	高崎市貝沢町		◆					159
71	貝沢萩塚	高崎市貝沢町		◆					173
72	貝沢北	高崎市貝沢町		◆					171
73	一丁田	高崎市楽間町		◆					157
74	榛名社西	高崎市楽間町		◆					157
75	水口替戸・石田	高崎市楽間町		◆					149
76	中屋敷西	高崎市楽間町		◆					122・132
77	殿田	高崎市楽間町		◆					122
78	舞台 I	高崎市楽間町		◆					122
79	舞台 II	高崎市楽間町		◆					127
80	舞台III	高崎市楽間町		◆					135
81	中屋敷II	高崎市楽間町・行力町		◆					144
82	岩押町 I	高崎市岩押町		◆					197
83	菊地	高崎市菊地町		◆					114・117
84	上野前・大明神	高崎市菊地町		◆					130
85	上野前II・大明神II・五反田 I	高崎市菊地町		◆					140
86	石神・五反田II	高崎市菊地町		◆					146
87	当貝戸・棗原	高崎市菊地町		◆●					121
88	京目作道	高崎市京目町		◆					159・203
89	京目不動西	高崎市京目町		◆					177
90	元島名瓦井	高崎市元島名町		◆					202
91	元島名諏訪北	高崎市元島名町		◆					173
92	江木遺跡群	高崎市江木町		◆?					171・173・177・180
93	行力春名社	高崎市行力町		◆					59
94	榛名社	高崎市行力町		◆					167
95	中屋敷 I	高崎市行力町		◆					135
96	高関遺跡群	高崎市高関町		◆?					171・173・177・180
97	高関岡久保	高崎市高関町		◆					158
98	高関村前	高崎市高関町				○	○		182
99	高関村前II	高崎市高関町		◆					182
100	高関塚田	高崎市高関町		◆					173
101	高関北沖	高崎市高関町		◆?					173・180
102	高松町第一駐車場	高崎市高松町		◆					161

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
103	山名清水口	高崎市山名町		◆?					173・180
104	柴崎・南大類遺跡群	高崎市柴崎町		◆					176
105	柴崎熊ノ前	高崎市柴崎町		◆?					169・180
106	新堀・根際・吹手西A・富士塚B	高崎市柴崎町		◆					145
107	西浦・吹手西	高崎市柴崎町		◆					172
108	西沖・柳原・吹手西B	高崎市柴崎町		◆					151
109	村間・富士塚前A	高崎市柴崎町		◆					129
110	殿谷戸・旭・富士塚・隼人・吹手・峰岸	高崎市柴崎町		◆					160
111	東原・富士塚・富士塚前B	高崎市柴崎町		◆					139
112	住吉町Ⅰ	高崎市住吉町		◆					173
113	山鳥	高崎市宿大類町		◆					133
114	宿大類情報団地	高崎市宿大類町		◆					180
115	宿大類塚越	高崎市宿大類町		◆					177
116	村北・矢島前・村東	高崎市宿大類町		◆					138
117	天神久保	高崎市宿大類町		◆					141
118	天田	高崎市宿大類町		◆					124・128
119	万相寺	高崎市宿大類町		◆					142・177
120	小八木	高崎市小八木町		◆				◆	101・107
121	小八木韮貝戸	高崎市小八木町		◆					113
122	小八木薬研寺	高崎市小八木町		◆?					177・180
123	昭和町Ⅰ	高崎市昭和町		◆					193
124	鞘町	高崎市鞘町		◆?					177・180
125	上佐野県営住宅	高崎市上佐野町		◆					5
126	上佐野樋越	高崎市上佐野町	●	◆					14
127	上小塙遺跡群	高崎市上小塙町		◆					169・171・180
128	上小塙稲荷	高崎市上小塙町		◆?					161・180
129	上小塙五反田	高崎市上小塙町		◆					169
130	上小塙村東	高崎市上小塙町		◆			◆	◆	14
131	上大類野地田	高崎市上大類町		◆ ◇					201
132	上滝斎田北	高崎市上滝町	◆	◆					192
133	上中居遺跡群	高崎市上中居町		◆?					159・180
134	上中居荒神	高崎市上中居町		◆?					161・180
135	上中居咲地蔵	高崎市上中居町		◆					169
136	上中居西屋敷	高崎市上中居町		◆?					196
137	上中居前屋敷	高崎市上中居町		◆?					171・177・180
138	上中居辻薬師	高崎市上中居町		◆?					165・180
139	上中居島薬師	高崎市上中居町		◆?					177・180
140	上並榎下松	高崎市上並榎町		◆			◆	◆	170・175
141	上並榎御料所	高崎市上並榎町		◆			◆	◆	168
142	上並榎仲沖	高崎市上並榎町		◆			◆		171
143	引間	高崎市上豊岡町		◆●					99
144	引間Ⅲ	高崎市上豊岡町		◆					174
145	上豊岡遺跡群	高崎市上豊岡町		◆					169
146	西島遺跡群Ⅱ	高崎市新保町		◆				◆	136
147	西島遺跡群Ⅳ(新保地区)	高崎市新保町					◆		148
148	藤塚遺跡(西島遺跡群Ⅰ)	高崎市新保町		◆					126
149	新保	高崎市新保町					◆		131
150	新保田中	高崎市新保田中町		◆?			◇		159・180
151	新保田中村前	高崎市新保田中町		◆●		○	◆○ ○	◆	38・119
152	正観寺	高崎市正観寺町		◆					106・112
153	西横手遺跡群	高崎市西横手町	○	◆			◆		162・166

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
154	石原小祝	高崎市石原町		◆?					173・177・180
155	石原東半田	高崎市石原町		◆					177
156	石原葭田	高崎市石原町		◆p.o.					173
157	倉賀野下稲荷前	高崎市倉賀野町		◆?					171・180
158	倉賀野下天神	高崎市倉賀野町		◆					199
159	倉賀野上稲荷前・三坊木	高崎市倉賀野町		◆					13・14
160	熊野堂	高崎市大八木町	○			●	◆●◎	●◆	21・36・22
161	大八木・下小鳥	高崎市大八木町		◆					42
162	大八木屋敷	高崎市大八木町				◇	◆ ◇	◆	67
163	融通寺	高崎市大八木町		◆		○?	◆	◇	45・12
164	筑縄遺跡群	高崎市筑縄町		◆?					159・180
165	吹屋	高崎市中尾町		◆?					17
166	中尾村前	高崎市中尾町		◆			●	◆	169・191
167	中尾村前IV	高崎市中尾町		◆			●	◆ ◎弥生	171
168	西島遺跡群III	高崎市島野町		◆					143
169	島野遺跡群	高崎市島野町		◆					180
170	島野神明	高崎市島野町		●					174
171	島野村東	高崎市島野町		◆					155
172	島野大岩	高崎市島野町		◆					169
173	島野中済	高崎市島野町		◆					159
174	島野中町	高崎市島野町		◆					173
175	東中里	高崎市東中里町		◆	◇				8
176	東町	高崎市東町		◆					164
177	東町II	高崎市東町		◆					173・174
178	東町III	高崎市東町	◆	◆	◇			◆	178
179	東町IV	高崎市東町		◆	◇				184
180	南新波大道上	高崎市南新波町		◆					173・174
181	日光町	高崎市日光町		◆					171
182	日高	高崎市日高町		◆				◆	18・103・108・111・119・189
183	日高村前	高崎市日高町		◆?					177・180
184	日高村東	高崎市日高町		◆					159
185	日高中堀添	高崎市日高町		◆					169
186	萩原団地	高崎市萩原町	●	◆		◆	◆		194
187	稲荷	高崎市八幡原町	●	◆					190
188	大鼻	高崎市八幡原町		◆					190
189	東金井II	高崎市飯塚町	◆	◆					195
190	飯塚遺跡群	高崎市飯塚町		◆?					161・173・180
191	飯塚慈音寺	高崎市飯塚町		◆					161・177・180
192	飯塚十二前	高崎市飯塚町		◆					159
193	飯塚新田西・雁田	高崎市飯塚町		◆			◆		180
194	飯塚西金井	高崎市飯塚町		◆					198
195	飯塚村東	高崎市飯塚町		◆?					173・180
196	飯塚大道東	高崎市飯塚町		◆?					173・180
197	飯塚東金井	高崎市飯塚町		◆					175
198	飯塚猟屋敷	高崎市飯塚町		◆?					173・180
199	芦田貝戸	高崎市浜川町		◆			◆●	◆	102・110
200	浜川芦田貝戸III	高崎市浜川町		◆		◆	◆●	◆	181
201	御布呂	高崎市浜川町		◆		◆	◆●	◆	11・13・109
202	高田・館	高崎市浜川町		◆					163
203	寺ノ内	高崎市浜川町		◆					105
204	谷津・道場	高崎市浜川町		◆					153・163

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
205	長町・踏分	高崎市浜川町		◆					163
206	浜川館	高崎市浜川町		◆		◆	◆	◆	13
207	浜川高田屋敷	高崎市浜川町		◆		◆	◆	◆	13
208	浜川長町	高崎市浜川町		◆			◆●	◆	13
209	餅井貝戸	高崎市浜川町		◆		●?			14
210	矢島	高崎市浜川町		◆					100
211	並榎	高崎市並榎町		◆					159
212	並榎北	高崎市並榎町		◆			◆	◆ ◇	154
213	並榎北II・III・IV・V	高崎市並榎町		◆			◆	◆ ◇	185
214	並榎北遺跡群	高崎市並榎町		◆			◆		161
215	片岡	高崎市片岡町		◆					177
216	江原	高崎市北新波町		◆					132
217	北新波	高崎市北新波町		◆					118
218	六反田	高崎市北新波町		◆					144
219	北双葉町	高崎市北双葉町		◆					173
220	問屋町西	高崎市問屋町		◆			◆		171
221	下村北・砂内	高崎市矢中町		◆					147
222	柴崎前	高崎市矢中町		◆					131
223	村北A	高崎市矢中町		◆					123
224	村北B	高崎市矢中町		◆					131
225	天王前	高崎市矢中町		◆					115・120・123
226	宝昌寺裏	高崎市矢中町		◆					125
227	矢中村前	高崎市矢中町		◆?					169・180
228	矢中村東	高崎市矢中町		◆					134
229	矢中村東B	高崎市矢中町		◆					137
230	矢中村東C	高崎市矢中町		◆					152
231	矢中村北C	高崎市矢中町		◆?					180・204
232	矢島竹ノ内	高崎市矢島町		◆					156
233	緑町遺跡群	高崎市緑町		◆?					159・169・173・180
234	和田多中	高崎市和田多中町		◆					161
235	三丁免	桐生市広沢町		◆					6
236	波志江今宮	伊勢崎市波志江町		◆					5
237	波志江中峰岸	伊勢崎市波志江町		◆?			◆?		5
238	波志江六反田	伊勢崎市波志江町		◆					46
239	西長岡南	太田市西長岡		◆					14
240	二の宮	太田市矢田堀		◆					205
241	下川田平井	沼田市下川田町		◆ ◇		◆			51
242	行幸田畑中	渋川市行幸田					●		214
243	行幸田畑中B	渋川市行幸田					●		14
244	行幸田畑中C	渋川市行幸田					●		13
245	坂之下	渋川市坂下					◆		208
246	石原東	渋川市石原				◆			211・212
247	中筋	渋川市中筋					◆●		207・209・210 211・213・216
248	中村	渋川市中村	◆●			◆	◆●		206
249	中村久保田	渋川市中村	◆						10
250	中村日焼田	渋川市中村	◆						212
251	八木原沖田III	渋川市八木原				◆			217
252	八木原沖田IV	渋川市八木原				◆			215
253	八木原沖田VI	渋川市八木原				◆			218
254	有馬条里	渋川市八木原				◆	●	●	35
255	有馬	渋川市有馬・八木原					●●AA下	●	41

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
256	神流地区水田址	藤岡市岡之郷		◆					227
257	小野地区水田址	藤岡市小野ほか		◆●◇	○				219・220・221・222・224・230・231・232・233・236・238・241
258	藤岡東部地区水田址	藤岡市小林ほか	◆●	◆					228・237・234
259	上戸塚正上寺	藤岡市上戸塚		◆p.o.					54
260	滝前	藤岡市中大塚		●					229
261	滝前C	藤岡市中大塚	○						242
262	中大塚鎌倉	藤岡市中大塚		◆●					231・233
263	中大塚鎌倉B	藤岡市中大塚		●					240
264	東平井土井下	藤岡市東平井		◆					64
265	藤岡平地区水田址	藤岡市東平井		◆◎					235・239
266	山間	藤岡市藤岡		◆					243
267	白石根岸	藤岡市白石		◆					61
268	稲荷屋敷	藤岡市本動堂		●					236
269	道上III	藤岡市矢場		◆					238
270	沖II	藤岡市立石		○					225
271	緑埜地区遺跡群	藤岡市緑埜		◆●					10
272	緑埜地区水田址	藤岡市緑埜		◆●◎					223・226
273	下高瀬上之原	富岡市下高瀬		◎					57
274	小塚	富岡市黒川		○					244
275	中沢平賀界戸	富岡市中沢		◆					9
276	田篠上平	富岡市田篠		◆					29
277	下高瀬前田	富岡市内匠・下高瀬	●						69
278	内匠日向周地	富岡市内匠・下高瀬	●　◇	◆　◎					69
279	大島田	安中市安中	◆p.o.						250
280	池尻	安中市安中		●					247
281	田中田・久保田	安中市磯部		◆					249
282	井ノ尻	安中市下後閑		◆					251
283	三反田	安中市下後閑		◆					246
284	山王前	安中市下後閑		◆					251
285	宿路	安中市下後閑		◆					251
286	如来堂	安中市下後閑		◆					246
287	広川	安中市後閑		◆					248
288	深町	安中市後閑		◆					248
289	磯部城址	安中市鷺宮	●						6
290	落合	安中市鷺宮		◎					245
291	下沖・中沖	安中市小俣	◆	◆					13
292	鍛冶屋	安中市上後閑・中後閑		◆					251
293	中秋間中島	安中市中秋間		◆					68
294	中宿在家	安中市中宿	●	◆					14
295	東上秋間笹田	安中市東上秋間	◆						68
296	東上秋間神水	安中市東上秋間	◆?						68
297	田ノ保	北橘村八崎				◆	◆		13・14
298	宮田	赤城村宮田				◆			312・313
299	中宮関	大胡町大胡			◆				10
300	一日市関後	粕川村一日市						◆	252
301	間ノ谷	粕川村女渕		◆p.o.			◆p.o.		10
302	長岡	粕川村深津		●					253
303	三ケ尻西	粕川村深津		◆				◆	12・13
304	久留美田	新里村山上			◆●				11
305	蕨沢	新里村小林			◆				255

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
306	石山西	新里村小林		◆					12
307	新宮II	新里村新宮		◆					4
308	広間地	新里村新川		◆	◆p.o.				村教委情報
309	新川前田A	新里村新川		◆					13
310	屋知川	新里村大久保			◆				255
311	原	新里村大久保			◆				5
312	砂田	新里村武井			◆				255
313	峯岸	新里村武井		◆◎					254
314	峯岸IV	新里村武井		◆					12
315	高浜向原	榛名町高浜		◆				◆	13
316	高浜広神	榛名町高浜		◆●					13・14
317	神戸岩下	榛名町高浜		◆				◆	13・14
318	根岸	榛名町中里見		◆					町教委情報
319	泉福寺古墳群	榛名町中里見		◆					14
320	中川	榛名町中里見		◆●				◆	14
321	中里見中川	榛名町中里見		◆				◆◇	12
322	白岩民部	榛名町白岩		◆					13
323	下芝・原	箕郷町下芝		◆					256
324	下芝五反田 I	箕郷町下芝	◇	◆		○	●		13・14
325	下芝五反田 II	箕郷町下芝			◇	○●	●	●	13・14
326	下芝五反田III	箕郷町下芝		●?					13
327	下芝五反田IV	箕郷町下芝	○		○◇				13
328	下芝清水	箕郷町下芝					●		13
329	月蔵田	箕郷町下芝		◆					町教育情報
330	五反田	箕郷町下芝		◆			●○○		14
331	谷ツ	箕郷町下芝					○○○	●	13・町教委情報
332	万行	箕郷町下芝					●		町教委情報
333	海行A	箕郷町生原				○			257
334	生原・飯盛	箕郷町生原		◆					2
335	和田山古墳群	箕郷町和田山		●			●		12・14
336	井出地区遺跡群	群馬町井出		◆			◆	◆p.o.	272
337	西下井出	群馬町井出					◆	◆	11・13
338	同道	群馬町井出		◆		◆	◆	◆	20
339	明光寺	群馬町井出		●		○			14
340	井出村東	群馬町井出		◆			●		278
341	小池	群馬町引間					●		271
342	諏訪西	群馬町引間					●		274
343	金古北十三町	群馬町金古					●		275
344	庚申	群馬町金古					●		277
345	桁街道II	群馬町三ツ寺				○			14
346	三ツ寺 I	群馬町三ツ寺	●	◆				●	26
347	三ツ寺II	群馬町三ツ寺		◆			●		43
348	中林	群馬町三ツ寺		◆					260
349	堤上	群馬町三ツ寺		●					276
350	八幡街道	群馬町三ツ寺				○			14
351	西国分 I	群馬町西国分		●			●		266
352	西国分II	群馬町西国分					●		269
353	西国分新田	群馬町西国分		◆			●		14
354	寺屋敷 I・蓋	群馬町足門					●	●	270
355	足門森下	群馬町足門					●		13
356	中泉	群馬町中泉		◆					259

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
357	保渡田II	群馬町中里		◆					258
358	西三社免	群馬町棟高					●		268
359	棟高平石	群馬町棟高					●		13
360	南寝保窪	群馬町棟高					●		13
361	権現原 I	群馬町福島					●		273
362	権現原II	群馬町福島					●		273
363	西浦北	群馬町福島					●		267
364	西浦北II	群馬町福島						●	273
365	福島	群馬町福島		◆					263
366	保渡田III	群馬町保渡田		◆		◆?			261
367	保渡田IV	群馬町保渡田		◆					262
368	保渡田皿掛	群馬町保渡田		◆					265
369	北原	群馬町北原				◆			264
370	北原北下り	群馬町北原				◆●			町教委情報
371	冷水村東	群馬町冷水				○	◆●	○	14
372	吹屋犬子塚	子持村吹屋				●	◆		11・12・13
373	吹屋中原	子持村吹屋				●			12・13
374	館野	子持村中郷				●			8・313
375	黒井峯	子持村中郷				◆●			279
376	西組	子持村中郷				◆●			5
377	池田沢東	子持村中郷				●			7
378	中組	子持村中郷				●			8
379	田尻	子持村中郷				●			11・12・13・14
380	八幡神社	子持村中郷				●			11
381	白井丸岩	子持村白井				●			12・13
382	白井十二ノ下	子持村白井				●			11
383	白井大宮	子持村白井				●			55
384	白井南中道	子持村白井				●			11・12・13
385	白井二位屋	子持村白井				●			11
386	白井北中道	子持村白井				●	●		11・12・13・14
387	押手	子持村北牧				●			280
388	相ノ田	子持村北牧				◆			14
389	北牧遺跡群	子持村北牧				●			7・8・10
390	大久保B	吉岡町大久保		●					34
391	平石	吉岡町上野田					●		281
392	岩井地内	吉井町岩井	◆						284
393	黒熊八幡	吉井町黒熊		◆					9
394	下山	吉井町真庭	●						283
395	神保下條	吉井町神保	◆●	◆?					48・284
396	多比良追部野	吉井町多比良	◆	◆					10
397	長根羽田倉	吉井町長根・神保	●	◆					39
398	道六神	吉井町本郷		◆?					282
399	行沢大竹	妙義町行沢		●					316
400	甘楽条里	甘楽町金井	●◇?	◆					285・286・287
401	天引向原	甘楽町天引	◆●	◆p.o.●					10・11
402	白倉下原	甘楽町白倉	●						10
403	福島駒形	甘楽町福島	●						14
404	下増田長久保	松井田町下増田	●						町教委情報
405	下増田百石	松井田町下増田	●	◇p.o.					13
406	高梨子碓貝戸	松井田町高梨子		●					13
407	国衙遺跡群	松井田町国衙		●					289

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
408	国衙森浦朝日	松井田町国衙	●	●					4
409	松井田城跡	松井田町新井		●					6
410	新堀陣場	松井田町新堀		◆					11
411	松井田工業団地	松井田町人見		◆					288
412	川端	中之条町伊勢町		●					町教委情報
413	天神	中之条町伊勢町					◆		314
414	七日市	中之条町横尾					◆		290・291
415	小塚	中之条町横尾					◆		291
416	中沢	中之条町横尾					◆		291
417	善通寺前	吾妻町原町		◆					292
418	長野原尾坂	長野原町長野原	●						14
419	上津地区遺跡群	月夜野町上津		◇○奈良・平安時代？					10
420	糸井太夫	昭和村糸井				◆			13・村教委情報
421	川額軍原II	昭和村川額				◆			293
422	五目牛清水田	赤堀町五目牛		◆	◇◇○◇	◇○◇○	◇◇◇◇	◇	53
423	三室間ノ谷	佐波郡東村東小保方		◆					44
424	八寸大道上	佐波郡東村東小保方				○？			33
425	寺東	佐波群東村西小保方		◆					294
426	三ツ木皿沼	境町・新田町・尾島町		○					13
427	赤城II	玉村町宇貫		○					302
428	八街南圃	玉村町下新田		◆					8
429	布留坂	玉村町下新田	◆	◆					13
430	利根添	玉村町下之宮	●						10
431	蟹沢II	玉村町角渕	○？						299
432	蟹沢III	玉村町角渕		◆？					300
433	角渕城II	玉村町角渕		◆					10
434	若王子	玉村町角渕	●	◆					12・13
435	天神下	玉村町角渕		◆					10
436	中袋	玉村町上新田		◆					9
437	天神巡II	玉村町上新田		◆					12
438	南東耕地	玉村町上新田		◆					10
439	蛭堀東	玉村町上新田		◆					12
440	曲田II	玉村町上之手		◆					10
441	上之手八王子	玉村町上之手		◆					296
442	上飯島芝根	玉村町上飯島		◆					13
443	上飯島芝根II	玉村町上飯島		◆					14
445	北小路	玉村町上飯島		◆					14
446	金免	玉村町上福島		◆					295
447	尾柄町	玉村町上福島		◆					298
448	三境	玉村町上茂木		◆					13
449	三境II	玉村町上茂木		◆					14
450	十王堂	玉村町上茂木		◆					10
451	十王堂II	玉村町上茂木		◆					10
452	神明	玉村町上茂木		◆					6
453	滝川南	玉村町上茂木		◆					7
454	平塚堰北	玉村町川井	◆						304
455	前通	玉村町藤川		◆					10
456	藤川前	玉村町藤川		◆					303
457	稲荷	玉村町八幡原		◆					10
458	赤塚	玉村町八幡原		◆					9
459	八幡原赤塚II	玉村町八幡原		◆					11

	遺　跡　名	所　在　地	As-A	As-B	弘仁泥流	Hr-FP	Hr-FA	As-C	文　献
460	深町	玉村町板井		◆					8・13
461	天神前	玉村町板井	●	◆					11
462	天神前II	玉村町板井	●	◆					14
463	八反田	玉村町板井		◆					8
464	往来	玉村町飯倉	●						14
465	小泉大塚越	玉村町飯倉	●	◆p.o.					301
466	神人村II	玉村町樋越		◆					297
467	屋敷	玉村町福島		◆					14
468	福島稲荷木	玉村町福島		◆					11
469	福島稲荷木III	玉村町福島		◆					13
470	柄田添	玉村町福島	◆●	◆					315
471	阿久津宮内	尾島町阿久津				●			5
472	安養寺森西	尾島町安養寺				●			7・305
473	安養寺森南	尾島町安養寺				●			12
474	小角田	尾島町小角田		◆	●				8
475	歌舞伎	尾島町世良田		◆					16
476	小角田前 I	尾島町世良田		○	○				66
477	世良田諏訪下	尾島町世良田		◇	◆●				306
478	尾島工業団地	尾島町世良田	◆		●				町教委情報
479	大館馬場	尾島町大館				●		○	7・305
480	粕川新堀下	尾島町粕川			●				14
481	下田中川久保	新田町下田中		○					65
482	下田中中道	新田町下田中			●?				65
483	上野井II	新田町村田		◆p.o.					308
484	一本杉	新田町村田・小金井		◆					307
485	花園B	新田町中江田				◎			309
486	藤川堰	邑楽町藤川		◇					310

文献No.	刊　行　者	書　名	発行年
1	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 1	1982
2	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 2	1983
3	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 3	1984
4	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 4	1985
5	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 5	1986
6	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 6	1987
7	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 7	1988
8	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 8	1989
9	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報 9	1990
10	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報10	1991
11	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報11	1992
12	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報12	1993
13	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報13	1994
14	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報14	1995
15	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下之城条里遺構の調査	1981
16	群馬県埋蔵文化財調査事業団	歌舞伎遺跡	1982
17	群馬県埋蔵文化財調査事業団	元島名ｂ・吹屋遺跡	1982
18	群馬県埋蔵文化財調査事業団	日高遺跡	1982
19	群馬県埋蔵文化財調査事業団	荒砥島原遺跡	1983
20	群馬県埋蔵文化財調査事業団	同道遺跡	1983
21	群馬県埋蔵文化財調査事業団	熊野堂遺跡(1)	1984
22	群馬県埋蔵文化財調査事業団	熊野堂遺跡第III地区・雨壷遺跡	1984
23	群馬県埋蔵文化財調査事業団	女堀	1984
24	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)	1986
25	群馬県埋蔵文化財調査事業団	荒砥天之宮遺跡	1988
26	群馬県埋蔵文化財調査事業団	三ツ寺遺跡Ｉ	1988
27	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)	1988
28	群馬県埋蔵文化財調査事業団	新保遺跡II	1988
29	群馬県埋蔵文化財調査事業団	田篠上平遺跡	1988
30	群馬県埋蔵文化財調査事業団	田端遺跡	1988
31	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下佐野遺跡	1989
32	群馬県埋蔵文化財調査事業団	荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡	1989
33	群馬県埋蔵文化財調査事業団	八寸大道上遺跡	1989
34	群馬県埋蔵文化財調査事業団	有馬遺跡Ｉ・大久保Ｂ遺跡	1989
35	群馬県埋蔵文化財調査事業団	有馬条里遺跡Ｉ	1989
36	群馬県埋蔵文化財調査事業団	熊野堂遺跡(2)	1990
37	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)	1990
38	群馬県埋蔵文化財調査事業団	新保田中村前遺跡Ｉ	1990
39	群馬県埋蔵文化財調査事業団	長根羽田倉遺跡	1990
40	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鳥羽遺跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区	1990
41	群馬県埋蔵文化財調査事業団	有馬遺跡II	1990

42	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下小鳥遺跡	1991
43	群馬県埋蔵文化財調査事業団	三ツ寺遺跡II	1991
44	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上淵名裏神谷遺跡・三室間ノ谷遺跡	1991
45	群馬県埋蔵文化財調査事業団	融通寺遺跡	1991
46	群馬県埋蔵文化財調査事業団	書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡	1992
47	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	1992
48	群馬県埋蔵文化財調査事業団	神保下條遺跡	1992
49	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区	1992
50	群馬県埋蔵文化財調査事業団	二之宮千足遺跡	1992
51	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下川田下原遺跡・下川田平井遺跡	1993
52	群馬県埋蔵文化財調査事業団	元総社寺田遺跡I	1993
53	群馬県埋蔵文化財調査事業団	五目牛清水田遺跡（古代・中近世編）	1993
54	群馬県埋蔵文化財調査事業団	上戸塚正上寺遺跡	1993
55	群馬県埋蔵文化財調査事業団	白井大宮遺跡	1993
56	群馬県埋蔵文化財調査事業団	笂井八日市遺跡	1994
57	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下高瀬上之原遺跡	1994
58	群馬県埋蔵文化財調査事業団	荒砥大日塚遺跡	1994
59	群馬県埋蔵文化財調査事業団	行力春名社遺跡	1994
60	群馬県埋蔵文化財調査事業団	今井道上遺跡	1994
61	群馬県埋蔵文化財調査事業団	多比良平野遺跡・白石根岸遺跡	1994
62	群馬県埋蔵文化財調査事業団	二之宮宮東遺跡	1994
63	群馬県埋蔵文化財調査事業団	二之宮谷地遺跡	1994
64	群馬県埋蔵文化財調査事業団	飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡	1994
65	群馬県埋蔵文化財調査事業団	下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡	1995
66	群馬県埋蔵文化財調査事業団	小角田前I・II遺跡	1995
67	群馬県埋蔵文化財調査事業団	大八木屋敷遺跡	1995
68	群馬県埋蔵文化財調査事業団	東上秋間遺跡群	1995
69	群馬県埋蔵文化財調査事業団	内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡	1995
70	群馬県埋蔵文化財調査事業団	荒砥上ノ坊遺跡I	1995
71	群馬県埋蔵文化財調査事業団	野中天神遺跡	1996
72	前橋市教育委員会	中大門遺跡	1983
73	前橋市教育委員会	前箱田遺跡	1983
74	前橋市教育委員会	後閑II遺跡	1984
75	前橋市教育委員会	赤烏遺跡	1985
76	前橋市教育委員会	箱田境遺跡	1985
77	前橋市教育委員会	前山遺跡	1986
78	前橋市教育委員会	村前遺跡	1987
79	前橋市教育委員会	勝呂遺跡	1987
80	前橋市教育委員会	五反田遺跡	1987
81	前橋市教育委員会	柳久保遺跡群IV	1987
82	前橋市教育委員会	元総社明神遺跡VI	1988
83	前橋市教育委員会	地蔵前遺跡	1988

84	前橋市教育委員会	元総社明神遺跡VII	1989
85	前橋市教育委員会	元総社明神遺跡VIII	1990
86	前橋市教育委員会	平成５年度文化財調査報告書	1994
87	前橋市教育委員会	平成６年度文化財調査報告書	1996
88	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	青柳寄居遺跡	1984
89	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	柳久保遺跡群Ⅰ	1985
90	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	梅木遺跡	1986
91	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	柳久保遺跡群VII	1988
92	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	西三並遺跡	1988
93	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	前田遺跡	1991
94	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	中原遺跡群Ⅰ	1993
95	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	中原遺跡群II	1994
96	前橋市埋蔵文化財発掘調査団	五反田II遺跡	1995
97	群馬県市町村会館遺跡調査会	元総社稲葉遺跡	1995
98	西善団地遺跡調査会	群馬県前橋市西善鍛冶屋遺跡	1995
99	高崎市教育委員会	引間遺跡	1979
100	高崎市教育委員会	矢島遺跡・御布呂遺跡	1979
101	高崎市教育委員会	小八木遺跡調査報告書（Ⅰ）	1979
102	高崎市教育委員会	芦田貝戸遺跡	1979
103	高崎市教育委員会	日高遺跡（Ⅰ）	1979
104	高崎市教育委員会	大八木水田遺跡	1979
105	高崎市教育委員会	寺ノ内遺跡	1979
106	高崎市教育委員会	正観寺遺跡群（II）	1980
107	高崎市教育委員会	小八木遺跡（II）	1980
108	高崎市教育委員会	日高遺跡（II）	1980
109	高崎市教育委員会	御布呂遺跡	1980
110	高崎市教育委員会	芦田貝戸遺跡（II）	1980
111	高崎市教育委員会	日高遺跡（III）	1981
112	高崎市教育委員会	正観寺遺跡群（III）	1981
113	高崎市教育委員会	小八木韮貝戸遺跡	1981
114	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（Ⅰ）	1981
115	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（Ⅰ）遺跡範囲確認調査報告	1981
116	高崎市教育委員会	大八木遺跡範囲確認調査報告	1981
117	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（II）	1982
118	高崎市教育委員会	北新波遺跡	1982
119	高崎市教育委員会	日高遺跡（IV）	1982
120	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（II）天王前遺跡	1982
121	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（III）当貝戸・棗原遺跡	1983
122	高崎市教育委員会	長野北部遺跡群　中屋敷西(Ⅰ)・殿田・清水(Ⅰ)・舞台(Ⅰ)遺跡	1983
123	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（III）村北Ａ・天王前遺跡	1983
124	高崎市教育委員会	宿大類遺跡群　天田・川押遺跡	1983
125	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（IV）宝昌寺裏遺跡	1983

126	高崎市教育委員会	西島遺跡群（Ⅰ）藤塚遺跡	1983
127	高崎市教育委員会	舞台（II）・清水（II）遺跡	1984
128	高崎市教育委員会	（宿大類遺跡群）天田遺跡（II）	1984
129	高崎市教育委員会	柴崎遺跡群（Ⅰ）村間・富士塚前Ａ遺跡	1984
130	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（IV）上野前（Ⅰ）・大明神（Ⅰ）遺跡	1984
131	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（Ⅴ）柴崎前・村北Ｂ遺跡	1984
132	高崎市教育委員会	長野北部遺跡群　江原（Ⅰ）・中屋敷西（II）・上屋敷（Ⅰ）	1984
133	高崎市教育委員会	宿大類遺跡群(3)　山鳥・天神遺跡	1984
134	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（VII）矢中・村東遺跡	1984
135	高崎市教育委員会	長野北部遺跡群　中屋敷（Ⅰ）・舞台（III）遺跡	1985
136	高崎市教育委員会	西島遺跡群（II）	1985
137	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（VIII）矢中村東Ｂ遺跡	1985
138	高崎市教育委員会	（宿大類遺跡群）村北・矢島前・村東遺跡	1985
139	高崎市教育委員会	柴崎遺跡群（II）東原・富士塚・富士塚前Ｂ遺跡	1985
140	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（Ⅴ）上野前（III）・大明神（II）・五反田（Ⅰ）	1985
141	高崎市教育委員会	宿大類遺跡群（５）天神久保遺跡	1985
142	高崎市教育委員会	（宿大類遺跡群VI）万相寺遺跡	1985
143	高崎市教育委員会	西島遺跡群(III)	1986
144	高崎市教育委員会	長野北部遺跡群　六反田・中屋敷（II）遺跡	1986
145	高崎市教育委員会	柴崎遺跡群（III）新堀・根際・吹手西Ａ・富士塚Ｂ遺跡	1986
146	高崎市教育委員会	菊地遺跡群（VI）石神・五反田（II）遺跡	1986
147	高崎市教育委員会	矢中遺跡群（IX）下村北・砂内遺跡	1986
148	高崎市教育委員会	西島遺跡群（IV）	1987
149	高崎市教育委員会	水口替戸・石田遺跡	1987
150	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書	1987
151	高崎市教育委員会	柴崎遺跡群（IV）西沖・柳原・吹手西Ｂ遺跡	1987
152	高崎市教育委員会	矢中村東Ｃ遺跡	1988
153	高崎市教育委員会	谷津・道場遺跡	1988
154	高崎市教育委員会	並榎北遺跡	1988
155	高崎市教育委員会	島野村東遺跡	1988
156	高崎市教育委員会	矢島竹ノ内遺跡	1988
157	高崎市教育委員会	長野北部遺跡群　一丁田・榛名社西遺跡	1988
158	高崎市教育委員会	岡久保遺跡	1988
159	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1988
160	高崎市教育委員会	殿谷戸・旭・藤塚・隼人・吹手・峰岸遺跡	1989
161	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1989
162	高崎市教育委員会	西横手遺跡群（Ⅰ）	1989
163	高崎市教育委員会	道場遺跡群	1989
164	高崎市教育委員会	東町遺跡調査報告書	1989
165	高崎市教育委員会	上中居辻薬師遺跡	1989
166	高崎市教育委員会	西横手遺跡群（II）	1990
167	高崎市教育委員会	榛名社遺跡	1990

168	高崎市教育委員会	上並榎御料所遺跡	1990
169	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1990
170	高崎市教育委員会	上並榎下松遺跡	1991
171	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1991
172	高崎市教育委員会	西浦・吹手西遺跡	1991
173	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1992
174	高崎市教育委員会	高崎市内六遺跡埋蔵文化財発掘調査概要	1992
175	高崎市教育委員会	高崎市内五遺跡埋蔵文化財発掘調査概要	1993
176	高崎市教育委員会	柴崎遺跡群、南大類遺跡群	1993
177	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1993
178	高崎市教育委員会	東町III遺跡	1994
179	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告	1994
180	高崎市教育委員会	岩鼻坂上北遺跡 八幡原灰塚II遺跡 飯塚新田西・雁田遺跡 高崎市水田遺跡一覧	1994
181	高崎市教育委員会	浜川芦田貝戸遺跡III	1994
182	高崎市教育委員会	高関村前II遺跡　高関東沖・村前遺跡	1995
183	高崎市教育委員会	高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告 9	1995
184	高崎市教育委員会	東町IV遺跡	1995
185	高崎市教育委員会	並榎北II・III・IV・V遺跡	1996
186	高崎市教育委員会	下中居条里遺跡	1996
187	高崎市遺跡調査会	下之城村東遺跡	1983
188	高崎市遺跡調査会	下之城村東遺跡(II)	1984
189	高崎市遺跡調査会	日高遺跡	1984
190	高崎市遺跡調査会	八幡原大鼻・稲荷遺跡	1988
191	高崎市遺跡調査会	中尾村前遺跡	1988
192	高崎市遺跡調査会	上滝社宮司東・斎田北遺跡・下滝高井前遺跡・赤城遺跡	1990
193	高崎市遺跡調査会	昭和町I遺跡	1992
194	高崎市遺跡調査会	萩原団地遺跡	1993
195	高崎市遺跡調査会	東金井II遺跡	1993
196	高崎市遺跡調査会	上中居西屋敷遺跡	1994
197	高崎市遺跡調査会	岩押町I遺跡	1994
198	高崎市遺跡調査会	飯塚西金井遺跡	1994
199	高崎市遺跡調査会	高崎市倉賀野町下天神遺跡	1994
200	高崎市遺跡調査会	高崎市井野町矢ノ上遺跡	1994
201	高崎市遺跡調査会	上大類野地田遺跡	1995
202	高崎市遺跡調査会	元島名瓦井遺跡	1995
203	高崎市工業団地造成組合	京目町作道遺跡	1986
204	高崎天使幼稚園	矢中遺跡群（VI）矢中村北C遺跡	1983
205	太田市教育委員会	二の宮遺跡（第2次調査）	1987
206	渋川市教育委員会	中村遺跡	1986
207	渋川市教育委員会	中筋遺跡発掘調査概要報告書	1987
208	渋川市教育委員会	坂之下遺跡	1988
209	渋川市教育委員会	中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書	1988

210	渋川市教育委員会	市内遺跡III	1990
211	渋川市教育委員会	渋川市内遺跡IV	1991
212	渋川市教育委員会	石原東・中村日焼田遺跡	1991
213	渋川市教育委員会	中筋遺跡第５次調査概要	1991
214	渋川市教育委員会	渋川市内遺跡Ｖ	1992
215	渋川市教育委員会	渋川市内遺跡VI	1993
216	渋川市教育委員会	中筋遺跡第７次発掘調査報告書	1993
217	渋川市教育委員会	八木原沖田III遺跡	1993
218	渋川市教育委員会	八木原沖田VI遺跡	1995
219	藤岡市教育委員会	Ｃ４小野地区遺跡群	1980
220	藤岡市教育委員会	Ｃ４小野地区遺跡群	1981
221	藤岡市教育委員会	Ｃ４小野地区遺跡群	1982
222	藤岡市教育委員会	藤岡市年報１	1985
223	藤岡市教育委員会	緑埜地区遺跡群Ｉ	1985
224	藤岡市教育委員会	Ｃ４小野地区遺跡群	1986
225	藤岡市教育委員会	沖II	1986
226	藤岡市教育委員会	Ｆ２緑埜地区遺跡群II	1987
227	藤岡市教育委員会	一級河川中川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ	1987
228	藤岡市教育委員会	藤岡東部地区遺跡群発掘調査報告書	1988
229	滝前・滝下遺跡調査会	滝前・滝下遺跡	1988
230	藤岡市教育委員会	Ｃ７神明北遺跡　Ｃ８谷地遺跡	1989
231	藤岡市教育委員会	藤岡市年報４	1989
232	藤岡市教育委員会	小野西部地区遺跡群	1990
233	藤岡市教育委員会	藤岡市年報５	1990
234	藤岡市教育委員会	藤岡東部地区遺跡群発掘調査報告書II	1990
235	藤岡市教育委員会	Ｆ12藤岡平地区遺跡群Ｉ	1990
236	藤岡市教育委員会	藤岡市年報６	1991
237	藤岡市教育委員会	藤岡東部地区遺跡群（III）	1991
238	藤岡市教育委員会	藤岡市年報７	1992
239	藤岡市教育委員会	Ｆ12藤岡平地区遺跡群	1994
240	藤岡市教育委員会	藤岡市年報９	1994
241	藤岡市教育委員会	東京電力北藤岡線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	1995
242	藤岡市教育委員会	滝前Ｃ遺跡・稲荷屋敷遺跡	1996
243	藤岡市史編纂室	藤岡市史　資料編　原始・古代・中世	1993
244	富岡市教育委員会	小塚・六反田・久保田遺跡	1987
245	安中市教育委員会	三本木遺跡・落合遺跡	1990
246	安中市教育委員会	九十九川沿岸遺跡群１	1991
247	安中市教育委員会	池尻遺跡・池尻II遺跡	1991
248	安中市教育委員会	九十九川沿岸遺跡群２	1992
249	安中市教育委員会	田中田・久保田遺跡	1992
250	安中市教育委員会	九十九川下流遺跡群１	1993
251	安中市教育委員会	九十九川沿岸遺跡群３	1994

252	粕川村教育委員会	粕川村の遺跡	1985
253	粕川村教育委員会	長岡遺跡	1994
254	新里村教育委員会	峯岸遺跡	1985
255	新里村教育委員会	赤城山麓の歴史地震	1991
256	箕郷町教育委員会	下芝・原遺跡	1983
257	箕郷町教育委員会	海行A・B遺跡	1988
258	群馬町教育委員会	昭和56年度埋蔵文化財調査略報　保渡田II遺跡・中林遺跡	1982
259	群馬町教育委員会	中泉遺跡	1983
260	群馬町教育委員会	中林遺跡調査概報	1983
261	群馬町教育委員会	保渡田III遺跡調査概報	1983
262	群馬町教育委員会	保渡田IV遺跡	1984
263	群馬町教育委員会	福島遺跡	1985
264	群馬町教育委員会	北原遺跡	1986
265	群馬町教育委員会	保渡田荒神前遺跡・皿掛遺跡	1988
266	群馬町教育委員会	西国分I遺跡	1989
267	群馬町教育委員会	西浦北遺跡	1989
268	群馬町教育委員会	西三社免遺跡	1990
269	群馬町教育委員会	西国分II遺跡	1990
270	群馬町教育委員会	寺屋敷・蓋・鶴巻遺跡	1991
271	群馬町教育委員会	小池遺跡	1992
272	群馬町教育委員会	井出遺跡群	1992
273	群馬町教育委員会	南部遺跡群	1994
274	群馬町教育委員会	諏訪西遺跡	1995
275	群馬町教育委員会	町内遺跡III	1995
276	群馬町教育委員会	堤上遺跡	1995
277	群馬町教育委員会	庚申遺跡	1996
278	井出村東遺跡調査会	井出村東遺跡	1983
279	子持村教育委員会	黒井峯遺跡確認調査概報	1986
280	子持村教育委員会	押手遺跡発掘調査概報	1987
281	吉岡村教育委員会	平石遺跡群発掘調査報告書	1988
282	吉井町教育委員会	道六神遺跡	1986
283	吉井町教育委員会	下山遺跡	1990
284	吉井町教育委員会	町内遺跡発掘調査報告書 1	1995
285	甘楽町教育委員会	甘楽条里遺跡	1984
286	甘楽町教育委員会	甘楽条里遺跡	1985
287	甘楽町教育委員会	甘楽条里遺跡	1989
288	松井田町教育委員会	松井田工業団地遺跡―遺構編―	1990
289	松井田町教育委員会	国衙遺跡群II	1992
290	中之条町教育委員会	横尾地区遺跡群I	1994
291	中之条町教育委員会	横尾地区遺跡群II	1995
292	吾妻町教育委員会	善導寺前遺跡	1996
293	昭和村教育委員会	川額軍原II遺跡	1993

294	佐波郡東村教育委員会	寺東遺跡発掘調査報告書	1984
295	玉村町教育委員会	金免遺跡	1989
296	玉村町教育委員会	上之手八王子遺跡	1991
297	玉村町教育委員会	神人村II遺跡	1992
298	玉村町教育委員会	尾柄町遺跡	1992
299	玉村町教育委員会	蟹沢II遺跡	1993
300	玉村町教育委員会	蟹沢III遺跡	1993
301	玉村町教育委員会	小泉大塚越遺跡	1993
302	玉村町教育委員会	赤城II遺跡	1993
303	玉村町教育委員会	藤川前遺跡	1993
304	玉村町教育委員会	平塚堰北遺跡	1996
305	尾島町	尾島町誌通史編上巻	1993
306	尾島町教育委員会	世良田諏訪下遺跡	1994
307	新田町教育委員会	新田東部遺跡群	1993
308	新田町教育委員会	境ケ谷戸・原宿・上野井II遺跡	1994
309	新田町教育委員会	中江田遺跡群花園遺跡	1996
310	邑楽町教育委員会	藤川堰遺跡	1996
311	山崎義男	上野国横野村大字宮田先史遺跡　古代文化12―11	1941
312	山本良知	宮田畦畔遺構調査概報　時報第25号　群馬大学史学会	1961
313	尾崎喜左雄	北群馬渋川の歴史　北群馬渋川の歴史編纂委員会	1971
314	福田義治	天神遺跡A区におけるニツ岳火山灰(FA)層下の水田址の概要　群馬文化224号	1990
315	小田澤佳之	柄田添遺跡　第4回東日本の水田跡を考える会―資料集―	1992
316	群馬県埋蔵文化財調査事業団	年報15	1996

本稿は「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成7年度職員自主研究活動」の助成金を受けて実施した研究成果の一部である。

研 究 紀 要 14

平成9年3月22日発行

編集・発行　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県勢多郡北橘村下箱田784－2
Tel（0279）52－2511㈹

印　刷　　朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社

BULLETIN
OF THE
GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION

XIV

CONTENTS

On the earthenware inscribed with the cipher
from Shimotakase uenohara Site, Tomioka-city
.....by TAKASHIMA Hideyuki .....(1)

Look at the state of tumulus in detail, and meas ue
—— Outlook on 「Joumou Kouzuke Koboki」 and views of tumulus in YOSHIDA Shikei ——
.....by KISHIDA Haruo .....(27)

Report of The relics for Middle Ages from The
Miyosawa Akagi shrine, Miyagi-Villege
.....by OIKAWA Yoshiko .....(63)

Table of Mesurements of Hand and Pounding Stones (Kubomiishi and Suriishi)
in the Miharada site (Jomom period)
.....by NOTO Takeshi .....(67)

List of Agricultural Sites of Paddy Fields and
Dry Cultivation Sites in Gunma Prefacture
.....by NOTO Takeshi, KOZIMA Atuko .....(79)

GUNMA ARCHAEOLOGICAL RESEARCH FOUNDATION
Mar. 1997